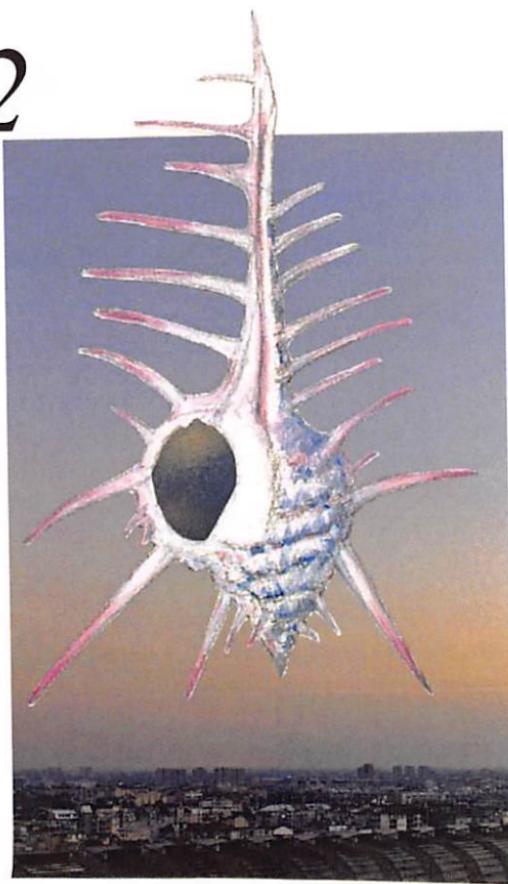


# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2020.12



令和2年12月1日発行(毎月1回1日発行)第68巻第12号 No.751

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もつと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまった北上した、すべての未開なもの同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的・精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

一一〇一〇年 一二月号 (通卷七五一号)

◇今月の二十首詠……嵯峨禦迎堂にて 田土才恵 2

■作品[A] 八乙女由朗・山下雅子他 4

柳澤君子他

28

安田明子他

72

佐川久光他

98

A C B A

■十月号作品批評

A……関根和美・伊東ミイ子  
坂上直美・近藤栄昭

B……小原香里・梅本武義  
C……田中富子

◇今月の二人

稻家和子・山口美恵子

24

室家洋子・山本 孟 60

15

『特集』 石田明彦

あつラカルト——番外篇——

短歌 タクシード日誌

——番外篇——

歌集論 ヒロシマから歌集『沖縄(新装版)』を読む

■特集・コロナ禍のなかで迎えた戦後75年

吉永惟昭・桃原良次・篠原まり子・光広祥子  
仲西正子・許田邦子・松瀬トヨ子

深山嘉代子・小野雅子・大槻知子

44

最近の歌誌より

(編集部)

89

一一〇一〇年の地中海……115

クリップ……116 神田通信……表3

(表紙デザイン) Tetsuro Kondo

香川進の生きものの歌 26

26

田土成彦 23

私と短歌との出会い (220)

220

◇シルクロード・カフェ——【責任編集】木村文子

70

千葉む津

27

■遊覧寄港 〈同じ「うた」でも〉 宮戸千佳子 68

68

■歌壇月旦 「介護の歌」生きるとは、人間とは 植垣美保子

69

「介護の歌」生きるとは、人間とは 植垣美保子

69

■歌壇月旦

90

■オリーブ集

115

◇冬のアンソロジー 〈生きる〉

養学登志子

66

(表紙デザイン) Tetsuro Kondo

## 嵯峨釈迦堂にて

田土 才恵

たたずまい凜と鎮まる清涼寺「嵯峨釈迦堂」なる通称も持つ

インバウンド消えてひさしき水無月の嵯峨野ひたひた雨に濡れいる

人力車客のおらねば長身を持て余し立つ橋のたもとに

幾たびも遊びし嵯峨野この角を知らず清涼寺やり過ごし来て

清涼寺おぐらき内に朽ち果ててしまいそうなるまいぶつきれ名物裂は

名物裂と覚えしかの日思わざる出会い叶いぬここ清涼寺に

回廊をそそと行きたる若き僧会釈のあとを本堂に消ゆ

人おらぬ池の面に描く水の輪を飽かずながむる水無月の寺

昭和十七年生まれ

昭和三十九年、地中海人社。

「亩の会」所属。歌集に

「かざぐるま」「風をまとめて」「  
風のことづて」がある。

奥庭に落ち来る雨とアメンボに遊ぶコロナの六月尽を

清涼寺境内斜めによぎりゆく子らに馴染める寺というものの

體しゃぶに今宵は淡く酔いながら梅雨の晴れ間を京にくつろぐ

カントリー・ミュージック響け「じゅうと屋」にわが心にも深く大きく（カントリー・ライブ）

カマレード・ライブに高鳴るエレキ・ギター今日のひと日をどっぷり浸かる

メタリックの光り返して鳴り響くエレキ・ギターと共に酔いたり

バンジョーの丸みより響く音の輪にカントリー・ミュージック草原をゆく

手馴れたるギタリストなればカウボーイハットも馴染むカントリー・ミュージック

三時間を歌い演奏する姿体力とその高鳴りまぶし

スチール・ギター加わり幅を拡げゆく終演前の高揚もまた

今日の日に巡り合わせし人の輪の余韻静かに広がるしばし

今を生きいまを楽しむ幸せをカントリー・ミュージックに重ね合わせて

# 作品 A

八乙女由朗

紙衣

・柴

山野幸司農

・沖

令和なる元年詰の大晦日兄弟子の白きお骨を拾う

チャンポン釣り上手な寺の子ベンケイに串刺しにして並べし焼き魚  
ウイルスとう見えぬ悪玉が人の世を統べんとなしおり緩みたる世を  
手振りでディサービスへ運ばる妻のしぐさは悲しきものを  
ころも脱ぎて仮のおらぬ身となりぬあからさまなる身を曝すなり  
柿の渋ぬりたる魚網は長持ちし幼き時代を豊かになせり  
就学前自在に折りし折紙のわざあらずして折紙は鶴

山下雅子

ゆとり

・習

横田敏子

初蝶

・福

雨あがりふと町へ出て見よう一年ぶりに味わうゆとり  
もの言わぬ白蓮秘むるや真さかりの春を統べたる白のけだかさ  
塙越しの白き參見ゆ知らぬ間に予報どおりのこぬか雨降る  
飲み止しの湯呑みそのまま卓の上に帰りきてひとり安らぎのあり  
へそありのあんばん提げて歩みしは昭和の銀座燕合羽の父と  
「あらら又漏らしちゃったの」「だってママ僕自動なんだよ」四歳の児は  
廻りいる観覧車の灯り点々と夜空の闇のそこのみ動く

お互いに体揉み合う冬の部屋笑い転がる妻達磨さん  
樂園の地上に生きし者らの叛乱なるべしコロナウイルス  
放棄地に斧振り下ろすノイバラの太き根方が地球を掴む  
悩み等蹴とばし逃げる孫達の鬼はいつでもじいいの仕事  
一年のすべてを農に統べらるる今の幸せ米を食らわす  
「ここ搔いて」孫の寝そべるリビングに時間は止まり幕が降り行く  
畦越えにくるり畠舞う老体の着地田中蛙となれり

コロナウイルスのマスク姿に甦る原発事故に怯えしかの日  
水替えてパン屑撒きて鳥を待つコロナ忘れる今朝の晴天  
この空はきみのものだよ初蝶のか弱き飛翔しばし目に追う  
ひそやかな匂い立ちきて懷かしき時間のひそむ母の箪笥は  
玄関を開ければひらり御歯黒蜻蛉今年の盆は子ら帰り来ず  
「庭のゆず」と冬至の朝に持ちくれし小さけれどもひやつやと八つ  
散るために咲く山茶花か道のひとところ紅き花むしろ敷く

吉永惟昭

ひとの名

・熊

市原志郎

生きている

・萬

日向ばかりいらだち募る物忘れあのひとの名が思い出せない  
嘘まじりの告白だったあの頃を嘲笑うがに鶯の啼く

散りしぶき慕情もてくる梅雨なれど被害なしには季終らざる  
難民のあふれし戦後が原点か五フィートの巨人緒方貞子女史  
ひもとけば我が人生も流行歌とともに歩みし戦中戦後史  
改めて思う程より風化せる長崎がある妻の被爆日

忘却はさせじと力むもかにかくに退方にゆらぐ妻の被爆日

朝井恭子

古里

・森

セピア色の思い出たどる母の忌に若き僧侶の説教長し

陽に温む庭石の上の秋あかね空配かそく翅休めおり  
父母の墓詣で来て弟と肩並め歩む古里の町

合併を拒みたる町さびれしと弟ばつり本音をもらす

歌会終えくつろぐ我に弟の電話みじかく叔母の死を告ぐ

レース糸編みいる夜更け指先に心の迷い伝わり易し  
気ままなる独り暮しも又良しと友の電話にさり気なく答う

磯田ひさ子

浮かれ女

・森

うつすらとウイルスまとふか山門にくれなる絞り八重桜咲く

恐ろしさ少しく緩ぶウイルスの仕業をはやりやまひといへば  
むらさきのやまひ鉢巻垂らしたる伊達男すら休演になる

宿を変へ主を変へてひつたりと浮かれ女のことコロナウイルス  
呼応することの延期とりたてて否なかんづく東京オリンピック

刈り伏せの草こそなけれ兵糧にコロナ退治のマスクを備ふ

浅草の雷門に並みるたる人力車消ゆ人も消えたり

鳥二羽の影が横切る窓ガラス今日は冬の真中なんだ  
テレビのみ外との繋がりある日日はいつの間に冬過ぎて行くなり  
整わぬ我が文字悲し夕暮るる窓辺に日記つけいる時に  
のんびりとはやり歌など聞いており冬の日の夜私は生きており  
生きていることの不思議と思いたり夜は昔のうた聞きており  
嫌な事すべて忘れてしまわんと今日一日をうとうとする  
木香薔薇ゆらす風あり初夏めいた天気予報を聞きている時

市原やすひ

テレワーク

・萬

渋る夫誘い車椅子の初詣誰も居らぬ小さき寺に

車椅子なれば今年も廻り道くねくね小路を行く初詣

冬の空青く青く澄み行く日コロナウイルスのニュースに埋まる

休校の孫と息子のテレワーク非日常が日常となる  
コロナ禍の日曜静まり返りいて桜に雪降る弥生三月

窓伝う雨の零のその向こう黄色い合羽の幼子二人

いつの間に過ぎて行く日日いつの間に梅雨の雨に降り籠められて

大浪美雪

それでも

・森

ひだをなす風紋のうえ小枝もて擦したる如き足跡つづく  
雨のなか池をへだつる対の屋に灯のいる見れば心寄りゆく

ウイルスに掛けかけたる身心に春のにがみのルッコラサラダ  
高波のくだける形に立浪草うす紫の花を立ちあぐ

との憂る朝の庭に藤の花己が香まといあるがままなり  
初夏のま白き敷は花のやぶ甘く香れるうばらのいばら

長梅雨に寒さ重なる令和二年それでも稻は花をもちたり

奥田清和 銘酒八兵衛

・大

神田鈴子 照一隅

・大

・大

兄と来し中学野球の発祥の球場跡に尾花なびけり  
なじみぬし法善寺横丁丹吾亭名をつらねるし文人いかに

逝きゆきし友らのわざを憶ひつつしみじみと飲む一合の酒

手みやげの銘酒八兵衛初しほり酒醸み初めし曾祖父の味

人類の進歩といふも何あらむ心失せずや宇宙開発

高名の芸人となれる教へ子のテレビの像に声かけるたる

文科省英語英語とさけべどもやまと心のゆくすゑ知らず

奥田陽子

冬日

・羊

おさな児を置きて来たれる娘と語る午後の冬日の移らんとして  
おさな児の描きし絵にて涙ぐむ吾となりしをわれの見ている  
白粥のふつふつ煮ゆる時を待つ窓より樹樹の芽を追いながら  
桃の花いだき歩めりこの春の雛の祝い思ひ得ざりし  
いかなご漁今年の不漁つたえ來てわがふるさとの春霞せん  
理想など遠く置き去り來たる世にひびきて若き香港の声  
問い合わせくる声痛し身を捨てて為さんとしたる何事がある

小野雅子

スパー

・羊

たつぶりと水を撒かれたグランドが白みを帯びて試合はすすむ  
いつ見ても散つて木の葉散りつけ地をうづたかき黄に変へてゆく  
地震ぶりて案する人の今はなく人ゐてこそその土地なりと知る  
赤ちゃんも沖縄人の顔して「鶴瓶の家族に乾杯」を見る  
男の手も伸びてきゅうりを選びるスーパー・マーケットの五時  
スーパーの駐車場にて赤い灯を振る男すこし腰曲がりたり  
母の母スペイン風邪に死にしとふ百年前がにはかに近し

うら若い妊婦の足取り確かなりはちきれそうな青空のした  
産婦人科のロビー明るし静けさをもみこむように光は満ちて  
幼子は床の模様をついついとついばむように迫つてゆけり  
生むからだ生んだからだが健やかな香り放てり産婦人科に  
父親の腕の中に眠りおり子はカルミンをしつかり握り  
「落し物入」の中にはふにゃふにゃのピンクの象が笑つておりぬ  
産声のあがるかたえを生まれ得ぬ子を持つ女がひつそり過ぎる

よく飲みてよく頂きしも殊更に居たまなき今日の梅雨空  
明らかにひとつ落ちいる無花果のその後に続くうつつをみつむ  
聞き捨てし友の言葉の蘇る〈思い出たけで生きてゆける〉と  
着地する小鳥のように散る落ち葉進むほかなきわが歩みなり  
繰り返しブラシをかけいるこの動作次のステップ拒みおらんか  
欠点か弱みか綻び見てしまう言いえざりして寂しきものを  
いかほどの記憶にならん入門書閉ざして窓の明るきに立つ

菊地栄子

ステップ

・羊

「照一隅」の言葉を胸に生きし人中村哲の足跡消えず  
イヤリング、指輪、時計を外しつつ今日のひと日の柵ほどぎゆく  
退院の帰りに購ふ胡蝶蘭わがささやかな心祝ひ  
水玉のガーネのマスク届きたり友の手縫ひの針目やさしく  
同窓の三人の逢ひは三年ぶり互にマスクの品定めする  
絶え間なくSMSを送りくる休校中の孫の退屈  
野球なら二回表の攻撃とふコロナの終息いよよ遠のく

## 草刈十郎

卒寿

・世

## 小林能子

マスク・二〇二〇

・羊

コロナ禍と暑さのなかに甚平で力まず日々を生きてゐるなり  
世界中の感染者の数死者の数をののくごとき数字並べり

町焼かれ衣食住なく国ぢゅうが裸にされて戦終りぬ  
包装を解けばメロンの香を放つ甘くゆたかな大地の恵み

いつも会ふ人の名さへも浮かび来ず長寿の道の諸行は無常  
ページをばめくればかびの匂ひしてアルバムの母まだ若かりし  
ながらへて卒寿祝へど現世は長寿といはる生き地獄なり

## 國井節子

手習ひ

・春

風わたる池の斜りのさくら花コロナ自肅に人影もなし  
今すこしこの世に生きて花を見む佐保川桜われ一人じめ

墨磨りて肩の力をほぐし書く八十の手習ひ筆にまかせて  
一人居に馴れし二月の庭に咲く今年の木瓜の花のあかるさ  
二人して植ゑたる八重の梅の花見上ぐるばかり人の恋しき  
わが生れし「昭和の日」の空晴れたるされども暗しコロナ居座る  
誰も来ぬ誕生日の空とほく住む娘よりメールと励ましの花

## 河野繁子

花筏

・雁

## 近藤芳仙

見えない

・信

マスク継う布どっきりと送り来し娘の断捨離をわが家に留む  
えごの花山法師へと移りつつコロナ禍ややに緊張をとく  
うごかざる雲などはなし混じりては離れていずこか姿を消せり  
はないかだ雌雄植えしに年の経てまみに新し実りを見つく  
葉のもなか実の成るこれの不思議さに心の満ちてさわやかな朝  
枝にいる蛙の食事窓に見え書きあぐねいる言葉のひとつ  
「だましまし付き合いましょう」と歯科医いう体の部品みんな頷く

枕辺に友の恵みの三春駒寒夜を花の夢路に誘ふ  
昨日までかすかに在りし片の目の光の失せてまごつくばかり  
かなしみも不安も薄き不織布のマスクに被ひ病院へ行く  
マスクして駆けて来る子をやり過ごしコレクサ播る風はもう初夏  
道路際にハコベラ、イヌノフグリまで馴染みて優し帰化植物たち  
自治会の福祉サービス給食も再開し「ウイズコロナ」の暮らし  
「アマビエだるま」と五輪音頭を踊りたり漂ふごとく夏の夜の夢

## 近藤栄昭

コロナ

・虹

梅雨の中やまぬ駅前再開発新築マンション濡れつつ伸びる  
甘やかな雨の匂いをかぎながら階数えゆく空への運動  
東京を追いかけ増えるコロナの数逆転するなこのままこらえろ  
コロナ下の恐れの中のガス爆発郡山の記憶とどまりいるか  
with という言葉はやめてコロナの禍決意と敵意持つてあらがえ  
「爽やか」は街の景色に消えてなきコロナの憂り重く沈殿  
籠もり居に老いの重なるコロナの禍幾つの歳の日常くるか

# 坂上直美

酷暑そして秋

・天

# 佐久間すゑ子

京鹿の子

・湾

・福

ボストン遠しと思う炎熱の土灘青<sup>アスファルト</sup>の路人影もなし  
まだ売れぬ角の空地の雑草の丈高くして夏は過ぎゆく  
鳥を放て汝が胸奥の籠を開けこの秋天の青の果てまで  
秋深くみそらのいろはみずあさき天使の群の渡りゆくらん  
腕を振り野の道を行く幼あり秋天高く風やわらかし  
誰ぞ言ひし秋はさびしき季節よと華やぎ満つるコスモスの原  
ゆつくりときらめき落つるイチヨウの葉わが死のときもかくありたきを

# 坂出裕子

落ち葉

・洛

# 佐藤道子

思ひ出

・甲

水を見てこころうるほひ鳥を見ていこころ楽しむ川べりの道  
炎熱の日の夕映えのあかね雲この世のものにあらぬやさしさ  
葉の落ちて明るくなれる木の下に小鳥来てをりさへづりながら  
それぞれに所を得たる面持ちにかさなり合へる落ち葉と朽ち葉  
やすらぎを得たる心地にふりつまる落ち葉かすかに息を立てをり  
ささいなることに恼みてささいなることに安堵しひと日過ぎゆく  
夕空に浮かぶ満月とりわけ美しいと思はるコロナの世にし

# 佐久間晟

日乗

・湾

# 鈴木結志

法帖

・福

京鹿の子の花むらの前で眼を閉じる。長い年月が流れてゆく  
すぐには散ってしまう花の咲くのを待っている。あふれる思いを語り合いたく  
次はどこで語り合いましょう、などと花に向かって話しそうになる  
夕暮れの庭隅に京鹿の子の花が咲く、ほーとして雲の様に明るい  
誘われて出て行く夫を見送る。「お母さんゆつくりしててね」に胸が熱くなる  
花の道。今頃はどこに居るのだろう。長男夫婦に誘われた夫  
花の精に心解かれて帰って来た夫に手を合わせたくなる

桜、桜、新聞テレビに知るのみの花見などとは思うのみにて  
公園の桜に街道桜の美しさそれより誘いくれし子の心に酔えり  
梅雨曇る空を支える群れ桜広げ枝の逞しき太さ  
一齊に桜は散るから美しと教えられし戦時も遠くなりたり  
師の思いいまだも深く身にあればやはり偉大なりあの面構え  
お一一三好よ片山よ足立も居たけ喧嘩も繁く

もう誰もこの世には居ない寂しさに独り涙う思い出のなか

梅一輪春を先どる情念に道長公のうたよみがえる  
朝<sup>こ</sup>とに妻のみ靈に香手向け「高野切」書を私淑に学ぶ  
たまつ瀬のしづき虹織のせせらぎの水の言靈ひろいて歩む  
物語り「祇園精舎の鐘の声」古典の文字にひき込まれゆく  
「忍耐は仕事をささう資本とも」うたに計りて筆に綴りぬ  
王羲之の書を法帖として日々に習い九十余の生き豈かならしむ  
「え」も言えぬ「江鯉の出生」眼裏に生きを育む一杯の酒

関根榮子

衣被

・埼

高津砂千子

砂浴

・風

公園に子等遊ぶなき幾月の砂場に梅雨の雨溜りおり

花見さえ自肅せよとにせめてもとウェザーニューズのVRあり

白玉の蕾の時の長くして大山蓮華咲けばはかなし

二・三株の里芋を掘り熟々の衣被き食ふ初物はよし

コロナにて衣類の回収止められし人間のみが布に包まる

巣籠りは今迄もよと自嘲して老いとの短き会話の終る

無くともいい物増えおりて蒐集の土鈴がふいにからからと鳴る

関根和美

白雲

・埼

亡き義父の気配ただよう掘りごたつ田畠やハウス農機具のかげ

屋根裏のどすんどすんの音の主あらいぐま今日あみにかかりぬ

烙印を押さるる思いニュースより基礎疾患のことばが刺さる

死はいずれ免れざるものいつどこで如何にというに誰が手の及ぶ

「かずみちゃん」とちゃん付けに呼ぶ叔父三人弥生卯月丈月に喪う

われよりもさらにかなしみ深めゆくこの身ばかりが長らうと母

よき年を迎へん願い大空にしあわせそな白雲うかぶ

高尾恭子

春愁

・大

五月には家に帰ると人は待つ五月になれば五月は来ない

おとうとを護らねばとて背のばす卒寿を六つ越えたる母は

らりるれる麻痺もどかしく春闌けて人は唄わず杖うち鳴らす

新聞の記事を切りぬき叱られた叔父が施設にゴドーを待てり

たれこめて花ひと枝をながめいるホタルイカなど酢味噌にあえて

うすべにハナミズキ咲く空はれて何をぐすぐす足ふみならす

五月雨の友の便りは渾みたり悪性リンパ腫見舞いは不要と

八日目の蟬が車道をよたよたと動きいるなり猛暑の真昼  
やわらかき土に潜りて砂浴びす雀のひたすらわれに氣付かず  
電車ならばスイッチバックで息をつくとりあえず我は鉛筆削る  
お福分けのアジの七匹風干しにすべく時かけ捌きてゆくも  
わが脳アルファベットの飛び交いで礼状書くはなかなか難し  
ひとり旅馴れしとはいえ山なれば心たいらに登りゆくなり  
病む友の心つづみて欲しきものバールカラーのハンカチーフよ

滝田靖子

夏の隙間

・新

真昼間の浅き眠りの中にきてあなたは何を悲しむのだらう

戸惑ひも蚊遣りの煙も揺らし行く夏の隙間に入りきし風は

過ぎ行ける風は狂氣の手を広げ残酷な夏の記憶かき混せる

柚子の香の残る身体に眠りゆかむ明日のことは明日煩ふ

真夜中の雨ざあざあと降り注ぎ冷たい胸をまた冷やしていく

日和見の風見鶏どこを向いてる見えないものに振り回されて

医療者への拍手は雨の神宮に轟く万歳の声に似てゐる

竹下妙子

里山

・霧

廻道のかたへに御座す道祖神おひとりなれど微笑み給ふ

霧島は端然とあり 地上の汚辱 人世のかなしみ

人界にあらざるもの優しさをもちて里山夕陽をまとふ

ひこばえが一樹となりて花を持ち白さるすべり梅雨明けの庭

散るときはの危ふさも見き夜ざくらの花の盛りの下くぐり来て

ひとひらの枯葉に射し夕茜たちまち闇の色に染まりぬ

暮れてゆく陽の静かなるくれなるを。夫とも思ひ吾とも思ふ

## 田 土 成 彦 十 円

・ 宙

## 虎 谷 信 子 八 哲

・ 伴

遠い記憶か何かのやうに道ばたの雨に濡れてゐる子供自転車  
 川霧の狭霧のかぎりつつみる橋わたりゆく一期一会に  
 動かなくなつたクレーンが霜天に高々とかかぐ赤色灯を  
 賽銭は十円なれば産土の神に願ひは言はず礼のみ  
 鉄製の箱に賽銭投げこめば恥づかしいほど大きな音す  
 信州にもとめし蕎麦の花蜜の暗褐色は冬の夕空  
 懇念はあるやも知れずマッチの火消えて指先の残像しばし

## 田 土 才 惠

海峡の青

・ 宙

背後より声をかけられ励まされ三角点を踏みしこの鞆  
 登山靴履けばそれだけあがる士氣われを支えて五時間は過ぐ  
 アップダウン尾根道をゆく時の間を見え隠れして海峡の青  
 自信など皆無なれども憧れは余生思わば決意に変わる  
 嫁ぎ来てこの地に馴染むわれならん庭の椿も無花果の木も  
 旅に見し瀬戸の内海覗みたちわが産土の岬もおぼろ  
 下灘の駅近くして菜の花は霞み海辺に淡きひろがり

## 玉 井 綾 子

苦しむ

・ 羊

## 中 島 央 子

時間が止まる

・ 森

コンパクトの鏡の汚れ何日も拭かず朝も眉間もくすむ  
 出社指示に開けるクロゼット冬物のスーツが初夏の息に苦しむ  
 三密は危険と見え水無月の額紫陽花に息つく夕べ  
 大通りの先に夕焼け長針が今夏は咲かぬ花火連れ去る  
 三密の懸念に消えゆく夏祭り倉庫のラムネに炭酸の増す  
 地上への階段一段上がるごと身体のネジが巻かれる月曜  
 公園に母は両手で子を叩く潰すがごとく包むがごとく

コロナ禍のなかりし岩手にも 被災者遂に出づ 遠野は如何に  
 銀杏落葉ふみて 歩みし遠野なり。なつかしきかな。郷の風景  
 からまつの黄葉 散りしなか行きぬ。曲り家今もつつがなきかな  
 八朔の行事もすたれ 草餅をふかしし釜の 残りしままに  
 八朔に 母の手づくり草餅を、近所にくばる習ひも無くて  
 八朔を祝ふ行事も なきままに、今年の長梅雨 やうやく明けぬ  
 長梅雨の明けて八朔 猫らにも、ゴチソウだよと あれこれあたふ

## 中 島 央 子

時間が止まる

・ 森

テーブルに紫陽花咲かせ人遠く何處へもゆけぬコロナの休暇  
 自宅待機まづは書棚の片付けをながびく程に時間がとまる  
 さつま芋一箇が主食の戦時中おもへばこれしき自宅籠城  
 夕暮は日に日にのびてコロナ禍に蟻居の部屋の隅まで照らす  
 五十年使はぬミシンに油差し娘は毎日マスクを縫へり  
 ふはふはと午後を無聊に過ごしたり相棒なきわれ「相棒」を見る  
 ウィルスに束縛されて気付かざる歩数乏しき脚の老化を

## 中 島 義 雄

諦 鏡

・ 岡

三年が過ぎたねとつぶやく妻のこゑ聞こゆる墓を平手に洗ふ  
 今も日に遡りて消えぬ表情は三児産み終へ誇りたる貌  
 恋ふこころ頭では消えて鉢虫が部分ばかりの思念を煽る  
 まだ年始はや十二月疾風のごとくながれて面影も近く  
 わが骨を拾ふ族のわやわやと賑はふ夢の醒めて春眠  
 裏山に鳴く衆のこゑ絶えてやうやく眠りの測に行き着く  
 捨つるべき時には捨てよと天のこゑ死神もいつか友となりつつ

## 永塚節子 祈り

・銀

## ばばりょうこ 北の犬へ

・鹿

・鹿

都会より帰る電車の窓の外海見え始め ああ息を吐く  
 寒川さん八方除けの神なれば信心浅くも拍手を打つ  
 参拝のあとは昼食信号を三つ数えてそば屋を探す  
 変わらずの検査結果に手を合わす鎮守の森にうぐいす鳴けり  
 しなやかに否したかに生きのびる雑草の知恵われも持たなん  
 クレヨンの緑の色がもう足りない青葉の箱根はまだまだ続く  
 寄りてくる鯉と遊べり七ヶ月続くコロナ禍今は忘れて

## 萩

## 葉子

ノコンギク

・銀

## 浜谷久子 未 来

・未

ノコンギクゆれて淋しい神無月ふるさと遠いと話し合いたり  
 前にまわしたリュックの端をつかんで電車に揺られている  
 五街道とともに歩いた縁にて会えば話のつきることなし

せせらぎの桜花びら水底の影ともないて何処まで行くのか  
 何処より刈りきし菖蒲軒にかけ菖蒲湯たでくれし父を偲びぬ

二階から降りきて「只今」コロナゆえ在宅勤務の娘をまち夕餉  
 夜おそらく新任地より母の日に息子の電話あり声にほつとする

## 白子れい

籠もる日々

・洛

## 浜本美美 竹の秋

・竹の秋

・夢

冷えしるき朝の水面に水蒸氣ゆらゆらと立つ白々とたつ  
 花散りて水面彩る花筏華やぎの無し今年のさくら

いつもより長く咲きいてチラチラ疲れ果てしか花ひら小さし  
 さみどりの滴る石畳切りコロナ消めるを朝あさ祈る

西日背に庭の草抜き日課とすコロナに閉ざされている吾の日々

籠もる日々自と対峙なすに悔い多し彼の日この時から来らず  
 九十余年生きてはじめて出遇いたりコロナウイルス見える魔物

国蝶のオオムラサキを桜の枝に見し日は遙かまぼろしの蝶  
 曇り日の入り江の潮くろぐろしづが体内をみている」とし  
 節子さんの心づくしの鉢植えの鷺草咲きて春から夏へ  
 鉢植えの枯葉の前に佇みぬ竹の秋竹の秋とつぶやきながら  
 世界中がおかしくなった新コロナ花ほとときす今年も咲きぬ  
 われら二人に残されている歳月をかみしめながらまた腹立たし  
 部屋の雨戸いっ寸明ければ今日の日の光さし入りああ朝の来た

ワンピースとお揃いのマスクで華やきぬ病院通りもこうでなくつちや  
 とり敢えずは空っぽのお頭を埋めようと□・△・○・×で  
 いまだ雨・風は無けれどスピーカーで「過去最強クラス!」と台風喚起  
 先ずは先にコロナウイルス 炎天下 台風とつづき年なれば過ぐ  
 パーカーで紡ぎだしたるお手紙に三菱のBでお返事したたむ  
 くぐもりて愛犬の死を伝うるは子を喪いし父親の如し  
 さびさびと弔花を送りぬ北の犬へ 父親もどきへの哀悼をも込めて

檜垣美保子 ゆうぐれ

・昂

藤森巳行 敬老の日

・銀

朝ぼらけ冬の桜のこすえから小さき鳥のかげがとびたつ  
膝にくる九歳の孫をすわらせて膝ゆらしつ窓の夕闇  
四歳の男の子たかだか掲げたる一枚の札「ひとこそしらね」  
散りどきを申しあわせて並木道はなびらはなびら花水木散る  
きょう五月メーテーに人の声のなく蜂の羽音のまつわる真昼  
わたくしの記憶になくて山道に月見草摘みき友の記憶に  
ゆうぐれのいちょう一樹を目印につどうがごとき秋のひかりよ

福田庸子 マスク

・今

船田清子 たしかなる春

・天

しめりたる夜の大気をふくらませ森より届く樹樹達の息  
重なりて葉はひたすらに身をほどく水の流れに下野河骨  
光鳳の書に刻まる上皇の無念ひたすら隠岐にとどまる  
咲く花を雪間に伸ばす白菜の冬の蓄へさまざまと見つ  
ガーゼマスク二枚で民の不安とする自信たっぷり縫理の資質  
穢れ取る水の清めは古くより村の社が教へてくれし

藤田美智子 横顔

・新

牧雄彦 この坂の果て

・大

無著菩薩立像に長く向かひる君の横顔ひとり占めする  
ワインカードを出さず右折してゆけり直前まで何を迷へる人か  
トリチウムつていつたい何のことだらう相馬の海の底のざわざわ  
除染土を運ぶトラックにはさまれてわが乗るアクアは小さく息する  
しづかなる君の寝息を盗む夜の間に艶めく柿の若葉は  
氣弱なる男児に勢ひつけくる水鉄砲の放つ直線  
謝らぬ理由がこの児にきつとあるブルーハワイに舌を染めつ

孫連れてイオンモールへ出かけたりコロナ禍の中敬老の日に  
八千円の玩具を孫に買ひ与へ我はパンツを買つて帰りぬ  
我に似てハンバーガーようと好き孫のトッピングカボチャの天ぷら  
敬老の日に結婚して五十二年新郎新婦は後期高齢者  
竹箒振り回して椋鳥を追ひ払ふ妻魔女かも知れぬ  
無職にて不要不急の人となる終日籠りてすることもなし  
日に二回生きる力を湧き出だす題目上げて生命の充電

萩・すすき今年花なき仲秋を月天心ににこやかに笑む  
此岸なる苦しき人生に堪へよとや弥勒はなべてやさしく笑むと  
落葉松よ雪を払ひて細枝なすみどりのトレモロはや奏でなむ  
ホーケ? 聞き耳立つるしばしの間 ホーケキヨと確かなる春  
老人用「おばんざい弁当」日替りに売り出す店の身近にあらば  
朝じめるみどりの葉に座し白つめ草の花輪を編まむ空地もあらな

幼子も老いも死にけむ沖綱のかの戦ひを知る青き海  
那覇の街掘れば人骨出来とふその土の上にビルそびえ建つ  
「ありがたう」最後のメールを送信す姉との交信今朝で終はりぬ  
今ごろは彼岸に着きてたらちねと笑ひあひる姉かとおもふ  
手押し車押しつつあへぎのぼりゆくおうなに遠しこの坂の果て  
幸せなりしとほき日のこと夢見むか車椅子にて居眠る老いは  
海峡は波しづかたり秋の日をはじきて潮目をくつきりと見す

松浦禎子 懐の中

三木まり 蒼・昂

宮本靖彦 ブッキー

凌

・伊

田沢湖まで辿れば近きふるさとの杉山めぐる懐の中  
夫方の人々と囲むいとこ会はずはふるさとのキリタンボ鍋  
祖々を共にす親子であればこそふるさと近きにまなこ輝く  
ふるさとの紅葉を写す動画にてたちまち結ぶえにありたり  
わが子一人生れ育ちし家跡に花園広しほうき草囲む  
大氣の中擦れ合うときの風の声残し去りしはいすれのひとか  
山脈に囲まれし田の面暮れてゆく夕焼け雲よまたの日までを

松永智子

窓

・嵐

宮本靖彦

ブッキー

・凌

不意なりぬ一羽の鶴声たてず窓ちかく飛び視界より去る

サングラスかければあたらし日を反すビルディングまた行く人のかけ  
閉づるべく窓に立ちみる空高しとほしつひなるかなしみならぬに  
わらはへは夜の衝をしやくりあげつついぐまでゆく  
午前二時にんげんの声間遠なりかけあはあはとゆくらしき声  
にんげんのことばただよふ夜の闇徐徐にかわくを照らす半月  
無援なることばのひびきやはらかく東の空に十七夜の月

三浦好博

生きてるか

・銚

三好聖三

うららか

・伊

蜘蛛の巣のレコード盤が秋の陽に虹色に照る森林に入りぬ  
挨拶は先づ「生きてるか」遠方の友が新米送り呉ると  
旅好きはもう八ヶ月慎ましく清く正しく自粛せりけり  
風呂唄に良き詩吟なりこの宵は音原道真だけで行かうか  
富裕税が最善の策とコロナ禍に米大富豪ら声上ぐ我も  
蛞蝓は賢しされどニーロンの十万倍の吾は賢きか  
彼岸入りのグランドゴルフ場の上帰りたくない燕も遊ぶ

雲は無くましろな三日月くつきりと明けやらぬ空の春まだ浅い  
輪郭の鋭い三日月掛かる空蒼々として鳥還りゆく  
北へ還る鳥の群れは整然と山の尾根超え夜の闇を超え  
銀いろの光を放ちその一機西へ西へと 尾を長く曳く  
春浅いもどり寒波の風強く更紗木蓮みな北を指す  
秘め事のように息を吐くあさり厨の窓辺の光は夏いろ  
その姿見えない高みに鳴く雲雀ここにいるよ、生きているよと  
歌友に教はり植ゑしズッキー二実の形よく味も又好し  
豚肉とトマトで煮込むズッキー ソレントの味煮りほのかに  
京歩むマスクの顔の皆やさしコロナ緩める四日連休  
彩りを街に与へし徳島そこう六月見しに今日廃業とは  
かつてなき暑さも重陽節近くひそやかな風雨戸より入る  
口喧嘩絶えねど吾と生き抜くを選びし妻の寂顔かはゆし  
求め来しカンガルーの毛皮早や五年チョコレート濃淡古家になじみて

御代田澄江

蘇生、鄧の起伏

・茨

久我田鶴子

雀の帷子

・羊

I C U に運ばれ死線をさ迷ひな圧迫骨折心不全発作  
I C U より蘇生一年新型ウイルスの災禍はあれど生き抜かんとす  
買ひ占めし人居るからに國産のトイレットペーパー店より消えぬ  
天候の日替り定食変化激し温帶性気候はいづくへぞ去る  
「逃げて下さい」声嗄らしても逃げぬ人らいかんせん涯の崩るるまでも  
底こもる冷房の音止みし間に雀らの声呀えざえ聞こゆ  
亡き夫の表札掛け置き八年か今も夫に譲られ暮らす

帷子は雀のなればあさみとりひかりを透きてさやとゆらげる  
庭の草たんぼの草と思ひしもベランダに来て花咲かせをり  
種もみを水に漬けるころ咲くとたねつけばなの名づけはありぬ  
苗代の水のかがやき引き寄せて種漬花の咲けるベランダ  
火を囲む暮らしに戻りたきわれか地に足つかぬ空間に住む  
強風にけふは黄砂が飛んでくるなにかより増と言ひかけし唇  
種を蒔きはぐくむ時間 わたくしに蒔かれし種とわが蒔きし種

茂木 畑 実盛首洗塚

・埼

「二か月遊んでました」と片山津温泉の夕べ仲居の小母さん

実盛の首洗塚見んものと友と一夜を冷酒に酔ふ

チェックイン検温計あてられて加賀の宿りの一夜の始まる

義仲が実盛の首抱く像などあり池辺にいまし合歎の花咲く

実盛は妻沼の生まれタクシーの運転手君は「つまぬま」と読む

取り敢へず買ひ置く本のたびたびに部屋狭まるは自業自得か  
「腹を痛めし」を「股を痛めし」と誤植され読むも恥づかし晶子激怒す

もとむらしげと 初孫

・そ

・十二月の歌・

吹き降りの夜を濡れくれば

さむざむと

電飾の星まとふ聖誕樹

小野茂樹

(黄金記憶)

階段を一つのぼりてみる景色孫うまれたる知らせが届く  
新しき命となりて祝杯を妻とあげたりハレの日なれば

初夏の日を浴びて光れる青若葉わが初孫はみどりの男の子

柔らかく息子を抱きしあの夏の写し絵のことく子が孫を抱く

ますぐなる高速道路のひた走るその果てに待つ愛しき赤子

わが命うけつぐ柔きものをこの手に抱きほろほろといふ  
ほそき身に生命を宿し生み出しう天晴れならん母たるもの

今年は、小野茂樹の没後五〇年もありました。「現代短歌新聞」99号(6月発行)に「時代を超える歌の力」として書く機会を得ました。読んでいただけると幸いです。  
『短歌研究ジュニア』はじめて出会い短歌100』(千葉聰編)という本が出版されました。その中に、地中海の小野茂樹と桃原邑子の作品が入っています。イラスト入りのハンディな本、ただ今、書店にも並んでいます。

(久我)



石田明彦さんは、タクシーの乗務員をされている。

地中海誌上では「タクシー日誌」を書き続けてこの十月号で五十六回目を迎えている。タクシーの乗務員から見た人々の生態や街の動態を巧みに表現してきた。乗客は、会社員、外国人、デリヘル嬢、チンピラ、うつかり老婦人、自称霊能者の男、時に無賃乗車の天道虫等々。

空想するにタクシーの乗務員は、狭く閉ざされた空間のなかで「信」を前提にお客に背中を向けてする仕事。この「信」が壊れたとき強盗や乗車拒否があらわれる。

昨年の「地中海」十一月号の「ゆうらんきこう」では「蕩児を乗せて」という魅力的なエッセイを執筆されたことは今なお記憶にあたらしい。

石田さんの会社は、新型コロナウイルスの影響により、休業に追い込まれ、心が挫けそうになつたり、ハローワークに行くという歌も見受けられたが、この十月、営業再開されたそうである。

・乗務前に天気と野球をチェックして客との会話の齟齬なきを期す

石田明彦

どうか、石田さんのタクシー乗務員としての矜持が、恙なくひらいでいきますように。

(三好聖三)

## タクシード記　—番外篇—

石田 明彦

メールにて癌のステージ告げて来し友の秘めたる覚悟を思う

この朝け友の息衝く病棟にモルゲンロートよ耿耿と射せ

わずかなる坂登れぬと朝毎に拒食の娘が「ワンメーター」を呼ぶ

振り向けば酒嘆れの声で「なにさ」と言う半塗りルージュの厚き唇

ホストにも長幼の序のあるらしく若きが遣う敬語の誤用

先輩がホストの若きを責めている「ノリがない」とはいかなる事ぞ

當當と煎餅焼くは尊かり間口一間四代目の店

乗客の分かちくれたる割れ煎に今日の仕事が舌より明るむ

若き日は愚かなりしかさあらずか「七首マック」の歌を聴きつつ  
軽快な曲流しつつ街ゆけどビリケンの足まだ見つかぬ  
会場まで母親と行く五十男の婚活パーティーは八回目なり  
真面目なるお付き合いとぞ母に言う五十男の荒淫の貌  
死にかけし愛猫のため一日に六万円払うと老女つぶやく  
猫用の酸素テントに横たわる生きものならぬ姫の妾執  
港にて絵を描く男をそびらより人 犬 風が囲みいる午後  
夕陽浴びて老人たちの話の輪アパートまえの羅漢像なり  
「河心」なる言葉を識りて故郷の川の屈曲生き生きとみゆ  
吊り橋の支柱の残る河広く赤ゲットの祖父の渡る幻  
篋底の営業許可証ふるびたり悔いの残骸なれど愛しむ  
街を行きライバル店も鎖したれば小人われは深く安堵す

## ■特集・石田明彦 あつラカルト

### ヒロシマから歌集「沖縄〈新装版〉」を読む

石田 明彦

「地中海」令和二年七月号に「桃原邑子 自作を語る」の特集が掲載され、歌集『沖縄〈新装版〉』を読んでみた。すぐに優れた歌集との印象を持つと同時に、私には詠まれている沖縄戦が、生まれ育った広島の過去の慘禍と二重書きに感じられた。

今回、「あとがきに代えて」に掲出してある編集者の三つの問い合わせを手がかりにして、私なりの感想を述べたい。一番初めは、次のような設問である。桃原は「なぜこれほどまでに沖縄の歌を詠み続けることに拘ったのか」。

太古の海の中での男女の交歓のようで、桃原は相聞歌についても水準を抜く詠み手であったと了解できる。この清浄な海は、「苦海淨土—ゆき女きき書」に描かれた八代海にも比すべき失われた理想郷であろう。私には、「沖縄の昔」の一連の歌は、沖縄、さらに出生地である与那城への頌歌と読める。伝統的な民間信仰のニライカナイを、桃原の教養により修飾した世界とも思える。「詠み続けることに拘った」のは、それを讃嘆し続けることが、桃原にとって帰郷することでもあったからかもしれない。

第二問は「体験していない沖縄戦を、あたかも体験したかのように詠おうとし、また、詠い得たのか」

私は、「ここ」で桃原と同世代の原爆歌人、正田篠枝との比較で考えてみたいと思う。歌集『さんげ』の冒頭歌を引用する。

ピカッドン 一瞬の寂 目をあければ 修羅場と化して 凄惨のうめき

初句ピカッドンの促音「ッ」は原爆の閃光の強調であるのみならず、爆心と正田との距離も表しているといわれている。それは約千七百メートルであり衝撃波到達までの時間は、約三秒

された時代の雰囲気と、思石の理想主義的な傾向がうかがわれる。そのような夫と結ばれた桃原の「相聞風な」歌が、歌集中の小見出し「沖縄の昔」の一連に紛れ込んでいる。

である。被爆体験者の歌には、意識的にせよ無意識にせよ、被爆の位置、時間また本人や周囲の状況などのさまざまな隠れた情報が含まれている場合がある。勿論、これは歌の価値とは別問題としなければならない。ここでは戦争の直接体験者の歌の一侧面を言っておきたいと思う。では『沖縄』はどのように歌い始められているだろうか。

米艦の読谷沖にひつそりと泊つる無数なり島としも見ゆ

やや俯瞰した視点から、上陸直前の海面を埋め尽くす米軍艦船を詠んでいる。以下十首余は戦史の資料をなぞる形で叙事詩の一行のような歌が並ぶ。そして戦場のパノラマの各点を拡大してゆくと兵士や島人の個々の視点の歌となり、その中に作者の声も混ざって来る。ドキュメンタリー映画のようでもある。

先に述べたように、被爆者正田の歌集は、被爆の瞬間を起点に編まれている。この編集方針は、長崎の優れた原爆歌集でも同様に採られている。対して桃原は、歴史を書き起こすことから始めているのだが、間接体験からの果てしない近接の試みの一ひと理解すればいいのだろうか。また歌を引いてみる。

太き骨は先生ならむそのそばに小さきあたまの骨あつまれり  
『さんげ』

比較的よく知られた正田の歌である。この歌は広島市立竹屋小学校の校長と教え子の悲劇と推定されているが、正田は目撃していない。正田は、被災後、広島県西部に避難しており、後に伝聞に基づいて作っている。

まだ生きてこれの地獄を見よとてや雨あられなる弾われを外れゆく  
われを外れゆきたる弾が他のひとに爆するを見てをりこれ  
恍惚

(戦争 1)

桃原のこれらの歌を読めば誰しも、米軍の砲撃、鉄の暴風に逃げ惑った実体験と思うかもしれない。それだけ臨場感があり、結句の「恍惚」は、生死を分ける極限状態で偶然にも生の側に立った一瞬の安堵と放心をよく言い留めていると思う。この「われ」とは誰だろう。

壕わきの溜りの水に映したるわが餓鬼の眼よ少し笑まへよ

(戦争 1)

連作の流れからすると米軍の苛烈な洞窟掃討戦の終結後、恐る恐るチビリガマから出てきた若い女性の歌と読める。身づくろいしようとして覗く水面に映るのは、これまで鏡の中に見たことの無い別の顔である。この「われ」も誰だろうか。

この世ならぬ辛酸を舐めた沖縄の蒼生と、まとめてしまえば抜け落ちてしまうものがある。歌集によれば桃原は、十人の兄弟姉妹があり、少なくとも弟を沖縄戦で亡くしている。

私の考えでは、家族からの戦争の聞き取りほど、その話者に深く共感し、想像力の働きが精緻となる体験継承の方法はない。推測だが、「体験したかのように詠おう」とする一次資料となつたものは、家族からの伝聞ではないか。残酷な戦争被害にあつた、愛する家族全員に成り代わって歌おうとすれば「われ」にならざるを得ない。家族の体験談を中心軸として、日米それぞ

れの記録、県民の証言集、現地取材などで肉付けし、自らの歌を発展させていったのではないだろうか。

これは、正田が自分の直接体験のみならず、近親者からの話も素材としながら歌を重ねていった方法と似ていると思う。しかし桃原は、順調に戦争の歌の作歌活動ができたわけではないようである。たとえば、死んだおとめの爪の色の月桃、兵士の逃れてゆく摩文仁<sup>マツニ</sup>、ナバーム弾に細る詩歌など、自然、地名、習俗などをからめ詠み込んで、沖縄戦の直接体験者でない事実は変わらない。それを批判する評者もあつたと、私は桃原と親交のあった中島義雄氏から聞くことができた。

戦争の悲惨詠む歌ことごとく生命なる詩は間に逃げゆく

『桃原 沖縄Ⅱ』（沖縄—昭和60年）

歌集『沖縄』を出版して後の歌である。実感とも謙遜とも読めるが、一方で、体験せず想像で詠んでいるとの批判への婉曲的な回答でもある。私は、想像を否定してしまっては多くの人の胸に届く作品はできないと思う。様々な読みの内の一つだが、この歌の「間」とは「戦争」を指しているように思う。ここで編集者の問い合わせの「詠い得たのか」に戻ってみたい。歌集『沖縄』のあとがきに、桃原は、戦後三十年ほど沖縄戦を詠めなかつた理由を告白している。

今朝をわが切りてやりたる指の爪見れば紛れなき吾子のばら  
ばら

『沖縄』（良太の死）

良太の遺体が顔も身体も切り裂かれていたために、指の爪でやつと本人確認をしたという具体が、読む者の胸を打つ。連作の全てを引くことはできないが、母親として限界ともいえる傷の場面での観察は、驚くほど細密である。これらの歌を詠むために三十年の歳月が必要だった。併せて思うべきは、長い沈黙と忍耐の末に、年老いて証言活動を始める被爆者、戦争体験者の、語り尽くすまでやめようとしない姿であろう。

昭和二十三年頃、九州のある歌誌に戦争の歌を送ったら、戦争は歌にはならないと言つて載せてくれなかつたのを覚えております。（中略）一方、わが子の無惨な死の歌をひとの前に晒したくないという思いもありました。それで戦

後三十年間ほど相聞風な歌を作ることによって、その悲しみから逃げようとしてきたのでした。

昭和二十三年頃は、まだGHQによる検閲が行われていた。戦争を題材にした作品は、プレスコードに触れないよう細心の注意が必要だった。広島での事例では、出版物の書き換え、削除に応じようとしている者への恫喝の決まり文句は、沖縄に送つて強制労働させる、だったと文献に見ることができる。ここでは桃原が、戦後早くに戦争を作品化し、発表しようと試みながら一度、挫折していることに注目しておきたいと思う。年譜によると台湾宜蘭に一家が在住していた当時、長男、良太十三歳が「特攻機のプロペラに巻き込まれて事故死」している。

『沖縄』（良太の死）

桃原は、国防婦人会に加わっていたはずであり戦時下の規範意識に強く縛られていたと言つてよい。統後では、無理強いされた「笑顔」が戦死者の帰宅のたびに繰り返されていた。特攻兵は、十代か二十代前半の若者だろうか。上官に帶同されて本人が謝罪に来た場面のようである。桃原は、赦すけれど忘れないとも歌っている。

調べてみると当時、宜蘭には陸海軍の三か所の飛行場が設けられていた。そのうちの一つの写真を見ることができた。大きな川の傍に運動場を引き伸ばしただけのような急ごしらえの粗末な飛行場が映っている。戦史によると宜蘭の特攻部隊は、沖縄洋上の米軍艦船を攻撃目標としていた。恐らく沖縄人桃原の悲痛な心情は、一層複雑だったと思われる。

### 逝きし子のけふ五十歳の誕生日背広に替へやらむ学生服を

#### 【沖縄】（良太の死）

この歌は、良太の写真をながめながらのモノローグと取ればいいのだろうか。子供の成長してゆく過程が、心の中で架空の追体験となっている。同じ発想の歌の先駆は数多い。しかし桃原のように途中休止期間を挟みながらも、文字通り「死ぬまで」歌つた例は少ないのではないか。

私は、良太の死を歌うことで、桃原の表現力、また想像力は民衆の深い悲しみにまで届き、体験していない沖縄戦を「詠い得た」のではないかと思う。短歌には、他者に成り代わって詠む長い伝統があり、桃原は、当然それも自覚していたであろう。教職を退いた後、昭和五十四年（六十八歳）から沖縄戦の連作に取り組んでいるので、今この仕事をやらねばという切迫感もあったかもしれない。

三問目は、次のような問い合わせである。「戦後の沖縄からも目を離さず、その言葉どおり（香川進への返事）死ぬまで詠い続けた源には、どのような思いがあつたのか。」

歌集二部の『桃原 沖縄Ⅱ』の歌を追つてみる。

復帰前を貯蔵せし核の処理は問はずひたすらに祝ふ復帰十六年

（沖縄—昭和63年）

やや冷めた眼で、復帰記念の公式行事を見ている。脇道に逸れるが、また広島の例をあげると原爆の歌は、たとえ稚拙であつても生の声を多くの人が発信すべきだ、という考え方があつた。私は、「沖縄タイムス歌壇」選者であつた桃原も、それに近い立場だったような気がしてならない。

無数なる氣根はをとめのばさら髪榕樹の瘤なす彈痕に巻く

（沖縄—平成3年）

大きなガジュマルのようである。「無数」と言つてゐるから「をとめ」は複数である。乱れた髪が弾痕を巻く光景は、撃ち抜かれた頭部の傷とも、ガジュマルへの愈しとも受け取れる。この歌は、桃原の後輩であるひめゆり部隊への挽歌であろう。実景ではなく、イメージの中の沖縄の命を象徴する大樹と思つ。一方、良太の歌は、やや少なくなつてゐる。背景には桃原のキリスト教の信仰に基づく生死観があつたようである。付言すれば、正田も、晩年に仏教への帰依を深めている。戦争の慘禍を詠んだ、あるいは詠まさざるを得なかつた二人の歌人が、ともに宗教的な背骨も持つていたことを覚えておきたい。

ここでは私が立ち止まつた良太の歌。

平和の礎に名前探したが見つからずの便りに遺影の良太にこにこ

(沖縄一平成8年)

便りの主は元特攻兵と思う。集中、桃原は、元特攻兵との音信のやり取りがあつたことを詠んでおり「良太の分まで生きて」と伝えているが、その後連絡は途絶えたようである。何年ぶりかの手紙であろうか。事故のため出撃から除外されてこの男性が生き延びたとすれば、別離と再会、悔恨から和解へのもう一つの物語が、『桃原 沖縄Ⅱ』には隠されている。

平和の礎に桃原良太の名は刻まぬ良太よわれの胎に還れよ

(沖縄一平成11年)

歌集『沖縄〈新装版〉』の掉尾の歌である。死去した年に詠んでいるので絶詠と思う。学生服を背広に替えてやり、チャンブルーを味見させ、行く処にいつもいた良太への最後の言葉である。桃原は、礎に刻むことに迷っていた時期もあり、それを詠んだいい歌もみられる。しかしこの歌は、我が子が公的な記号となることを拒否し、血と肉の繋がった自己の一部としての再生を命じている。根源的な母性のエゴを歌っており、それが優れた反戦歌でもあることで社会的な拡張力を獲得している。

『桃原 沖縄Ⅱ』の歌の内容は、過去の再現を試みるより、時事詠が多くなっている。しかし改めて私が確認したいのは、桃原の訴え続けた沖縄の基地問題、本土との格差問題などは、現在に至るまで何一つ解決されていないことである。「戦後の

沖縄からも目を離さず」にいた理由は、桃原が、ぶれない主体であり続けたものもあるが、状況が許さなかつたということではないだろうか。

次に感じたのは、桃原の一種の屈折である。歌集によれば桃原家は、琉球王朝の五大士族の一ツ馬氏家(バシ、ハウジとも)の分流である。沖縄の女である桃原にとって自尊心の根拠であったのは間違いない。夫や息子たちの「良」の字は、一族の通り名である。ところが戦後、それは場合によっては、辺境の些事として扱われる。この屈折が、外に向かっては本土や米国への反骨精神となり、内に向かっては責任感となって「死ぬまで」沖縄を詠み続けさせたかもしれない。

私は、この感想文中に、家族からの戦争体験の聞き取りほど大事なものはないと述べたが、現代では、正直ほぼ不可能である。広島での語り部の伝承活動も、困難に直面している。大きな問題は、若い世代の語り部の伝承者となつた人たちが、長続きしないことである。もはや戦争体験の風化というより消尽の時代、新たな掘り起こしは難しくなるばかりである。

桃原は、果敢に戦争を歌うことに挑戦し、秀抜な歌集を作り上げた。読後の軽い興奮が、それを教えてくれている。私は、沖縄と沖縄戦へのこれまでの認識を改めさせられたことを報告したい。現代でこそ、多くの人に読まれるべきと思う。

最後になるが、摩文仁の平和祈念公園で「広島から来た」と話すと電動カーテンのオジー氏が「それならあれも見ておけ、これも見ておけ」と親切に案内してくれた。また中島義雄氏から、小稿への多くの示唆を頂いた。記して感謝したい。

# 香川進の生きものの歌 26 田土 成彦

●地中海叢書一覧 ● (1019・1~1010・10刊行)

・赤蜻<sup>あかよし</sup>山よりくだる季となりわがひとり座る志も抜けゆく

『死について』より

歌集後半に位置する歌で次の『湖の歌』や『山麓にて』に繋がる一連なのだろう。大津市田上里町に自炊独居生活をされたいたときの作品だ。赤とんぼは身近に季節を感じさせる生きものであり、小昆虫を食性としているところから、農耕民にあっては好意的に遇されて来た。代表種としてはアキアカネがあげられるが彼らは主に広範な水田を生殖場所としていたため日常によく接する生きものでもあった。ただ体温の放熱機能が弱いため三十度を超える気温では生存が危ぶまれる。従って盛夏期には高地の低気温帯に移動し秋口に再び生殖のため低地の水稻のある平野部に降りてくる。

この歌はその成長を終え里に下ってくる時をとらえている。普通の気候ならば处暑を過ぎた頃となろうか。開け放った人家の窓からも通り抜けて出て行くのだろう。何でもない描写だけれど、この結句は抽象的な時間の不可逆な過ぎ行きを見つめている気がする。また盛夏をぐぐり抜けた安堵感がことなく漂う。露風の童謡にあるように、香川進にとつても母の、あるいは姉の背中に負われてみた記憶があるのかも知れない。赤とんぼは幼少の甘く切ない記憶に繋がってゆく生きものなのだ。

〈近刊予定〉

\*歌集についてのお問い合わせは、著者に直接お願いします。

・杉浦詩子歌集『白鳥伝説』(仮題) (第939篇) 九曜書林

\*他にも準備中の歌集が数冊あります。出版の際には、地中海叢書番号を本社にご請求ください。また、出版の相談も遠慮なくどうぞ。  
\*九曜書林は、歌集を出したい、できるだけ安価に、といふ人のためを考えています。印刷製本は、「地中海」の印刷所である京成社が行ないます。

- ・高橋啓子歌集『自己増殖』(第930篇) 弘報印刷株式会社出版センター
- ・仲西正子歌集『まほら浦添』(第931篇) ながらみ書房
- ・御代田遼江歌文集『花のロント』(第932篇) 第一印刷株式会社
- ・上林節江歌集『記憶の遺産』(第933篇) ながらみ書房
- ・高尾恭子歌集『裸足のステップ』(第934篇) 現代短歌社
- ・若林美知恵歌集『逃げ水を斬る』(第935篇) ながらみ書房
- ・久我田鶴子歌集『雀の雌子』(第936篇) 砂子屋書房
- ・中島央子歌集『紅葉坂きて』(第937篇) 九曜書林
- ・安部 律歌集『四月の翼』(第938篇) 現代短歌社

# 今月の二人

## 亡き舅ちちを想う

稻家 和子

男を繋いで

亡き父の無念の船が沈みたるバリンタン海峡地図に小さし  
長押より見下ろす遺影は夫に似て模糊たる戦史を秘めて語らず  
戦死せし父を覚えず古希過ぎてぱつたりと言う夫をあわれむ  
放送の「一分間の黙祷」を拒みし祖母の胸中あわれ  
八月十九日戦死と彫られし墓石に灼熱の陽が照りているのみ  
バリンタン海峡蒼く澄みおらむ沈みしいのち還ることなし  
祖母が夫が幾百遍も読みて哭きし遺書の手紙はセピア色なり  
面会の友に託せし父の遺書は望郷を言わず母を憂いぬ  
軍用の便箋の遺書欄外に裏にもあふれ語り尽くさず  
「頼みます」「天命」「さらば」の文字乱れその胸中の無念を懷う  
遺児として靖国の祭壇に立ちし夫の祈りのこころは敢えて問わざり  
幼きより牛をして田仕事をせしとうは夫の寝物語りに  
「母さんと栗の実煮てます囲炉裏ばた」歌えば悲し戦よあるな

夫の父は二十八歳で召集され、終戦の前の年、南海バリンタン海峡で戦死しました。その時夫は一歳で父の顔を知るよしもなく、手元には、面会に行つた人に内密に託した乱れ書きの遺書一通が残つただけです。夫は、母一人子一人、子供のうちから牛を使って田畠を耕すなど、多難な生活の中で育ちました。

成人してからは郵便局に勤め、看護師やケアマネージャーをしていた私と結婚し、今では七人家族、暖やかで平穏な生活をしております。

今年の父の命日、八月十九日に、セピア色となつた七十六年前の遺書を取り出して読み返しました。「何を書いたか分かりませんがご判読ください」という遺書には「頼みます」「天命」「さらば」などの文字が乱れ、哀惜の念と切迫感が溢れています。分かるかぎりの先祖の系図を作り、現在に繋いで舅を偲びました。

中島義雄先生の懇切なご指導に従い、短歌を作りはじめて十年、昨年は公営の笛吹川歌碑公園に歌碑が建ちました。  
究めても究めても、及ばない歌の道を通して舅の無念を弔いたいと思ひます。

# 本月の二人

防風林を背に

山口美恵子

灯台の点し始めの緑色海の安全願う儀式か

撫子の仄かなピンクのまだ咲ける犬と散歩の防風林に  
水引草みずひきに長く留まる黒揚羽ふいにわらしへ長者思いぬ  
山百合の防風林に咲き出せば童話の世界へ入りゆく気分  
あきらめておりたるピンクのハイビスカス咲きいるに気づく揺れやまぬなり  
死んでいる蚯蚓を運ぶ蟻の群れ蛇踊りして若者のごと  
夏の午後蟻が群がるアイス棒眺める私少し幸福

萩の花みつけた今朝は風涼しお萩はすでに昨夜いただく

轟々と迫るは車の音でなく君ヶ浜より荒れる波音

大嵐の近づく浜は波立ちて濃淡移るモノクロ映画

鈴虫の声聞きながら床につく今日は立秋過ぎて十日目

けもの道に固まっている鼈蛙大糞に見え我も固まる

海にかかる月が次第に舟になり天の川辺を行つたり来たり

平家の「落人伝説」なるものが全国で聞かれますが、私の生家も伝説の残る里にあります。子供の頃節分には豆は食べますが豆撒きはしませんでした。どうして豆撒きはしないのか母に尋ねると、昔平家一門で敵から逃げているから大声を出して豆撒きは代々していないとの返事。子供の頃はつまらないと思っておりました。町内の交差点は全て真直ぐな十字には交わらず、少しずれており他町から来る人は、迷路のように目的地に一度でたどり着かず同じ所に出てしまいいやこしい道筋だと、大人になってから耳にする事が多々ありました。

伝説とは無縁な家に嫁して40年近く、思いい切り大声を張り上げ派手に豆撒きをしてスカッと楽しかった頃が懐かしく思い出されるこの頃です。因みに生家の本家に纏わる伝説は、年に一度当主が深夜に代々大切にしている弓の手入れを、一人で行うとの事。勿論家系図もきちんと残され屋敷の庭には書生さんの居室もあったとか。

そんな訳で私の中ではまだ少し平安の気分や空気が残されているのではと、多少の自負はあり、古典や古文に興味を惹かれておりました。

落人伝説

◆今月の二人・稻家和子作品評◆

## 「頼みます」の文字乱れ

稻家さんは、岡山県美咲町在住。昭和十九年に二十八歳で戦死したという夫の父を詠っている。「男」と言つても、会つたことのない若き死者である。

- 亡き父の無念の船が沈みたるバリンタン海峡地図に小ささしバリンタン海峡は、フィリピン北部にあるルソン海峡を構成する三つの海峡内の一つである。父が戦死した海峡を地図に確認しつゝ、その小ささに父の無念を重ねて思つたことだろう。
- 放送の「一分間の黙祷」を拒みし祖母の胸中あわれ
- 八月十五日の昼のことだろう。放送を聞きながらも「一分間の黙祷」をしようとはしなかった祖母。作者は、戦死した息子を思いつづけ、諦めきれぬ母の姿をそこに見たのかも知れない。
- 八月十九日戦死と膨られし墓石に灼熱の陽が照りしているのみ
- 強い歌だ。戦死の日付を刻んだ墓石に容赦ない夏の陽差しが照りつける。事実だけを述べて、「のみ」と打ちつけるように終わる表現の中に、激しい感情が籠められている。
- 祖母が夫が幾百遍も読みて哭きし遺書の手紙はセピア色なり
- 「頼みます」「天命」「さらば」の文字乱れその胸中の無念を懷う

この父の遺書から伺えるのは、逃れようのない死が覚悟されていることだ。船は敵艦に沈められたのではなく、初めから敵艦に体当たりして沈む運命だったのか。戦後七十五年、セピア色になった遺書を目の前にして、何百遍も読んでは哭いたにちがいない祖母と夫とに作者は心を寄せているが、夫の母（亡くなつた人にとっては妻）はどうしていたのか、妙に気になつた。

◆今月の二人・山口美恵子作品評◆

## 蟻が群がるアイス棒

山口さんは、銚子市在住。落人伝説のある里から嫁がれて四十年近くになるという。節分の風習だけでなく、生家と婚家とではかなり異なる点があつたにちがいない。

### 灯台の点し始めの緑色海の安全願う儀式か

銚子と言えば、犬吠埼灯台。夜の海の安全を守る灯台、その点し始めの色は緑色だという。そこに着目し、「安全を願う儀式」を思った作者である。

### 撫子の仄かなピンクのまだ咲ける犬と散歩の防風林に

海岸に沿った散歩道をお持ちなのだろう。「防風林」がそれを思わせる。そこにまだ咲き残っている撫子の花。季節の移ろいを感じながら、犬との散歩はつづく。

### 夏の午後蟻が群がるアイス棒眺める私少し幸福

夏の午後、(たぶん)食べ終わって捨てられたアイスの棒に蟻が群がっている。それを眺めて、ちょっと幸せな気分になっている「私」。子供に戻ったような時間だったのかも知れない。

「午後」「アイス棒」「私」「幸福」と名詞が重ねられていることが、ここでは弾んだ気分を醸し出している。

萩の花みつけた今朝は風涼しお萩はすでに昨夜いただくいただいた、と。ふふっと笑つてゐる姿が見えるようだ。

けもの道に固まつてゐる蟻の大糞に見え我も固まる

これはまた! 道に動かないでいる蟻を大糞と見間違えるとは! それをまた歌にしてしまうとは! 山口さんは、けつこう“野性”を失わずにいる人と見た。

評者・久我田鶴子

短歌との出会い、改めて思い起こせば幼少の頃から正月には祖父母を交えての百人一首、祖父の朗朗とした読みにリズムを感じ、かるた取りに興じておりました。

作歌するようになったのは、一時間蒸氣機関車に乗って通った高校二年の時、古典の田辺秀松先生より短歌クラブを始めるからと勧められ入部してからの事です。部員全員で地元の新聞に投稿し、入選歌として私の歌が載りました。

・夕暮れの稻田にひとり稻を刈る母の姿は小さかりけり

多感な頃に詠んだ歌です。親戚中から電話を貰い、何よりも母が喜んでくれた事が嬉しかったのを覚えております。

卒業後は地元の銀行で働き、十九歳の頃小学校の師の誘いで鰯ヶ沢短歌会に出席したところ、教職にある先生方が並んでいて、歓待はされました。若いといえば私一人、つい足が遠のいてしまいました。今思いますと皆さんからもっと学ぶべきであったと悔やまれます。その時講師をされていたのが、後に「青森古今」を創設された鎌田純一先生でした。中学の校長であり、父の上司でもありました。

・いのちあるものみな美し癒えて対く雑木林に霧氷吹くなり　『雪は匂へり』より  
故郷は、冬はシベリア下ろしの吹き荒ぶ

日本海沿いの町、北前船の寄港地でもあり、その影響を強く受け継いでいました。鰯ヶ沢短歌会は昭和三年の創立で、現在も続いている。

結婚、夫の転勤で弘前から仙台へと移り住み、短歌からはすっかり遠のいておりました。子育ても一段落した頃、介護保険制度のスタートと共に福祉を学び、ケアマネー

## 私と短歌との 出会い

### 千葉 む津

220

ジャーニーとして短期間でしたが働いた事は短歌を続ける上で良き学びとなりました。やがて長命ヶ丘短歌会の存在を知り見学させて頂き、講師である佐久間晟先生の熱心なご指導と皆さんの和やかな雰囲気が再度私の作歌とのスタートとなりました。

NHK歌壇に学び、近くにある宮城学院大生涯学習万葉講座の犬飼公之先生に学ぶ

うちに、時代は変わろうとも現代に通じる短歌の奥深さと言葉の力に感慨を覚えました。長命ヶ丘短歌会では佐久間先生の的確な批評と歌話に学び、やがて「地中海」に入会しました。長命ヶ丘市民センター祭りへの参加と共に一度の吟行会、新年歌会と、こちらは荒川信明会長の元に持ち回り制とし、協力し合いながら現在に至っております。

佐久間先生が常に言われている事は、短歌は一、叙情詩である事。二、歌人は心美しい人である事。三、批評者は作者の気付かない点を見いだし、これを助長する手助けをする人であるべきということです。多様化する時代の中で短歌を詠むという事は、共に喜び、共に悲しみ、そして小さな気付きを与えてくれる、そういう仲間が居るという事でもあります。忙しい日常の中で短歌と向き合う時間は、癒しともなり、時には多少の苦しみともなりますが、佐久間先生は短歌は鉛筆とメモ用紙があればいつでもどこでも出来るよく話されます。常に傍らに歌があることは幸せの証なのかも知れません。短歌との出会いは人との出会い。一人ひとりが師であり、互いに学びあいながら成長出来る場のあることを有難く思っています。

# 作品 A (ヤ行)

柳澤君子

折鶴

・信

川に沿い並ぶアカシア合歓の木が一本交じりてピンクに明し  
やれやれと勤めを終えし葉月尽ぐループホームが最後の仕事  
あさやかな折鶴二連戴きぬ心通いしホームの人には  
めくられし九月の曆にメモはなしテレビつけると眠りもよおす  
暑き中おしめりありて芽が出てる大根かなと畠に見入る  
秋の朝捨てし上着を探したり彼岸の休日稻刈りざかり  
幼時より林檎畑に吾は遊ぶ稻田もふるさと友頬ち来たり

山合邦子

神の声

・天

慶事からリスクとなれ長寿いな超高齢化社会に老いる  
切るまでもなき貧弱な乳房もつ老アマゾネス姿見にあり  
ほほゑめど口角さがりて写りたる老人大学IDカード  
エンドレスラジオ体操「いち、につ、さん」一人消えまた一人消えして

勝ちのこりホモ・サピエンス繁栄の七万年を年縞きざむ  
ウイルスは戦略として寄生する道をえらべり存在するため

コロナ禍に神の声きく「手を洗ひ口をすすいで穢れをはらへ」

矢口さた

紡ぐ余生

・習

凛とせる水木の舊いっせいに天空させり今日より師走  
如月にふさふさと黄の土佐水木苦しきことは何も語らず  
振れつつ節くれ立てる枝々に風格のあり梅は満開  
本土寺の「茲けさ」の由來たどりゆくうから伴うもみじ日和に  
手に提ぐる荷物の重み苦になりてわが荷車の自転車放せず  
これの世に生を受けたる幸いをコロナウイルスに負けてたまるか  
独り身を癒す短歌に良き師ありよき仲間あり紡ぐ余生に

八橋千代子

蟬の声

・森

不気味なる暑氣の続けるこの夏の精神病棟友のいる街  
友の眼がおだやかな光たえてる狂氣と言うはみな「空無」なり  
夏の陽が盛りの中に仏具屋へ手に擦れる数珠かすかな蝉声  
掌中に握れる程の重さもつ翡翠の玉を手首に領す  
僅かなる数珠繰るような蝉の声法要前の寂寞の庭  
寺は夏の日ざかりの日を浴びしんとただ蜜蠟のゆらぎの中に  
夏草の生うにまかせて九月尽朝湯の窓に青き力マキリ

# 山岸時子 梅雨

・朱

夕闇に烏瓜の花ひっそりと連なりて咲く梅雨明け未だ  
垣にある梔子の香を胸いっぱい吸い込み見上ぐ梅雨明けの空  
雨の香の立ち昇りくる夕まぐれ遠くに雷鳴きこえくるなり  
一頭の子山羊がいればこの庭の草はきれいになくなるものを  
長梅雨の明ければ続く猛暑日についてはゆけぬ老いの身を知る  
水無月は紫陽花月よそれぞれに色きわだたす朝のじじまに  
足ばやに春駆け抜けりさ庭辺の緑に冴ゆる君子蘭の花

# 山崎昭子 別れ

・大

焼き立ての饅一串ぶらさげて元氣出せよと夫に友くる  
沖縄の返還直後に見し城は歴史とともに燃えてしまいぬ  
令和元年しめくくること大晦日に母は逝きたり白寿の母は  
たばこ屋の跡地に真っ赤なビルが建つコインランドリー時代が回る  
コロナ禍どう新語ができる出口なき間に恐怖が世界を覆う  
ふる里の春詰め込まれしダンボール箱を開くれば落句いたつ  
そよ風が窓よりそと入り来て寝つけぬわれを撫でてゆきたり

# 山崎三千代 ひとり散歩

・鷗

籠り日につくづく歩むひとり散歩オーライ桜よみんな孤独だ  
花びらを乗せてお店にならびいるほうれん草のはなやぎ  
ひそやかなときめき拾わんと散歩道坂を上れば変わる風の色  
鍼灸院のお灸の香りを連れ帰りわれの納戸もほのかただよう  
鳥取の友の便りもたえてなく共に砂丘を上のるも夢に  
子の茶髪をつよく叱りし日も遠くパソコン教わる夫の背小さし  
「飽きたから」茶わんの箱の古き文字こんなところに母の面影

# 山下和子 初冬の月

・初

交わりゆく町の空き家空き地にも初冬の月の明るく照らす  
ほんぼりを納めてまつりの果てし夜離の残せる甘酒する  
シュルシュルと手水の鉢に落つる音疎にひびけり無人の社  
山峠の無人の社の片すみにサングラスふたつ主を待てり  
コロナ禍にしすもれる日々うぐいすの声どこまでもどこまでも澄む  
肌冷えの今宵虫の音聴きながら夫の手料理のボルシチを盛る  
飛び石をゆく人くる人鴨川の水のきらめく小春日の午後

# 山角和子 十六夜

・十六

幾すじか光る流れに息をのみさし伸ばす手に螢降りくる  
夕日背にそうめんする台風の去りて停電つづく夕餉時  
十六夜の月皓々と帰路照らす身籠りし師と別れの日昏れ  
ドクターへり飛び来る空に鶯の声常よりも激しく聞こゆ  
自由なき暇もてあます花日和思い巡らす花の名所を  
樋落つる雨音聞きて又眠る三密守る暮らしの長く  
咲き初むるレモンの花にしど降る夜明けの雨に実付き愛えり

# 山田香代子 溫暖化

・洛

ときれざる酷暑酷暑の京の夏地球温暖化の波たしか  
台風の被害ますます甚大に憂いもちつつ友の画展へ  
萩のさき朝顔ひらく師走入りわが住める星確かに狂う  
陽のぬくみ恋しと日の差すベンチへと先客おりぬ大きかまきり  
梅は雪に三分の白をゆするとう梅に真白き雪積りたり  
目に見えぬ見えぬがゆえに恐ろしき新型肺炎の終息を待つ  
ボル蹴り禁止と書かるる壁に當て蹴りつづけいる休校の児よ

山村睦子 富士山

・葦

吉野ふじ子 流星

・朱

初夢の「富士」見すとも車窓より今年最初の富士山仰ぐ  
渋谷にて「明日の神話」の壁画見る岡本太郎のパッション受ける  
無観客異例の春場所土俵には行司の声と力士の荒息  
以前よりソーシャルディスタンス我が家では守っています夫婦の間  
いかにしてコロナと共にこれからは恐れながらも正しく理解  
長雨で気分じめじめコーヒーの香りの力でカラッと変換  
束の間の梅雨の晴れ間に外干すたむ衣類に日向の匂い

横田美穂子

文

・宙

若松喜子

切り絵カレンダー

・昴

お母さんを偲びて初夏を味わつてと狭山の新茶に優しさ届く  
鉢植えの姫ばら切りて小花瓶にこれだけなのに心の弾む  
ひとり居は大丈夫かと弟が電話くれおり案じながらに  
お便りに溢れんばかりの六歳のありがとうの文字胸に刻まん  
一瞬に届くメールも便利だが待つ楽しみのふみもまた良し  
会えずとも心のこもる文来れば何度も読めて会っていること  
菅編みの手作り笹巻きたまわりぬつくりし人の思いの沁みる

吉田加寿子

鳥瓜の花

・渚

和田健一

花見

・湾

自瀟ゆるみ息子は友と山梨の素敵な白桃抱え帰り来る  
長びきし梅雨にか土手の紫陽花も濃むらさき褪せ老い深みきぬ  
夕闇にほんのり白きこのあまた鳥瓜の花崖に連なる  
期待して朝に来たるも鳥瓜の花のほとんど萎んでいたり  
夜になりしウオーキングに観る鳥瓜の花は真白くレースをまとう  
健やかに歩く夫の帰る直ぐ熱中症とそのまま寝込む  
熱中症の夫救急の点滴をすれど帰宅の熱落ち着かず

奥深き森の真上を流れゆく星の声聴く静寂の中  
見上ぐれば天の川越え流星の群れ駆けてゆく夏の夜空よ  
温暖化の更に進みしこの地球に星の巡りは変わらずにある  
昼と夜の長さ等しき秋分の日夏日の中を夕顔は聞く  
コロナ禍にひたすらふくらむブチトマト自然の恵みしかと受け取る  
大輪の花おくら咲く暑き朝そっと切り採りサラダに飾る  
柔らかき花弁を皿に盛り付けてドレッシングはオリーブ油と塩

渡辺徳子

コロナの中で

・岡

秋山裕子

友憲ぶ

・茨

ガラケイをスマホに換へて十年の世の流れなど思ひるなり  
無料といふスマホ教室に来てみれば生徒はすべて団塊世代

すらすらと画面を叩く横顔は孫の世代か異邦の人か

美容院は濃厚接触かも知れぬ伸びた髪を鏡に覗く

コロナ禍で自粛休業の連休も吾はひたすら初種を播く

野良仕事気楽にこなす吾らでもマスクを付けてスーパーに行く

山法師小高く庭に咲き出でぬ寿司を買ひ来て夫と眺めぬ

青田不二子

ベンだー

・鴎

わが家の穏やかすぎる年も明け夫と向きあい祝い酒酌む

店に並ぶ草餅・桜餅に春めぐり華やぐ和菓子に足取り軽し

老犬の歩く姿のいじらしさわれに寄り添い「頑張ります」とか

流れゆく雲を映せるカーブミラー老犬と散歩のわれの姿も

字は書かず文字は打つものとなりし今ベンだこの言葉の懐かしきかな

いく日も雨に籠もれば気も重く思いつくまま針糸通す

お互いの言葉と言葉はつながらず一輪のチュークリップを眺めてやまず

赤堀敦子

コロナ禍

・岡

雨後の霧もくりもくりと脱ぎゆきて紅葉を着たる那岐山を見す

九百年の歴史を持つての大公孫樹風に裂かれし邊に黙し立つ

コロナ禍のなき蒼空に収束を願ひて苦吟の一首纏めぬ

那岐を背に十五ヘクタールの菜の花の祭りも中止となりて深閑

温かき友の縫ひたるマスクして今日の重たき思ひ去らぬか

コロナ禍の施設の夫を問ふことも許されず猛暑のなかに日が過ぐ  
孫守るとジュネーブまでの独り旅四十日間の日記出できぬ

阿尻みさを

古書の日

・海

十月四日今日は古書の日あなた嬉しく探し古書の書棚にありて

探究せし「ルドルフ・シュタイナー」の著書手に欲喜せし日に孫娘より申し出

孫娘「アリストテレス」の著書もとむ次は「ルドルフ・シュタイナー」をと

目をみはる孫らの成長優しさに吾もはげまむと神に感謝す

吾もまた若き日にも哲学を古書の傍線ハッとおどろく

幼よりカント・ヘーゲル耳にして戦後は学ぶアリストテレスを

自然法学ぶ日々は数あまた古書をひもどき夢中になりき

阿部洋子

たわい無く

・鴎

三一二パンデミックの新型コロナ悪夢は目覚めぬ東日本大震災に

カブエテリアの三人掛けを間仕切りシヨツビングモールの造化のひまわり

三密に沈む空気に手につかぬ窓拭き払う五月の空へ

窓枠にすがるキリギリスを指先に生まれ合わせる目醒めの縁

ぶーかぶか連れ添う綿毛はランデ・ブー翳る眼にみ空の眩し

自肅解け先往く燕は何思う低空飛行のつばくろの反り

しなやかにせめて生きたしたわい無く暦をめくる今日の一日を

安 部 律 パンデミック

・ 湾

石 田 明 彦 タクシード記

・ 関

・ 地

寒中に雨音激しきひと日なり新型ウイルスの迫りくること  
目に見えぬウイルスひとつに怯えつつ団地の路地は声を潜める  
カレンダーに増えてゆくのは「中止」の字、三つの役を背負いたれども  
新しき年の手触り淡あわし夫との暮らしに時は降りつむ  
鳥たちとお喋り出来たら楽しからん外出自粛にせめての散歩  
ふつくらと炎に守られ空豆は茹でれば初夏の香りただよう  
どこまでも地球に拡がるコロナ禍かパンデミックの方舟に乗り

荒 川 信 明 柳青める

・ 湾

生 田 節 子 六器の桜

・ 洛

稜線の今朝の素顔は美しい白き誕生えわれの素顔か  
補聴器を外せばただの風の人世の驟然も聽こえぬ間に  
そよそよとそよろの風が水仙の顔をなでて笑うささやき  
うきうきと柳青める川野辺に早春の声は路の蓋から  
海見たく空を仰げば流れ雲ざ波寄せる渚にみえた  
水を張り鏡田となりし苗代の木の芽風吹き波紋の美しさ  
緋牡丹の見事な大輪笑ってる悩みなど無く己を魅せる

有 馬 さ と 子 「みないろし」

・ 大

石 塚 貴 美 恵

遠隔カメラ

・ 地

美しきイーハトーブの雲を見る「気象館通り」の沖の遙かに  
ビル街の小さき公園に放ちやる無賃乗車の天道虫一匹  
視覚障害の老人の掌を肩に受けタクシーまでの初冬の小路  
タクシーの空車表示の赤き灯は逃げゆく動物の群れの眼に似つ  
街を出で農協前に弁当売る若き夫婦の笑顔あたたか  
こうなればどんな客とも同伴すと気負いしホステスいすこかに消ゆ  
祖の祖も語で社叢の石段に自宅待機の脚を鍛えぬ

学童の影なき校庭染めて咲くさくらさくらはコロナを知らず  
家ごもり自粛長ければ「みないろし」とあき子の詠みし歌の浮かびき  
雄大に見上ぐるばかりの「木立ダリア」皇帝と呼ばれ氣品を保つ  
五十年に一度咲く花竜舌蘭・命の限りを高めたかく咲く  
つづましき自己表現なり歌詠むは妻母たりし日日はうたかた  
聞けず見えず話せず百歳もういと菩薩のような面ざしになる  
この星の大海上に浮かぶ舟はかなく小さし操る人はなお

今村叶子 郵便夫

・大

岩里周英 繼ぐ

・地

三・四枚桐の枯れ葉の散り置く郵便夫避け来る冬晴れにセルのこととうちと書いて母縫いき養女となりし十三の春目前に識義をするは裸足少年なりし國立大学医学部教授へつついの三つある生家大八車が野菜積み来し神戸の真中本棚をなだれ落ちにし本のなか夫しゃがみこみ本読み耽るなにがなし敬意をもちて魚には対えりたとえ塩焼きにても観覧車ゆるく回ればおぼろ月一生と詠みし女のひと夜さ

岩井久美子 夏空

・昂

連綿と続きし村の冠句会野良では聞けぬ言葉がきらめく一編の冊子を遺し消え去りぬ繼ぐ人のなき明治の葵屋根繙けば觀音寺文書読み解けば迎春心得明治の世話役ひなげしの首細々と群生す放棄の烟は夏の入り口カーテンを隔てマスクの接客子耳そばだつる訪客のあり傷口に塩塗り付くる長雨の被災地に降る雨の降る降る報道もみな「終戦」と言ひ連ぬ徹底的な負け戦をば

植田和子 車窓の町

・大

さわやかな笑顔の人とすれちがう雲一つなき夏空高し銀色に輝きながら飛行機は少し傾き西空へ消ゆ三色の灯をともしつつ飛行機は月なき空を西へと進むストップの前に座りてテレビ見るまだ帰り来ぬ人を待ちつつかげりゆく冬の夕暮れ田の中に土の手入れをする人のあり義理チヨコと言われてもらうチヨコレート赤い袋にハートの形雨上がり月の明るき春の夜車一台静かに去りぬ

岩崎洋子 甘酒

・朱

内田泰子 大歳の夜

・漣

黒々とボタ山ありき六十年の時は流るる車窓の町に青春の町とつぶやくこの駅にふたび降り立つことはなからん花を見んと約せし姉の骨を揚ぐ一月つぱみの未だし固き黄粉の上のよもぎ団子の濃い緑母の味を繼ぐ初夏のひと皿コンバイン稻穂平らげ人気なし稻架も藁塚も死語となるらし吊革に触れず人との距離保ち優先座席に小さく座る青藍の羽をひらひら蝶とんばいと珍しき客に会いたり

ビイオリラを奏でる女の艶やかなルージュまぶしき敏老の宴ほんのりと大ぶり湯のみに湯気上がり甘酒の香り部屋に満ちいる朝晩の冷え込み続き黄色増す初なりみかんもきゆくは誰里山に一本咲ける山桜萌黄の中に淡くにじみて

日に幾度防災無線のアナウンスウイルス対策細かく指示す

となり家は開け放たれて動く人影パソコンの前にテレワークらしきさ庭辺の小さき柄杓を接み処とする雨蛙鳴く今日も無事なり

かなわぬこと能わぬピース一つをば抱えて越さん大歳の夜ただ一度母に乞われし能登の旅叶わぬままの悔い一つなり年明けを難病の友と共に祝う新年会をよろこびとなす思わずも耳にしたるは肺炎で友の入院新年会前さくさくと霜踏む音の懐かしく足裏におぼゆ遠き感覚穿られし音羽の山の山腹を新幹線のしげく往きます常ならばオリンピックに湧くものをコロナにふざぐ一〇一〇年初夏

鵜之沢通子 難聴

・習

大久保徳子 宿主

宿主

・北

難聴のつらさ、さびしさ歌に詠む心安まるわれのひととき

難聴のわが片腕の補聴器をお疲れさんと夜には外す

難聴のわれは夫のおかげにて今日も無事なり一日の終わる

糖尿病のわれの好物おはぎなり食べてみたきよ一度で良いから

駅までのバスを横目に歩きゆく歩け歩けと内なる声が

健康になれば良きかな毎朝の「テレビ体操」十年になる

わが家より十五分ほどの建売りに娘の家族が引っ越してくる

梅本武義

まだ十年は

・羊

老人の集いてとんど作りをす稻葉も減り先を危ぶむ

腰伸ひず歩くが猿に似ておれどまだ十年は生きねばならず

棒を持つ老いの気魄にうり坊の逃げる速さよ三歩ほど追う

溜息と紛う欠伸を今朝もして起き立つ妻よ金婚が来る

練習の成果ますます按摩機に揉まれつつ聞く妻のオカリナ

父の日はあるを知るのみ梅雨空を燕忙しく餌を運び来る

七年をかけて一冊終りたる葉手帳もわれの足跡

大江晴美

デイサービス

・森

検温をなして出掛けるデイサービス着けば手洗いソーシャルディスタンス

他国からの実習生が街路樹の保持なしつつも空見上げいぬ

買取りの店持ちゆきしカメラ二個微の生えいると五百円也

九月末すくなくなりて吹く風に盛夏の頃の暑さ思えり

あちこちに痛み走らすわが体何年続くかと指を折り見る

若くして逝きたる夫思いつ見上ぐる夕日に恩痴など言いたり

歳取るは淋しきものと云い云い亡母の言葉身をもって知りぬ

大倉美興子 透析

透析

・岡

生活の軸となりゆく透析に残る月日の有り様思ふ

金魚鉢も鈴虫の鉢も片付けて断捨離と言ふはこの淋しさか

使ふこと無き消しゴムを筆箱にひそませて消せぬ一代が過ぐ

転生は何になるやと暫くを見て居る空の星一つ消ゆ

咲きに応答もなき夜のじしま花瓶に塗かれし龍の目光る

何とかなる何とかすると生きて来て何ともならぬ老病の日々

「またね」とて明るく切りし友の電話が此の世の最後となりてしまひぬ

太田和昭子 タリヤ

タリヤ

・渚

独り居の姉すこやかに百歳になりしに招かれ秋空はれて

離れ住む男孫より届く鉢の花ダリヤ咲き初む紅はれて

委託せる吾が田の新米届きたり暑かりし日ひ深く謝したり

むらさきしきぶの粒実の色のさわやかに秋彼岸の風にゆれいる

うす紅の芙蓉に紫苑のむらさきと台風前のしづけに咲く

気がかりの事の一つのまとまりて出で来る庭にタリヤのほほえみ

皿洗う窓の向こうの土手の上柿の実たわわに鳥のかげなし

過ぎゆきの数多を胸にたたみつつ青信号を人ら渡りゆく

火炎瓶と放水煙りき安田講堂若きら熱遠く今立つ

アイソートープ検査待つ間の窓に見ゆ風のままなる桜の一樹

ばたばたと水漏れはじむ給湯器主と共にほろびの光し

菩提寺の空にぼっかり綿雲の光るしるがね届きそなり

明日をおもい昨日を忘れ今日の在り夕餉の魚にかるく塩ふる

蝙蝠はウイルスあまたの貯水池と自然宿主の雷雲すさぶ

# 大 槻 知 子 文 明

・朱

# 尾 形 悅 子 光

・光

焼け落ちし首里城跡に燃し出す匠の魂の絶叫あり

医術より水をと「井戸掘り医師」中村哲氏襲撃に死す

襲いかかる大旱魃に一滴の水を絆にと中村医師は  
温暖化に世界中ゴミの山時の終わりと中村哲氏最後の伝言  
新しき宿主は人間と定むる新型コロナウイルス蔓延はやし  
ウイルスは日ごと潜みつ拡散すも間延びの応答の国会中継  
見あげれば揺れる花びらかけりなき利久梅あり安らぎにつ

## 大 野 木 淑 子 十 葉

・洛

小粒なる甘きトマトの名のありてネットをかけて鴉の予防  
十薬よ十薬だよとお茶づくり日々に備える効くと信じて  
贈られし胡麻豆腐には永平寺ゆかりの品と喜び食す  
コロナにも熱中症にも恐れつゝ老いてなおさらつましくいる  
茜色そまる山へとぼつれ雲機体何処へ音のみひびく  
三本の飛行機雲は横並びぶつかるとの無きと信じて  
ススキの穂つんつんのびたり秋近しみんみん蟬もしきりに鳴けり

## 岡 島 公 子 自 薩

・眉

駅前から一直線の道の先稲線やさしき眉山を望む  
買ひ物に待ち合はせにと来たる日よ思ひ出多きにゆるりと歩む  
店先で作りては売る煎餅屋下校時しばしば立ちて眺めき  
自粛して籠もればコロナのニュース辛し元氣を出せといふは誰が声  
「三密」はイメージ誘ふ造語なり自粛を基とし守りてゆかむ  
歴史上疫病いくたびその都度に乗り越えこしを識者は説けり  
「お元気さう」お世辞にても嬉しかり時には外に出て人にも会はむ

## 小 川 節 子 明 日 への糧

・茨

胸に秘むる思ひのなべて語り合ひ明日へ生き抜く糧としなせり  
雪原に大の形に寝ころべば蒼い空が「氣持いいかい」と  
蒼色の深みの奥よりやつて来る宇宙の波動をこの身に受けん  
対岸の火と思いつつ眺めしにあつと言う間にわれもコロナ禍  
ウイルスにこんな名前は付けないでコロナは光・王冠なのに  
暗闇に消えては灯る小さな光夢くほのかな命の光  
聞かれたらこう言う自分でありたき「今の自分が一番好き」と

## 沖 田 誠 子 コロナ禍

・革

しぶき声バンドのリズムに友乗りて八十二歳の華を振る舞う  
平常の暮し一人が九倍に正月準備の買えども買えども  
メールにて清水文氏の計報入る師ありての今を深く感謝す  
麻痺の手で己が吸引成す友の逝去の知らせ凍てつく朝に  
いつ死ぬも良しと思いつつコロナを恐るこの不甲斐なき矛盾のかなし  
篠る我に生存確認の電話とう彈む女孫の声に浮き立つ  
犬猫の虐待するな捨てるな貼り紙まさに謹符に見えている

小田淑子 山法師の花

・昴

おもむきは山の樹らしく頭巾つけ古風なる名の山法師の花  
梨の名は「二十世紀」青梨の手ざわり懷かしその色ゆかし  
足の爪切るとき亡父の声聞こえ「新聞踏むと罰があたるぞ」  
左手の小指の関節変形し母似の形にクリームを塗る  
ひとつふたつ愛いの常にある日々の雲ひとつ無い空が眩しい  
公園に季節はずれの風が舞う休校の午後孫ら無言に  
正月に必ず逢える子の家族靴の形がみな個性的

小高京子 白鷺

・鴎

久々に会うベッドの上の節子さん「ありがとう」と目をあけられて  
手をのばし梅の枝先引き寄せる言葉を交わしているらし冬芽  
高齢者避難開始のメール受け動悸の止まぬままの夕暮れ  
戯れに植えたニンニク芽を出せり豪雨の過ぎし大地の隅に  
頻りに散る銀杏のひとひら肩に舞う回り道して独りの対話  
十と言う段階を八回越えた今ポストまで歩ける楽しみのあり  
植田には独りがいいと白鷺はコロナの禍を眺めているらし

小野節子 わざわい

・夢

竹の花咲きて竹林枯れてゆく六十年毎わざわいありと  
世界中コロナショックの吹き荒れし出口の見えない不安のつのる  
家に居てすることありてしたくなしテレビはコロナと再放送  
電子辞書かたわらに置き拡散する新型コロナの会見をみる  
讃岐富士長梅雨以降雨のなく緑陰の中立ち枯れ見える  
早朝から雲一つなり今日も又殺人の猛暑の予感  
炎天に満開の花つきあげる白さるすべり大三回忌

海保奈良繁

この安らぎを

・春

ハイハイといのちに任す自然治癒全身リュウマチ快癒めでたし  
薬物やめ痛みに耐へて癒さる造り出すものこの安らぎを  
こころ入れ叩き起さるやまと歌絆は宝興味津津  
そのままゆいのちの実相知らされて糸余の果てにて足る道するべ  
大安寺千年の『ささ酒』賑はひぬ阿弥陀の慈愛癌封じ南無  
無尽なる利益かさねてかたじけなし一面觀音だつたんの行  
われ思ふ想ひは形造り出す宇宙の一員安心感を

角田玲子 風

・夢

咲いている花の色より形より秋桜ゆらす風を見ている  
桃色のレースのごとき撫子の庭で揺れいる黄昏の時  
火の色に赤くもえたつ簾草田畑でみせる艶やかな色  
右に揺れ左に揺れてまた右に風にたわむれ稻穂実りゆく  
寒々しく見ゆる庭面に山茶花の赤の一輪明かりをともす  
ソーダ水まばたきしながら飲んでいた孫との夏ではない夏の来る  
あせらずにその日その日を恙なく今日も終えたと床に入りたし

片岡邦子 忘れぬと

・夢

夕暮の菜の花畠ゆれやまず休校もて余すことどもらの声  
マスクして並ぶ高校生の卒業式実験室さながらの防衛  
自宅待機鉤括弧してメール届く冷汗の絵文字言葉を越える  
紫陽花の小花よりそい濡れており密を求むか生物われら  
朝の雨ふれるものから色濃くしづかにもの思わしむ  
炊飯器の銀シャリ日盛りにセットする明日は終戦七十五年日  
忘れぬと想う心に濃緑のいのちをつなぐ秋明菊伸ぶ

片倉ひろみ

満月

・湾

金近敦子

ルーブル閉館

・昴

ゆっくりと左右に走る「夫なり空の彼方のラグビーならん  
今頃は祭りの準備に忙しかりしにコロナで中止とは心も空っぽ  
空の上に空があるような五月晴れ法被の虫干したんと陽を浴びよ  
マンションとわが家の合間に満月が煌めく色にウイルスを忘れ  
満月の今夜の月はオレンジ色ストロー添えて飲んでみようか  
いそいそと出掛けでみたい文月をまだコロナ菌は隠れているかも  
さあ行こう坂を登ればわが家なりデッボーデッボーと鳩の応援

金尾秀美

隣家人

・宙

蒲原清美

桃山御陵

・洛

透明の硝子ケースにはりついて「微笑み」の上の無数のウイルス  
貴婦人は空気の層に護られて幾万の吐息と無縫なれども  
「ニケ」にいま触るるばかりの階に太陽型のウイルスは眠る  
遠く近くかすめ飛びゆく野鳥あり こつんと硝子に当たりて落ちぬ  
突然の閉館宣言は労働者から。ルーブルの中の自由の女神  
三月一日閉館決めし日曜日見えざる敵への「籠城作戦」  
パリの街無数の人々過ぎ行けど黄色人種のめつきり減りて

朝焼けの刻々変る散歩道今日の日中も元気に行かん

満月に向いて歩めば歩もゆるむ夫との散歩無口のままで

山間を流れる谷の水澄みてときに日の射せば水面輝く

車窓より眺める村は静かなり清しき空氣の満たされおらん

人の世にコロナ居すわり占領す桜はひつそり時を終えゆく

日ごと來し隣家の人も姿見ず窓辺の花に蝶の訪うを

幾十年繋がれる人と消ゆる人賀状名簿の細りてゆけり

金光昭子

しめりもつ空氣

・朱

河上悦子

立つ

・昴

窓閉めたあれもない教室で一人喋りのオンライン講義  
静かなる梅雨の窓辺に一人居てしめり含んだ貞をめくる  
梅雨空に払え払えと巣をはりて女郎の蜘蛛は今朝またいたり  
夏休み十日ばかりと子の電話課題多くて会いに行けない  
木曾川を地図に連れれば水色の高速道路を川と見紛う  
ぐんぐんと気温三十五度越えて二階の床は熱をもちたり  
喘ぎつつ炎暑の坂を登り来て父母ねむる奥津城へ着く

アキアカネの群れ飛ぶ煙の百日草枯れゆくままに日を浴びて立つ  
妹によびかけよびかけ冬が来た 私は生きて蜜柑も食べて  
「頑張れ」と言ってしまった残酷 飲み込むよう空へ妹  
目を閉じれば妹のかなしみにみじんも気付けないまま 金星ひとつ  
エプロンをはずして見上げる臘月 妹はいない私は生きて  
冬物を少しずつ洗い干している 妹のいない一年を生き  
かなしみにみじんも気付け我生きて 空と海と一羽の鶲

川崎 富美子 金 竜

・渚

関 西 正 子

めじろの姿

・洛

遠目にも登校の子らを見送りし庭先の腰しばらく伸びず  
夜べの雨に庭の草花櫻と立ち明けし初秋の風にさゆらぐ  
伊勢エビの頭で濃いめのひと椀に小ぶりの秋茄子二つ割りにす  
二度三度返り咲き見す花海棠移る夜明けのひかりに笑まう  
庭隅のこぼれし零余子に思い寄せ夕べは炊き込みご飯をかこむ  
海わたる入道雲は熱暑つれ頭上半分覆いきたりき  
金盞の一時騒ぐもいつしらに静まり夜明けの光へ放つ

川崎 百合枝

十三回忌

・昴

病床の夫に「またね」と別れしに「また」のなきまま十三回忌  
尾行されそれでも信念つらぬいた伏せがちだった父の信仰  
愛いおびた妣の讃美歌今はわかる母子家庭の辛さだったと  
六十年前の動画をいただいた少しスリムな指揮するわたし  
逃げまわった幼どしきかりハケできたピアノと一緒に弾いたその後  
時間割組みて明るく子と過ごす休校何ぞと思わせる家庭  
「赤ちゃんってカワイイですね」とフィリピンの青年はや親父の顔だ

川辺 京子

マスク生活

・大

黍嶋 金平

秋の夕ぐれ

・羊

寒き朝鳥のさえずりさわやかにめじろの姿春遠からじ  
めじろ達姿たちも美しきチッチッと春を待ちわぶる声  
いすこより花のたよりを耳にする季節の移り心のなごむ  
草むらに新芽の顔を出す姿幼児の肌のぬくもりのよう  
気のゆるみ目ざめし朝は寝坊なり活動短き今日の一  
久々に痛みいる足を温泉にゆっくり祈るこれからのこと  
小雨降る林の中を通りぬけ小鳥さえずる山の湯治場

北浜玲子

コロナ禍

・夢

てきばきと寡黙に剪定終らせてシルバー人材の人ら帰りぬ  
あと何年桜の下を歩めるや十四歳になりたるわが大  
咲き終えて若葉広がる花水木はつ夏の風枝にくぐらす  
天の川は氾濫なきか七月を地上の川の荒れて狂える  
腰落としひと休みする病む夫に犬の寄り添うわれより先に  
コロナ禍に帰れぬ息子の車のほこり洗い流して四ヶ月待つ  
少し右に傾き押し車押す背に亡き母見ており歳晩の街

七度目の我が干支年がめぐりくる健康寿命を一途に折る

みどり深き山の麓の社には阿吽の一対拍ねすみ据える  
暖冬にすくすく育ち首を出す緑の大根畠に並ぶ

ケキヨ、ケキヨをいくつ続ける鶯よ活力あふる長い鳴り

杉木立天にそびえる高野山九十九折道バスは登りぬ

屋根瓦をカッチンと打ちころがる音隣家の櫓は秋を奏てる

木村恵子　若葉

・草  
楠元のぶ子　一人じゃない

アボカドの固き種より芽生えたる茶色の若葉湿りを帯ぶる  
艶色の椎の若葉を渡りゆく一連の風は我にもおよぶ  
銀の粉をふりかけるがに霧雨は紫濃ゆきあやめの花に  
夜の雨止みて目をやる朝の川两岸の草を遊ぎつつ走る  
白鷺の胸の高さまで苗は伸びて一面青田の広がりとなる  
南京樹のいまだ青きと朱のありて駅へとづく舗道を歩む  
冬風さの五浦の海の群青を船ひとつゆく水脈したがへて

許田邦子　オーボエ

・沖  
久土目薰　後期劇場（二十四）　桃

恍惚の調べと音色「オーボエの協奏曲」は夕べに似合ふ  
唐辛子高麗辛子と言ふ時にもつともらしき沖縄言葉  
悪夢なら醒めよと叫ぶ拱きて見てゐるのみの燃ゆる首里城  
正殿の屋根の龍頭棟飾り脳裏に残る焼けたる後も  
敬愛の測れぬ深さ生れし息子にファーストネームナカムラと付く  
残された時を見据ゑて潔く畳みたりけり夫は会社を  
きさらぎの寒さ堪ふるご褒美と梅猫柳福寿草の黄

くずはらりつ　年女

・そ  
窪嶋次江　秋日和  
・相

年女六巡目なりめらわす年齢明かす境地なるかな

誕生日二十三年九月六日二重三重に苦労する子か

吾を案ず祖父母に親は言いにける自分を律し生きる律子と

体内で起る反乱嘔吐下痢身体言語吾には解せず

肉体は心を容れる器なり壊れる容器戸惑う心

玄関にマリーゴールド活けたれば癒されておりコロナ禍猛暑  
猫二匹エノコログサを知らんふり猫ジャランだよ揺らしてみたる

大輪の百日草の束並べご自由にの札垣に貼られる  
コロナ禍や天候不順もたがわずに赤白黄の彼岸花群れ  
コロナ禍を知るか知らずか曼珠沙華郷の田の畔紅に染め  
あせ道にかかる八体一列にばか殿様に一票入れる  
半袖と長袖抱え二階から道行く人のコーデ眺める

球根はオランダ産のチューリップ鉢に植えこむ五色取り混ぜ  
アベリアの蜜吸う蝶に標準をマクロに替えて夫と構える

五十年暮らし慎ましく褒美と足を延ばして航路ゆつたり  
娘らが熟女といわれる歳となり老いやく吾を気遣いくる  
突然の入社取り消しやとい止め天災のようと若者あわれ  
気に掛けてくる先達・友のあり一人じやないと勇気をもらう  
何げない友との会話ランチ会私の元気を支えてくる  
ボッカリと空いた時間を手つかずの書棚の整理の遅々と進まず  
二十年難病かかえる友人のその妻明るく使命といいたり

塙 嶋 義 文

国勢調査

・相

来 栖 万 佐 子

波しづか

・う

応対はインターホンと指示のありコロナ禍のなか国勢調査

国政に生かして欲しいのコメントが国勢調査の戸別訪問

いつの間に親の代から子の代に五ヵ年ぶりの国勢調査

一戸ずつインターホン押して待つはいの返事に書類改め

密避けて出場種目は一回に運動会は午前に終わる

流行のGOTOイート・トラベルはコロナの記事を隅に追いやる

メモ帳に空欄目立つ巣ごもりを新生活の伴に取り込む

国 原 喜 美 子

塙町人

・昂

黒瀬 紀 子

マスク

・岡

こつこつとかたまりの土が水を吸うてねんぱりと田の泥となりゆく

父が生まれ私が生まれ父が逝き母も逝きたる五月過ぎゆく

稻の穂にあまた張りたる蜘蛛の巣が朝露まとふ梅雨明けの朝

田一枚残すばかりに稻刈り終へやつちやん揚揚コンバインに乗る

空豆の芽が出たまだ出ぬ玉ねぎは根付いた根付かぬひだまりの会話

米くわる里芋少し姉に送る電話の声を無性に聞きたく

気に入りの二足の靴を履きてはきて歩きゆく先考へてをり

倉 島 と よ 子

ふはふは

・信

小 泉 澄 子

花いちらんめ

・茨

シャカシシャカと線香花火は花散らしやがて寂しきボトリと落ちて

冷房の部屋を出づれば熱氣あび宇宙遊泳のやうにふはふは

美容室の鏡に会話日を合はせ身近に迫るコロナの話題

コロナ禍の直中にある図書館にアマビエの絵の葉をもらふ

直売の開店を待つ五十人マスク・エコバッグに皆整然と

朝明けの空を大きく旋回し薦は静かに山の端へ消ゆ

守るべき夫も子もなくにこやかな義姉の持ち来る「ラグビー南瓜」

波しづか世界の平和願いつつホルムズ海峡今日も明けゆく  
人前に繕うことのなき齡無料配布の列に並びぬ  
二歳児を庇いて我が怪我をする老婆は軽傷安堵しており  
一人居の我を察してつとめゆく前に必ず冷房セツトす  
稻刈も暑さの中作業する頑丈装備肌を見せず  
夏草を刈る鎌の音あちこちで競争のことひびき渡りぬ  
唄一つ踊り一つの芸もなく仲よし講はよなく樂し

引出しより出で來しマスク二つあり母心をつけて商ひに出づ  
「白衣が針を通らぬ」百三歳の手作りマスクに目頭うるむ  
声に出ぬ言葉溜めたるメモ帳はわが生き様を諳じてゐる  
打算一途に行商の道励むべし越えゆく道に葛の花匂ふ  
バックミラーに止まりて吾を見る蜻蛉「今年も会へたね」行商売れず  
頬かぶりしてひたすら風の道この坂は一本の商ひの径  
売れざりし商ひ終へし夜の窓に螢が青き軌跡を描く

手をつなぎ花いちもんめ次々と白波寄せ来海の穏しき  
家籠りから解放の知らせ人々の外出なれば髪染めに行こう  
数少ない出掛け予定のカレンダー黒線に消すコロナ禍騒ぎ  
堀川の浅き流れに逃げ惑う蛇一すじにくねくねと速し  
木下闇の草群に散らばる梅の実の挽ぐ人もなき家ひそとあり  
避難所に幼子一人走り廻る人ら手出しす長き無聊に  
亡き夫の知らざる後の永きくらしまだ一つ増ゆ転居すること

甲 田 啓 子

ひととせ

・天

こなかよしと

燃ゆる想いの如し

・鹿

葉の落ちて薄明りさすたかむらに車塚なる古墳の浮かぶ  
羽黒とんぼひらりひらひら小川とぶかくも身近き幽玄世界  
めずらしき花材ありたり道の駅赤き稻穂ぞその名神丹穂  
手術せし夫を見舞いて年を越すわが一生のひとつの場合  
病室ゆ見ゆる近くの宮にまず初詣せん見舞いの帰り  
わが小庭あの芽この芽の芽生ゆるを今日か明日かと待ち待つ弥生  
これからもコロナ禍つづく気配なり未来はありや老老介護

越 地 幸 子

生きるもの達

・朱

この山に生れて死にゆくもの達に夕影させば蜩鳴きぬ  
炎天の供花なき墓にときれなく蟬しぐれふる風のなきまま  
聞こえくる向日葵ごとに怒鳴り声母子喧嘩の真昼の署さ  
コロナ禍の沈む空氣を澄みきらせ豊かに白き金柑の花  
月見んと窓を開ければここだくに沸きあがりくる虫鳴く声は  
吊るし雑縫子の赤き袖口に潮風はらむ稻取の海  
街角の赤きピエロの手の仕草春日眩しき雜踏の中

後 藤 元 子

コロナ禍

・葦

小 林 翠

水の音

・宙

世界中恐怖に追い込むウイルスを封じ込めない強力感染症  
テレワーカ男孫<sup>まご</sup>の仕事の働き方新しき社会新型コロナで  
店の前小さな看板文字書かれ「ティックアウト」しています底力に感服  
小池知事大きなマスクで会見しマスクファッショ色とりどりに  
夏マスク妹よりの手作りはレース涼しげ口元さわやか  
やわらかな日ざしに感謝し花が咲き不安の嵐で花散りゆく  
夜なればみかんかごに盛りつみてこたつに集い家族なつかし

生きている一日の価値知らざるは明日があるを知るよしもない  
どんな偉人愚人であろうと死んで仕舞えば元のもくあみ  
ベン一本握って窓の外眺め考えたって仕様がないけど  
思い立ち街へ出掛けたらめぐるしい人間の教智と創造がどっぷり  
人類は理想を目的としながらも違った方向に気付かぬものか  
法律ってどの位あるのか事件ある毎あわてて法をまた創りいる  
若き日の燃ゆる想いの如く咲くブーゲンビリアの紅鮮やかに  
幾億年の光を放つ星空の下で地球は新年迎えぬ  
ベランダの剪定終えミニ薔薇の新芽つややか春の光に  
新聞をめくる音さえ乾きたる今日もコロナで自粛生活  
来場者「密」を避けんと刈られたるチューリップの花八十万本と  
梅雨空のベランダ大葉の葉陰より我に驚き黒影飛び立つ  
黒影に見えしは黒き揚羽蝶ひらりと空へ自由な空へ  
川の字のまん中ふわふわ尻尾ゆれ遊び疲れたマロンと眠らん  
はなれ住む女孫は約束ととのいて年の初めの挨拶に来る  
「ひとり娘」ほつほつ小さき玉を抱き春の身支度始めておりぬ  
手作りの男雛女雛を賜れば男の子だけなる家に春が来る  
ひと束の菜の花分けあう友のあり三人会の午後のひととき  
埼玉へ旅立ちてゆく孫娘一人暮らしへ行つてきますと  
大阪も東京近郊もコロナ禍を今日より出勤楽しいと言つ  
郊外の畦道行けば音がする田植の水の流れる暗渠

## 小原静子 さるすべりの花

・渚

かの日より七十五年御声とさるすべりの紅今に忘れず  
お言葉は雑音などて聞きがたく子細判らぬ十二歳の夏  
祝米寿と孫らの書きたる飾り文字夫の遺影と共に見上ぐる  
コロナ禍に宴の席は間をとりて風通しよく開け放ちあり  
手作りの嫁の料理のならぶなか一際目立つ赤き座布団  
エンジンの音軽やかな真夏日に黄金の穂波 剣られてゆけり  
若きらの汗の結晶新米のすし作らんと行商車まつ

## 駒崎五恵

地産地消

・葦

炎天に梅干し返し夜つゆあて仕上げた瓶に令和元年  
どしゃぶりに遠雷一つ身構えば東の空に大き虹見ゆ  
健康でいられる事の有難さ身の内さびぬ朝の体操  
掲きたてのあんころ餅とからみ餅届きて師走活力湧きぬ  
世界中自肅となるも催花雨に桜ぼくろび人もぼくろぶ  
となり家で無人販売始めたり地産地消のとりたて野菜  
電柱の影も涼しと待つ信号排ガス出さぬ自転車こきて

## 小宮山玉江

栗の笑み

・羊

栗の毬笑みの形に開きたり彈けむばかりのその実抱きて  
抱き合ふごときの栗の実笑みて落つ明日は拾はむ朝露踏みて  
風に落つる栗に背中を打たれたり意外に固し背打つ栗は  
恒例の栗こは飯をつくらむと皮をむくなり夜なべをかけて  
当然のことくに孫子ら集まりて「来年もまた」老いの氣をただす  
満開の桜水面にゆらしつつ田植え待つ間のため池の景  
ながらへて桜の木下に立つ吾になほも生きよと桜の花は

## 今野勝江 コロナ禍

・朱

・朱

マスクして半年ぶりの孫娘帰り際にはエアータッチする  
吸盤のはりつく指のすばしこく守宮現る厨の窓に  
雀らの土浴びのあといくつもの穴を残して日照りの畑に  
猛暑日の日射しよけてか裏窓に雀何度も飛んでくるなり  
猛暑日の照りつく蟻きらきらと首相退任のニュース流れる  
コロナ禍に命召されし人々の思い触れずに別れゆくなり  
コロナ禍は人とのつながり断ちゆきて老い人ひとりちゅうぶらりん

## 今野勝子 明石海人

・海

ブラウスのぼたんのようなたんぽぼが傾りにくつコロナを忘れさせ  
こころ躍る旅のガイドが届けども「不要不急の外出は避けよ」と  
ブローチの位置定まらずつけ替えを約束迫る鏡のわたし  
前をゆく人に追いつかんと足早に歩めどもああ距離さかるのみ  
映りいるわが戀の顔を閉じ込めて、パチリとしまう華のコンパクト  
海の絵を見ていると不意に行きたくなる多くの命を呑みし海なれど  
読み進めば進むほど「明石海人」の苦悶は詠めぬ未熟さ悔し

## 紺野紘史 老いをも惑わす

・湾

剪定されどこか寂しき切り口をいつくしむがに風は撫でゆく  
真夏日の夕暮れ時がわれは好き短歌に残れる余韻のようで  
ふるさとを思い出させる秋彼岸父母の声か遠蟬しきり  
馥郁と金木犀の甘き香は老いをも惑わし庭にたゆたう  
台風に襲われるのと同じさまコロナウイルスにもただただ無力  
ささやかな妻との卓に妹の送りくれたる林檎が栄える  
可も不可もなき日常の懐かしき幽閉のさまに巣ごもりつづく

斎藤順子

揚羽蝶

・信

坂口正子

とくだみ

・信

一・二本植ゑし十葉広がりて東の庭は緑に埋まる

コロナ禍の上に豪雨と恐れるし二重災害現実となる

感染を防ぐためにと病院の椅子に置かれし花の折紙

何となくせかされながら玄関を開ければ庭に揚羽蝶まぶ

ラジオより「長崎の鐘」流れきて八月九日の一日始まる

幼子の長期入院終へしより嫁の声はも明るくなりぬ

疲れしが良き日だったと思ひつて今日も最後の灯りを消しぬ

斎藤信子

さくら散る道

・森

酒田鈴子

蒼天を恋う

・霧

百歳の友よりの賀状うれしきに認知すすむの添書悲し

難しきルール教わり見るラグビー余生少なき吾の楽しみ

ゴルフして特別席にて相撲見て広島に行かずトランプ氏去りぬ

私財にて「ねむの木学園」を作り障壁見に母と慕われしまり子氏逝けり

三十年の良き主治医の引退にさくら散る道おぼろに帰る

またひとり「拉致被害者」の母御逝く無策な首相のお悔み丁重

戦死せる兄の骨箱「石ひとつ」庭に投げ捨て号泣せし母

酒井牧

秋冷

・萬

坂本禮子

ふる里は

・茨

長き蕊そよろそよると彼岸花母に甘える術のなきかな

無くしたる土古青のイヤリング頸たせて野ぶどうそこにもこにも

黒揚羽上を下へと三つ巴大根菜間引く前に邪魔する

滑らぬよう落ちぬようとに踏んぱりて蜻蛉飛ぶ中傾斜の草刈る

吾が肩に軽くはあらず草刈機なぞえの草は立派な虎刈り

涼風に明日は何を着て行かん抽斗の中を探す秋の色

半年余の閉門蟄居を夫に解かるどこにも触れずもの言わず行けと

芹なづな田より摘みきて粥つくり七日生まれの「しき姑偶ふ  
ま白なる十字の花のどくだみを根刮ぎ抜きぬ梅雨空のもと  
その昔血圧高き男にと長年煎じどくだみの香よ  
庵屋の池の金魚は生きるや荒草分けて餌をばらまく  
鯉のぼり揺れる影を踏みながら短歌七首をポストに落とす  
老い一人いつしか猫に使はれていそいそとする日日となりたり  
このひごろ素直になりしか老い夫は「ごくらうさん」と幾度も言ふ  
我の身か受け止め難き響きなり重き言葉よ「後期高齢者」  
抗いて一刷け二刷け隠しゆく白銀の髪女の性は  
先見えぬコロナ戦なり我も兵せめて紅ひく籠りの部屋で  
干し大根吊るせるごとく幾十枚再利用マスク春陽に白く  
文明のもたらす所以罪と罰籠れる日々は人の世ならず  
唇を濡らし流れる玉の汗夏マスク付け喘ぎつつ生く  
「今ですよ」雨の合間の蝉しぐれ雲よひととき蒼天を恋う

## 事件と小さな災害史

吉永 惟昭

私の生まれが昭和六年（一九三一）だから、満州事変の記憶などないが、日本の満州国傀儡支配が國際的危機を醸したのは事実であろう。昭和十二年（一九三七）七月七日、支那事変（盧溝橋事件）が勃発——。小学校一年生になりたてながらこの日をよく覚えているのは、その早朝、父に召集令状が届いたからだ。

第六師団野砲連隊で編成された測量部隊の主計として父は即北支へ出征。以後、中支、南支と転戦、内地勤務となつたのは私が旧制中学に入学してからだった。当時は出征兵士を原隊から駅頭まで見送る習慣だったから、四糠余の街並を父の部隊と共に歩し、駅のホームで万歳三唱し盛大に見送った。なお北支戦線の勝利に酔う中、騎兵隊の映画「曉に祈る」が上映され従姉妹の主人が隊長で出演しているとのことで観に行つた直後、ご当人戦死の公報が届き涙したのも事変当初の事件である。

昭和十四年（一九三九）五月、ノモンハン事件、同級生の父上が戦死され、私の義兄（姉婿）が速射砲中隊長として参戦、金鶴勲章の栄には浴したが重傷を負つた報が入り、忘れ得ぬ事件とはなった。満蒙国境の一辺地で起きたこの戦闘、満州駐留の小松原師団と第八国境守備隊（ハイラル駐）を投入した日本

陸軍は初めての近代戦を体験したという。死傷一万八千人といふ大苦戦、機構師団強化のソ連軍が相手、当初は速射砲が威力を發揮、ソ連小型戦車を次々と擲座炎上させたが、敵が重戦車を先頭に配備してからは速射砲弾が被甲を貫通せず、弾底信管の威力が半減、しかも地の利を得たソ連・外蒙軍に圧倒され、小火器を持たぬ砲兵陣は孤立無抵抗のまま全滅などの悲劇も産んだ。その敗戦の責任は現場部隊長に押しつけられ、捕虜交換で帰還した将校と共に、食事毎にお頭付きお膳には短刀と拳銃が添えられ自決を強要されたのだと聞く。まことしやかな噂が子供の間にも流れていた。学校では先生が「流言蜚語は嚴に慎むように」と訓されたが、子供心に「自決の強要」という悲壯感に襲われ、父に重なる夢にうなされた記憶がある。

一方、支那事変も拡大の一途を辿り、遂に南支まで点と線だけは制圧することに成功、仏印への足がかりが出来ていた。昭和十五年（一九四〇）は皇紀二千六百年の祝賀、小学生も旗行列に参加、國を挙げての祝賀に日本中が沸いた。満州でホテルを経営していた親戚の子が、記念に二千六百円を貯金しようとしたら、一回の貯金は二千円までとかで断られたと聞き、ちょっと羨しかったこと、旗行列に使つた日の丸、縦横が四

対三の黄金比と教えられて手作りしたことも忘れられない。

昭和十六年（一九四一）十二月八日、日本は遂に太平洋戦争に突入、A B C D 包囲陣との決戦となる。私は小学四年生、軍国主義教育のまつただ中に在った。旧制中学の入試には「大戦の詔勅」からも出題されるたって、あの難解で長い勅語文を丸暗記、理由も解せぬまま憶え込んだ。最初は勝利・勝利で東南アジアを席捲、連合軍の植民地は日本の占領下に置かれてしまったが、米国の物量作戦の前にガダルカナル争奪戦を境に日本軍の玉碎が相次ぎ、「悠久の大義に生きる」精神が教示された。

昭和十八年（一九四三）私は旧制中学に入学、授業はまだ継続されており、学徒動員が本格化したのは翌年度に入つてからである。昭和十九年（一九四四）の三月、四年生は五年生と一緒に練り上げ卒業、三年生も動員、学校は一、二年生が残るだけとなる。同級生も陸軍幼年学校、海軍兵学校予科、甲種飛行予科練習生など軍人学校への志願が相次ぎ三分の一が出陣していく。遂に日本本土も空襲に晒され、米軍の沖縄上陸後は多くの都市が波状爆撃を受け焼土と化していく。昭和二十年（一九四五）七月一日、熊本も大空襲を受け我が家も全焼する。

八月九日の昼前、西北の空にキノコ雲を見る。「雲仙岳の爆発だ」「神風だ」など珍説もとび出したが、長崎への原子爆弾の投下による原子雲であり、十三歳の女学生だった妻もその直下、爆心地から二杆の地点で被爆していたのである。

八月十五日終戦——。「最後まで闘う者よ来れ」の檄に押つ取り刀で駆けつけた藤崎八幡宮、首謀者と神官が死装束で神託を受けてからと待つうち蚊の大群に辟易して退散した思い出も持つ。それにつけても終戦後の飢餓は筆舌に尽くし難い。復員軍人、外地引揚者を含め、衣・食・住すべてが地獄図、米を磨

ぐ度に今でもあの頃が思い出される。日本全土に進駐軍が配備され、G H Q の統治下、たいした騒ぎもなく民主主義とやらが何となく定着してしまう。学制改革による六・三・三制、昭和二十三年（一九四八）三月、私は旧制中学を卒業、東京の学校に合格はしたが極度の食糧難とインフレのため遊学を諦めたという一生の悔いも残した。

物心についてから戦時中の十数年、戦後の混乱期を経て七十五年、何度の災害に遭遇した事だろう。大きな水害が二度、震度六・五の大地震も一度、台風被害は数知れない（九州は台風銀座だ）。本当に天災は忘れた頃にやって来るのだ。

被爆者の妻、最初の子供が血を噴いて夭折する。「生活虚弱児」として片付けられたが、被爆後遺症ではないかと次に生まれて来た児らにも心配はつきまとった。勿論、すぐに白血球が低下し、リンパ球が腫れる妻においてをやである。

日本全国を眺めても阪神・淡路の直下地震、東北の大津波を伴つた大震災、各地の台風禍、ゲリラ豪雨と枚挙に暇がない。そして殆どが「想定外」で片づけられ徐々に風化がすすむ。

今も襲われ続けているコロナウイルスの被害、もう天災か人災かわからぬところまで来ているのではないか？ 東京から娘が里帰りすると家内は二週間のデイ・ケア中止となり風呂に入れないから、娘には帰つて来ると言わざるを得ない。確かに感染は怖いし隔離の気持もよく解る。が、現実は災害だ。どんな災害も復興が成り、どんどん風化していくのをこの目で見て来た九十歳の老骨は、八十八歳の被爆妻の背で、この道はいつか来た道と唄いながら今日も明日に向かって車椅子を押し続ける。

## かえり船

桃原 良次

昭和二十年六月には台湾宜蘭市<sup>ヤランシ</sup>の国民学校でも集団疎開することになり、三年生の私も行くことになりました。疎開先は、丸太<sup>マルタ</sup>林<sup>リ</sup>という市の西方の町、員山<sup>いんざん</sup>から北へ谷川沿いの狭い坂道を五キロほど上った山の中ありました。そこには生徒達の宿泊所として藁葺き屋根の粗末な細長い建物が幾棟か造られていました。

疎開先では授業らしいことは殆どなく、午後になると近くの山の中からヨモギを取つてくることが日課のようになっていました。取つてきたヨモギは雑炊の具となり、ここでの食事は三食共にこのヨモギ入りの雑炊でした。

しかし、私はこの食事が苦になりませんでした。それに、当時は空腹に強い体质だったらしく、食事が粗末であろうと量が少なかろうと全く平気でした。毎日のようく、夕食後には疎開地の狭い空き地で友達と走り回つて遊んでいました。

そこで生活では、生徒の中の何名かが一組になって下の町まで食料を受け取りに行くことになりました。その日は私の当番で、何故か一人で行くことになりました。町で受け取つたものを担いで坂道をゆっくり上つていくと、下る時には無かつ

たはずの丸太のようなものがながながと道に横たわっていました。その丸太を何気なく跨こうとした時、はっと立ちすくんでしまいました。その丸太のようなものはよく見ると蛇だったのです。しかし、幸いなことに、その大蛇はゆっくり谷川の方へ降りて行ったので助かったと思いましたが、足の震えはしばらく止まりませんでした。

疎開生活も一ヶ月を過ぎた頃だったと思います。谷沿いの道をこちらに向かって上つてくる人がいました。近くなつてからよく見ると、それは兵隊さんでした。しかし、少し様子が変なのです。銃も銃剣も持たず、丸腰でした。その兵隊さんが、さらに近くまで来た時、「おーい。もう戦争は終わつたぞ」と大きな声で言いました。

それから数日後には生徒の保護者などが迎えに来て、皆それぞれの自宅へ帰つて行きました。

九月に入ると、早速授業が始まりました。最初の登校日の朝礼の時間に、担任の飯田桃太郎先生が言いました。「これからは、このチョーク一本から全て中国のものになります。」しばらくすると、蒋介石<sup>チヤウジエ</sup>率いる国民党軍が宜蘭の町にも進駐

してきました。彼らは一応隊列こそ組んでおり、銃も持っていましたが、その格好たるや大変なもので、服も靴もぼろぼろで背嚢にはナベやヤカンをぶら下げていました。それに、皆とても疲れ切っているように見えました。

それもそのはず。彼らは毛沢東の共産軍に、あの広大な中國大陸を追われ、流れ流れてやっと台灣にたどり着いたという訳です。

彼らとは対照的に、日本の兵隊さんは武装解除こそしていたものの、表情は明るく服装もこざっぱりとしており清潔でしたので、台灣人は日本軍と國民黨軍とのあまりの違いに驚き、どうしても日本が中國に敗れたとは信じることが出来ませんでした。國民黨軍の進駐後、日本人の間では中國兵に対応するため「日中対話集」なるものがガリ版刷りで出版され、多くの人が持っていました。

当時、中國兵が手荒なことこそ控えてはいるものの、日本人の家にやって来では、何か金目のものを物色しているらしいとの噂がありました。ある日、私の家にも中國兵がやって来たことがありましたか、母は流暢な中國語で追い返してしまいました。その後、台湾人は日本軍と國民黨軍とのあまりの違いに驚き、どうでも日本が中國に敗れたとは信じることが出来ませんでした。国民党軍の進駐後、日本人の間では中國兵に対応するため「日中対話集」なるものがガリ版刷りで出版され、多くの人が持っていました。

昭和二十一年四月、私達一般の日本人も日本へ引き揚げることになりました。  
船は基隆港から出航し、和歌山の田辺港に着きました。船から下りた途端、首の後ろからDDT（殺虫剤の一種）を勢いよく吹き込まれたのには驚きました。そして数日後に無事、目的地の熊本市に到着しました。

私は出水小学校の四年に転入しました。ところがクラスの生徒達が話している「日本語」がよく理解できないのです。台湾では私達日本人は標準語を使っていたのですが、私は日本にもう一つの日本語、つまり方言なるものが存在することを知らなかつたのです。

桃原少年は、故郷台湾での楽しかった日々を懐かしく思い出していました。

終戦後、数年してから村田さんの奥さんに聞いたことがあります。

「『かえり船』のあの娘とは奥さんのことですか」と。ところが、「違います。その人は私ではありません」と意外な答えが返ってきました。

母の友人だった台灣人の若い女性、李碧玉（愛称「玉ちゃん」）さんは、一人の日本兵とともに親しくなりました。

その日本兵が宜蘭駅から復員列車で出発する時、「私も一緒に連れて帰ってください」とすがりついて激しく泣きましたが、列車が去った後には、彼女一人が残されていました。

### 雨夜花

雨の降る夜に 咲いてる花は  
風にふかれて ほろほろ落ちる

（台湾歌謡）

## 二つの故郷のこと

篠原まり子

新型コロナウイルスの恐怖に怯え出したのは、三月の終りの頃だった。高齢者が罹るとリスクが高いという。スポーツクラブも中止になり、バスや電車の外出も控えるというより全く、何処へも行かないようにして過ごした。安全を気遣っている筈の体が、疲れ、高血圧と頭痛の日が続いた。その頃、二人の友人が亡くなる。

・魂を呼び合うさまに友一人コロナを知らず逝くは羨しき

友の死が羨しかった——。ぼんやりと小鳥やメダカ、お花達を見ていると安らぎを覚えた。新聞からもテレビからもコロナの情報が次々と伝わって来る。コロナを知つて自分なりに生きてゆけると思うようになって来た。懲つとしていても何も出来ない。家の中の用事は限りなくある。父と母に守られて引き揚げて来た命のことを思った。七十五年目の夏、回顧歴とも言えるこのページを埋めてゆきたい。

旧満州からの引き揚げは夏、新京から無蓋車で胡蘆島へ、航海は、船底の生活が一ヶ月。大人達の悲痛をよそに、子供心は日本よ、ニッポンと憧れさえあった。富士山と桜、海水浴等。

・内地への夢崩れたる仮部屋の豚の蚊遣りがなぜか悲しい

薄暗く閉われた部屋の片隅で煙を吐く豚を見ていると悲しみが、どっと溢れた。置き去りにしたままの犬と猫。既に行き先も知らぬ学校の友達。長い旅を終え、夢に見た内地との落差は大きな試練の始まりだった。久留米の父の実家で祖母が私達の帰りを待ち侘びていた。夏の真っ盛り博多の町中をぞろぞろと歩く引き揚げ難民。天神西鉄電車に乗り久留米で下車、五分も歩けば父の家に着いた。表札が掛かっている。ここが私の家。荷を下ろして嬉しくなった。風呂に入り用意されていた衣類を着て畳の感触が何とも言えず「ごろごろ転がっている」と兄が睨み

甲板で遊んでいると、時折目にする白い包みは大きい時も小さい時もあった。海原へ落とされ沈んでいく——。長く尾を引く汽笛の中で大人達の泣き声が重なる。  
昭和二十一年八月十七日、博多港に着く。初めて踏む日本の土を意識する間も無く、頭から真白い粉を吹き付けられる。荒々しい男達の手捌きで粉まみれになつた人々がうごめいている。人ではなく汚いものでしかなかった私達。

つける。二歳しか違わないのに何かと体裁を付ける兄である。母は黙って妹を抱いていた。嬉しいのか悲しいのか解らなかつた。黒い扇風機が回っている座敷だった。長男の嫁として許されない結婚をした母の事を知つたのは、ずいぶん後になつてからである。母にとって幾重にも辛い終戦だつたと思う。

九月に入り、久留米市の小学校に編入する事になるが、引き揚げの子供は一学年下ると聞き、落第は嫌だと泣いた事を覚えている。結局落第は免れて五年生のクラスに入つた。

さら紙の文庫本を父が買って来たのはその頃だったと思う。小さな文字だけの本を読んでいたり少し大人になつた気がしてくる。『フランダーの犬』。文字から生まれる物語に夢中になつて幾度も読み返していた。

・夏の海引き揚げ難民博多港ここがいっぱい若いわたし

・日本は学校嫌いの始まりに方言わからずひとりぼつねん  
・父はは語らずなりき旧満州の「七三一」も「ある告白も」

NHKスペシャルで詳細を知つたのは数年前、夏の夜の番組だった。七三一部隊は、第二次世界大戦中、エリート医学生の集まりで人体実験を旧満州で行っていた。命ある中国人を実験の材料としていた。三千人を超える人の命である。

同じくEテレで「ある告白」と題して、映像で語る東北に住む女性の姿。満蒙開拓の地にソ連兵の侵攻がある。その時の掟は、集団自決だった。テレビの画面で生き残った女性が語る。「接待所」が設けられ、ソ連兵相手の屈辱の日が過ぎ、郷里への帰還が叶う。命あってこそ家族と暮らす幸せを女性は語る。悲しみは消えないけれど生きている「今」を感じる。九十を越えた面輪を憶い出す。

満州里（マンチューリー）は中国とロシアの国境にある。一九三五年この地に生まれ、満里子と私は名付けられた。国境に添うアムール河で産湯をしたと聞かされているが、十月生まれが本当ならば、それは無いと聞き流している。十月の満州は雪が降り続く。

父が務めていた大学から父の死後、履歴を貰つた。昭和三年北京留学をして満州国の外交部に携わり、満州里の領事館を経て満州國建國大學開校の為、家族四人新京に移り住んでいる。私の満州の思い出と言えば新京に凝縮されている。

建国大学は、一九三八年新京に設立された。日本人、中国人、朝鮮人、モンゴル人、白系ロシア人から選抜された学生の共同生活は五族民協和の夢を育てる事にあつた。同窓会に幾度か兄と参加したが、父を知る人々との出会いは忘れ難い。平和を願う二世たちの建大同窓会が結成されていると聞く。

満州國の崩壊を知識としては理解するものの、満州國が傀儡であろうと、まばろしであろうと、私の故郷には違いない。父と母に育てられた土地であるから。

満州が記憶の故郷とすれば、私にはもう一つの故郷、心の故郷がある。滋賀県大津市で歌を学んだ事に及ぶ。「やあ、ご苦労さん」。師の声は今も聞こえてくる。

生と死の狭間で、篠原と過ごした大津の十五年もある。

一枚の紙にサインす滋賀医大亡き夫と帰るみぞれの裏門一行の父への詫び状瀬田駅のポストに落とす音のなき音・靈迎え盆の回向に供えた母の知らざる母恋の歌・食細く逝きたる父の病名は老衰二文字豊穂の秋・「お姉ちゃん」またも空耳降りしきる落ち葉のコンチャルト

二人で行こう

## 語らない理由

光広 祥子

「七十五年間は草木も生えないといわれた焦土広島にあって長男の誕生は、生きる力となりました。」と、兄の結婚披露宴の挨拶の中で話した父。戦後間もない頃の、若かった両親の不安な心情を旁観させるはじめてきく話だった。その後、折に触れ胸痛く思い出す私であつたけれど、それ以上深く尋ねる事なく過ごして来た。当時の事は、ほとんど何も話さない両親だった。

令和二年八月六日、八時十五分。広島平和公園での平和祈念式典の映し出されるテレビの前で、ひとり手を合わせ黙祷をした。いつの頃からか、ひとりで黙祷する方が、心がこもるようを感じている。

コロナ禍の中、密を避け人数制限をして行われた式典の様子を見ながら母を思った。近くに暮らしながら一緒に行つたのは式典前の時間帯に一度だけ。遊びに出かける前に参列する人や、母とその家族をさがして入市。わずか数回しか会っていないかった十三歳の母の弟が、実家近くに負傷して横たわったまま、「お兄さん」と父を呼んだという。弟が亡くなるまでの一ヶ月余を病院で付き添つた母。負傷した人達がトラックで運ばれてゆくのに、頼んだのに乗せてもらえなかつたと、弟は、ベッドの上でぼろぼろ涙をこぼして泣いたという。「助からないと思われたからでしょう」と、すこし声を詰まらせて話した母を忘っていた。夏が来るたびに、思い出される事が多かつたはずと思

う。

晩年、言葉数の少なくなった父と、引き出しの整理と一緒にしていた時、黙って渡された小さな二枚の紙片。被災当時の様子が、父母の字でそれぞれ短く記されていた。広島市が募ったものだったが、記しただけで提出しなかつたのか、下書きだったのかはわからない。

結婚して東京で暮らしていた両親。八月六日のあの日、母は広島の郡部の父の実家にて、父は広島へ帰る途中の汽車の中。父は、広島市内の母の実家で会えるように事前に手紙を出していたものの手遅いで届かず、原子爆弾投下数日後の広島市内へ母とその家族をさがして入市。わずか数回しか会っていないかった十三歳の母の弟が、実家近くに負傷して横たわつたまま、「お兄さん」と父を呼んだという。弟が亡くなるまでの一ヶ月余を病院で付き添つた母。負傷した人達がトラックで運ばれてゆくのに、頼んだのに乗せてもらえなかつたと、弟は、ベッドの上でぼろぼろ涙をこぼして泣いたという。「助からないと思われたからでしょう」と、すこし声を詰まらせて話した母を忘れられない。

数年前のテレビで、幼い女の子が、トラックに乗せてと頼み「女子共は駄目だ」と言われて、火の燃えさかる方へ走って行ったと証言する人がいた。母の弟もそうだったのかかもしれない。命の選択は、非常時に、今でも何時でも行われている。たったひとつのかけがえのない命も選択されるという事実は、重くつらい。

弟の学校の、名前のある慰霊碑に、ひとりでお参り続けていたと知ったのは、母の亡くなる十年位前の事であった。十六歳で家の中にいて助かった弟である叔父もまた、何も話さなかつたときいている。元気で平穀に過ごせた母も叔父も、何も話さないでも共有出来る何かがあつたのではないかと思う。あの何もかもが充分とはいえない時代に、体重が四十キログラムを切る事があつても、三人の子供を育て、元気に過ごせたのは、自分の力ではなく、守られているのだと思うと話した母であつた。

両親が逝つて以来、広島に育つた人間として何かするべきではないか、出来る事は何かと自らに問う事が多くなつた。まだ何もしてはいないけれど――。

伝承者になるべく研修を受ける人。今こそと、話はじめた九十歳過ぎの人。親世代も知らない人が多いと思う高校生も立ち上がっている。被爆体験証言者の記憶に残る光景を描く為に何か月も続く交流。話し合っては、描きを繰り返し仕上げいく。原爆投下前の爆心地周辺を仮想現実の技術で再現する高校生。何年も前からの取り組みである。これまでの今まで良いのですあなたは、と問い合わせられている氣にもなる。

今年は、リモート修学旅行として、被爆者の話をきかせて欲

しいと望む保護者の声もあるらしい。縁ある多くの人が、身近な人が、当時を知っていた、私達の子供の頃とは違う現在。求め続けなければ、大切な事実も忘れられていく。あまりにも身近過ぎて、求めないで来た私は、知らない多くの事があると思つていい。

彼の世にいる多くの人を思うせいか、何かの折に垣間見えた母の諦念は、子供ながら寂しく思つた。しかし、この頃になって、諦念ではなく覚悟だったのだと思う。生あるものの死を受けとめる覚悟。頭で分かっていても、今の私にはない。コロナ禍の今年、見えない恐るべきものが身近にあるという現実。何と無防備に暮らしていたこれまでである事か。万全で適切な対策をして、もう前へ進まねばならない時が来ている。これもひとつ覚悟ではある。

今の子供達は、明るい未来を思い描く事が出来ているのだろうか。

自ら被災者でありながら力強く、心を寄せ合い、信頼し合つて生き抜いた人達がいる事を、その存在を生かし続ける為にも話せる私でありたい。

何も語らなかった、語れなかつた人達の心を思い、問い合わせる私である事を、先ずは、孫に伝えたいと思っている。情に流れず冷静に伝えられる私でありたい。

## 遺骨なき骨壺

仲西 正子

戦後七十五年。今年は、摩文仁での沖縄県戦没者追悼式、地域の慰靈祭も、コロナ禍で縮小され一般参加も自粛となり自宅での追悼となつた。また、コロナ禍の三密防止は、清明祭も旧盆も親族が集うこと避け、各々の家族で済ませた。それは、戦後初めてのことであつた（あの世）の方々も戸惑つたのではないか。

地元の新聞は数ヶ月前から戦争体験者の戦火に追われた状況の証言特集を組んでいた。戦争を引き摺つて七十五年を生きてこられた人の言葉は重い。私は戦争体験者ではない（二十三年生）、けれども戦争の残影を引き摺つている。そのことは、上梓した第一歌集『まほら浦添』に収録した。

- ・沖縄戦廃墟の跡の無聲音一フィートフィルム回しておりぬ
- ・児は背に頭に手にも持ち持ちて逃げる婦女子の裸足が痛い
- ・手足なき死者の咆哮きこえくる無聲音なる一フィートフィルム
- ・力チカチと歩く度ごと泣いていた父の義足の行方知りなし
- ・戸籍にも残らぬ姉の名 一族と並べさする平和の礎
- ・今ここに漂う風を骨壺におさめて弔う三度の風を
- ・零歳の姉の骨なりいかほどの重さなりしや両手運める

戦争体験者で平和学習にも力を注いでいた方で、毎年、「慰靈の日」が近づくと図書館に「沖縄戦に関するコーナー」と「平和を考える本」の展示をして生徒及び教師に提供してきた。

掲出した歌は、昭和五十九年の作。その前年には、県内に「一フィート運動」（アメリカの公文書館などに所蔵されている沖縄戦の記録フィルムを一人一フィート分を購入し、沖縄戦の実相を伝えていく運動。）「子どもたちにフィルムを通して沖縄戦を伝える会」（教職員組合）からフィルムを借用して、私は数日間、視聴覚室に籠もり三十余学級の生徒に向けて、フィルムを上映した。モノクロで迫り来る画面に中学生も裸きの声を発したり顔を背けたりした。私は、母が一歳半の長姉と昭和十九年十一月に生まれた赤子を連れて避難する姿と重ねた。

・樹によれば樹、地に伏せば地の命なり 弾はずれ来て我を生みし母

・力チカチと歩く度ごと泣いていた父の義足の行方知りなし

・戸籍にも残らぬ姉の名 一族と並べさする平和の礎

・今ここに漂う風を骨壺におさめて弔う三度の風を

・零歳の姉の骨なりいかほどの重さなりしや両手運める

昭和二十年三月、地上戦に備えての住民の避難が始まり戦禍に巻き込まれていくのである。母が一人で幼子一人を抱えて、食料と寝床を確保せねばの必死さを想うとき、あのモノクロの

画面が甦る。栄養失調で命を奪われた次姉のことを語る母からは「貴方には二人分の徳が付いている。それは、次姉と同月、同日、同時に生まれた」と物心ついた頃から聞かされてきた。

その姉は私の分身。戸籍上も次女の私は姉の分も親孝行をと心して来た。父親に抱かれることもなく、戸籍にも残らぬ姉。長い間、墓も位牌も無く、戦後六十三年にして、実家の墓が建ち、その傍らに姉の仮墓を置いた。(両親が健在のため)

しばらくして、父の実家の墓を開けることがあり、預けてあるという姉の骨壺(中に小石を三つ)を引き取る時である。大きな龜甲墓の中には姉の骨壺は無いとのこと。新しい骨壺を用意しておろおろしている兄弟八人。僧侶のご教示で「風を三度」骨壺に招きいれ姉の入魂をしたのである。その後、母が亡くなり、姉の骨壺も一緒に本墓に納め位牌には戒名も並べ供養した。平成二十五年、父が亡くなり後片付けの中から、戦争前後の父の簡略な履歴書が出てきた。

昭和十一年 陸軍大阪砲兵工廠入隊

昭和十四年八月 宮崎県都城23聯隊入隊

昭和十七年 負傷ノ為兵役免除トナル

昭和十九年五月、王子製紙都島工場入社

昭和二十二年 煙鄉ノ為退社

満州で負傷した父は(詳細不明)、熊本の健軍にて療養後に帰郷。母と結婚し、昭和十八年に長姉誕生。しかし、翌年の五月には大阪の軍需工場へと勤員されている。その時には、母は次姉を身ごもっていた。

父は大正七年生まれ。十三歳で母を亡くし、尋常小学校高等科一年で中退。農家の次男の将来を見据えて商店に就職。その

後大阪へと出ている。それからの歳月は右の履歴書通り。その行間のことを健在の時に、詳しく述べておこう。また、戦後の大坂での記録ノートが出てきたのも元の場所に戻し、暫くしてから見ると、実家の床下から白蟻が食い付き、すでに手が付けられなかった。

・色あせし若き日の父の日記帳のぞくなかれと白蟻が喰う・磨り減りし戦傷奉公杖の先なでつつ父の立志をおもう・一年忌の父の遺影に伝えむよ沖縄傷痍軍人会の解散を

父は傷痍軍人手帳を持ち、会の世話人として関わっている。傷痍軍人会の解散を新聞で知った時、そのような会を再びこの世に在らすなど強く思った。

平和の希求は万人の持っているもの。そのことは、沖縄に生れた者が、戦争の悲惨さを訴え続けることだと思う。

私は学校司書として在職中、本や資料の提供は勿論、「読み聞かせ」「戦争写真パネルの展示」「平和の尊さを訴える映画の放映」等をおこなってきた。

・上陸から焼け跡までを並べおく戦争写真に包囲されたり

・慰靈の日めぐりて今年も写真展に集団自決を児等は問いくる

・母たちが声を鎮めて語りする『マブニのアンマー』骨立ち上がり

三首目の歌は戦争で亡くなった息子の骨探しに、十年の歳月を摩文仁に通い探しあてた母の物語。「朝の読み聞かせの会」の母親たちと大型絵本にして上演した。

沖縄には、まだ、身元の判明しない遺骨が十八万人分もあるという。全国には小石が三つの「遺骨なき骨壺」がそれ以上に在るかもと思う。

## 戦後七十五年目に思う

許田  
邦子

東向きの窓に、稻刈りを待つばかりに稔った黄金色の美しい

田んぼが広がっている。西側には新しい家々が建った。家々の庭先には一台の乗用車が止まっている。

戦後七十五年目、コロナウイルスに苦しめられているとは言え、世界第三位の経済大国となり平和で豊かな景色を見ていらっしゃるのは、戦争で犠牲になった人々と、戦争を生き抜いた人々が二度と人と人が殺し合う戦争はしない、子供たちに酷さを味わわせてはならないと戦後の復興に励んできたお陰なのではないかと思う。

「カジ」は風、「マヤー」は廻るの意で、「カジマヤー」とは、私事で恐縮だが、私が宇都宮に移り住んで二十年になる。沖縄の実家では、母は五年前に他界し、九十七歳の父が健在だ。父は去年、カジマヤーというかぞえ九十七歳のお祝いをした。

のに思える。

一九四一年（昭和一六年）、父が十八歳の時、太平洋戦争が始まった。二十歳になり徴兵検査を受けたが、体格が基準に届かず入隊できなかつた。今なら戦争に行かずに済み良かったと思うのだろうが、当時の父は引け目を感じ、居たたまれない思いだつたという。徵兵検査で合格した同級生は何人も戦死した。  
・童顔の微笑み頬ちゆ友の名を呼びてなぞりぬ平和の基礎  
と父は詠んでいる。戦後も負い目を感じ続けているのか、戦争の話はあまりしたことになかった。

一九四五年（昭和二〇年）、沖縄戦が始まつた時は二十二歳で、新聞社に勤めていた。沖縄県立師範学校生が掘つた首里城地下の司令部留魂塚で新聞を発行し、戦意高揚の記事ばかりだつたという。敵が迫ってきて社は解散。南部に避難することになり、地上に出ると、首里城はなく、戦況が劣勢である事を知つた。激しい艦砲射撃の中を同僚たちと逃げるうち、亡くなる人々もいた。このように戦闘員でない一般人も否応なく地上戦に巻き込まれ辛苦を嘗めた。父は命からがら逃げまどううち負傷。炸裂した弾の破片が腿に食い込んだが、一命は取り留めたのだつた。

・着弾の破片スコップ貫きて腿に食ひ込み命拾ひぬ

もし、ここで弾に当たり、父の体が吹っ飛んでいたら、私はこの世に居なかつたのだ。

・死傷せる馬肉食まむと蓋取れば鍋に溢るる蛆の蠢動

・慘すきる姿忘れず摩文仁野に顎をもがれし兵はいづこにまこと戦争の悲惨さに胸が塞がり、言葉が出てこない。

六月で戦争は終わつた。戦後、米国政府の出先機関、米国民政府が置かれ、沖縄を統治した。その中にある保安部（警察）で父は勤いた。一九四七年（昭和二十二年）結婚。一九五〇年（昭和二十五年）私が生まれ、父は単身アメリカに留学。留学から戻つてからは、琉球政府の貿易庁に籍を置いていた。暫くして、米国フォード社代理店に移つたが、五年後フォード社は撤退。その後、製造業の会社などで微力ながら沖縄の産業発展に尽くした。現役を引退してからは穏やかに暮らしている。ただ、沖縄戦で死んだ同級生や多くの犠牲者に申し訳ないという気持ちは頭の中から消えることはないようである。

戦後七十五年、戦争を経験した父たちのような人々が少なくなり、その肉声を聞けなくなる時がきている。

父の歌集出版と同じ頃に、仲西正子さんの歌集『まほら浦添』が出版され、その中に次の二首があつた。

・激戦の前田高地に倒れしは石部隊なり北の人多し

前田高地（浦添城址）は、子供の頃から激戦地とは知つていてが、詳しいことは知らなかつた。

一九四五年（昭和二十一年）四月一日に沖縄本島に上陸した米軍は、司令部が置かれている首里城攻略のため、前田高地は突破しなければならない障壁だった。北側が断崖絶壁で展望がよく、この高地の確保こそ、沖縄戦の勝敗を決める最も重要な作

戦だった。

この歌をより深く知るために、外間守善著『私の沖縄戦記』（前田高地・六十年目の証言）という本を読んだ。著者は二十歳の学徒の初年兵、前田高地で死闘する隊に配属された。仲西さんの歌にあるように、山形県と北海道の出身者が多いとあつた。沖縄に来る前の昭和十九年夏まで満州で、実戦経験は無かつた。突然行き先も告げられず釜山から「対馬丸」という船に乗せられて沖縄にやって来た将兵たちと書かれている。「対馬丸」と言えば、その後学童疎開の八百人を乗せ九州に向かう途中、米軍の潜水艦に撃沈された船である。

前田高地のことと米軍は「サタンヒル」と言い、日本側は出撃すれば生きては帰れない「魔の高地」と言っていた。日米双方阿鼻叫喚の攻防は四月二十六日から五月六日まで二週間近く繰り返し続き、米軍に制圧された。

激戦の前田高地近くの丘に私が勤めていた学校がある。校門から東シナ海が見渡せる見晴らしが良いところだ。ここに立たびに、戦争の時、海が見えなくなるほど米軍の戦艦で埋め尽くされていたことを想像する。校庭を整地した時、グラウンドから二十七発の不発弾が見つかった。ここも前田高地攻略の範囲内だったのだろう。艦砲射撃が激しかった地で、多くの人々が亡くなつた。生徒たちに何かあつてはと、亡くなつた人々の鎮魂の碑を建てることになった。校長に直径五十センチ長さ三メートルの木柱に「慰靈碑」と書くように言われ、何度も稽古をして書いた。墨汁で書いた「慰靈碑」の文字は沖縄の激しい雨ですぐ消えると思ったが、意外にも長いことくっきりしていた。うりずんの頃、碑の周りに野生のテッポウユリが咲く。碑は十年ほど校庭を見守つていたが、朽ちたのでコンクリートの碑に建て替えられた。

## 戦後七十五年、沖縄は今も

松瀬トヨ子

「エモイ」、近年にわかに目にする言葉である。新語だと言う。切なさや、懐かしさなどを含む何とも言えない感情を表す言葉だと言う。

あのおぞましい太平洋戦争が終わり、今年で七十五年。沖縄では現在も戦争ゆえに残る米軍基地被害が限りなく続いている。真っ青な空を日常的に飛びかう米軍用機。澄みきった辺野古の沖に土砂を投げ入れてゆく辺野古基地建設。米軍の事件や事故。県民がいくら抗議しても、米軍や日本政府は言葉をはぐらかし答えは出てこない。そのような事を、ある意味で「エモイ」と言うのではないだろうか。

・基地騒音どんなに抗議しても駄目と知れども黙つたら黙認となる

桃原邑子

ま声

今年の四月、普天間基地から発ガン性の含まれた泡消化剤が漏出。その泡が周辺に飛び散り、住民を不安に落とし入れた。

それ以前には、宜野湾市の保育園に米軍ヘリの部品が落下、その六日後に今度は普天間の小学校の運動場にヘリの窓枠が落下、児童生徒の体育の時間であった。そのニュースに県民は驚愕し

た。それ以前、二〇〇四年の八月、普天間基地所属の大型ヘリが沖縄国際大学の本館に墜落炎上。そんな異常ともいえる事故を知りながらも日本政府は未だに言い逃れ放置している。また、普天間飛行場へのオスプレイの配置。言い知れぬ不安を持ちながら県民は力の限り抵抗を続ける。その他、少女への暴行、婦女子への暴行殺人事件も記憶に新しい。

米軍の基地さえなければ沖縄は美しい島である。一月には濃い紅色の絢寒桜が島を粧い、三月うりずんになると伊集・月桃・鉄砲百合がさわやかな香りを放ち咲き盛る。若夏になると桜悟・鳳凰木・山丹花が青い空に映える。

て

松瀬トヨ子

・選挙前のチラシも電話も風にのり戦争する国にしてはならない。今年は、新型コロナウィルスの感染防止のため平和行進が中止となり、摩文仁での慰靈祭もひつそりと関係者のみの参列となつた。沖縄では、慰靈祭は死んだ人のたましいを慰める儀式であると同時に、戦争体験から学んだ教訓を再確認する儀式でもある。戦争で家族全員を失つた従兄弟が今年の慰靈祭に参列。その現状を、だんだんと風化されてゆく、と呟いた。胸が痛かつた。しかし、戦争体験者も非体験者も多くの犠牲の上に得た教訓を決して手放すことなく継承する努力を忘れずにいたいとも力強く話してくれた。

沖縄戦の戦火をくぐり抜け、激動の戦後を生きた戦争体験世代も時がたつにつれて減少、あるいは高齢化している。体験を聞くという継承のあり方は難しさを増してゆくかも知れない。しかし忘れてはならない。いや、どうしても風化させてはいけない。傷を負い、米軍の基地を負い、揺れながらも暮らしを守ろうと県民は踏ん張っている。これからも……。

## 記憶

深山嘉代子

被爆後七十五年間は草木も生えぬと言われた広島の地。今年その七十五年目の夏をむかえた。それも人類が初めて出合う新型コロナウイルス感染拡大の只中に。八月六日、参列者の人数制限は行われたが、平和記念公園で例年通り平和記念式典が行われた。サイレンが響く。一分間の黙祷。人々が各自の場所で祈る。そんな光景がテレビで放映された。

この場面にかさなってふとよみがえた記憶がある。六十年前、八歳の八月六日。父に連れられ、宇品港から絵の島へ海水浴に行く船の中で八時十五分をむかえた。皆が黙祷していた。その静けさをおもいだした。父母から、かつて聞いた戦時中また戦後もない頃の話と私の記憶を思い起こしてみたい。

昭和十九年、父の出征により、祖母、母、私の女ばかりの世帯となつた。それを機に、広島市内から大野浦という海沿いの町に疎開していた。昭和二十年八月六日、原爆投下の日、祖母は市内の謡曲の先生宅で被爆。市外北東方面の埃宮に逃げ五日後に帰り着いた。八月十五日、終戦。その八月の終りに近いある日、母は私を背負い瓦礫だらけの市内に入り、わが家の焼け残った蔵を拠点に歩きまわったという。一歳十一ヶ月の私は、その時のことを無論憶えていない。が、成長するにつれ両足に

沢山のできものが出来ていたこと、いつしかその傷跡が消えていったことは憶えている。今思うと、それは母に背負われた私の足が残留放射能に晒されていた為だったのかもしれない。

その年の九月十四日、多くの死者の出た伊勢湾台風上陸。広島県もその影響を受けた。当時の大野浦の家の背戸が山ぎわで危険だと、母に背負われ夜の川を渡つて逃げた。川というより、いつもは溝程度の水の流れだったようにおもうが、この時のとても怖かったという思いが、今もかすかに残っている。それからどれくらい後のことだったのか、ある日突然、家に背蓋を背負った男の人が入ってきた。私は障子の陰からこわこわと見ていた。それは、私の写真を祈り呂んで胸ポケットに仕舞い戦地に赴いていたという父だった。

その頃の川の記憶がもうひとつある。父が戻り広島に居を移そうとトラックに乗っていた時、市内の京橋川に架かる御幸橋にさしかかった。橋の欄干がごとごと倒れていた。それが異様な光景として、わざれられない。記憶の底にある、すべてが一方向に倒れた御幸橋の欄干。今でも橋を渡る時、かすかな不安を感じ足裏に違和感を覚えることがある。

私だけでなく、広島には、夾竹桃や木槿の咲く八月がくると、心が重くなるという方が多くいる。私よりももっと確かにあの日を受け止めている人々がいる。それでも、戦争を体験した世代は減り、私の記憶もうすすれ、証しとする物もなくなっていくこの頃、あらためて戦争の無惨を忘れてはいけないと思う。私の心に刻まれている言葉。一九八一年に広島を訪れた教皇ヨハネパウロ二世の「平和アピール」の中の（戦争は人間の仕業です）を結びに――。

■特集・コロナ禍のなかで迎えた戦後75年

## 空襲と学童疎開

小野 雅子

私は昭和一一（一九三六）年生まれ。昭和一八（一九四三）年に小学校（当時は国民学校）に入学しました。「ミンナデベンキョウレシイナ国民学校一年生」の歌は今でも歌えます。家は文京区久堅町（現在は小石川五丁目）にありました。小石川植物園の近くです。

昭和一六（一九四一）年一二月に太平洋戦争が始まって、次第に戦況が悪くなり、東京も空襲の恐れが出てきて疎開が始まっています。疎開には三つあって、ある建物や施設を守るために、その近くの住宅を壊して住民を他の所へ移してしまった「強制疎開」、それぞれの家庭で親戚や知人を頼って移り住む「縁故疎開」、そして、大都市の国民学校初等科児童を農山村や地方都市へ集団移動させる「学童疎開」です。

昭和二〇（一九四五）年早春、私は新潟県の石打に疎開しました。三年生から六年生までが、お寺や旅館に入りました。私たち三年の男子・女子と五年の女子は種村旅館です。駅から歩いて行って下の方で降りてゆくのでどこかと思ったら、そこが玄関でした。一階の窓の高さくらいまで雪が積もっているのです。大人のスキー板に三人でしゃがんで乗って坂道を滑って遊びました。溶け始めた雪の中の、路の脇の鮮やかなみどり色は今

も目に浮かびます。  
三月一〇日の東京大空襲に続いて五月二五日に大空襲があり、我が家は焼けてしまいました。家は焼けましたが、両親、祖母、弟の家族は死なずにすみました。植物園へ逃げたそうです。学童疎開をしている間に家族が空襲で死んでしまった子供が大勢いたことを見聞きするたびに、私は幸せだと思わずにはいられません。

夏になって、六年生の男子と三年生は青木寮へ移りました。勉強もしましたが、毎日、山へワラビ採りに行きました。この頃から食糧事情が悪くなって、ふだんの食事も弁当も、弁当箱四分の一くらいのごはんに鉄火味噌（煎り大豆を混ぜた味噌）のおかずか、エグくて不味いじやが芋だけになりました。私は山で漆にかぶれて辛い思いをしましたし、オデキが出来て、オデキの子達は一番あとからお風呂に入れられました。

終戦のラジオの玉音放送は、六年生だけが聞かされました。

六年生が泣きながら二階から降りてきたのを覚えていました。

秋になって、父が迎えに来て、焼け跡に建てたバラックの家へ帰りました。途中、一泊した、最初に暮らしていた種村旅館のおばあさんが私を見て「こんなに瘦せて」と驚いていました。痩せて栄養失調になり、しばらく医者に通いました。それも近所の医院は焼けてなくなってしまったので、遠い焼け残った町の医者に歩いて行かなければならなかったのです。

私は空襲を実際に経験してはいません。父も伯父も戦争に行つたけれど無事に帰ってきました。戦死する若い年齢の男の親戚はいませんでした。生まれた時代、置かれた場所、それによって受ける苦しみや幸いの違いは、なんといえばよいか分かりません。

## 一一〇一一〇年の夏に

大槻 知子

今年初めからの新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言という文字に、何故か言いようのない不安な気分になりました。戦争の実体験がないのにどうしてそんな気分になつたのか不思議な思いがありました。

数年来、戦前の愛国少年教育を受けた世代の方々と「東京裁判」の記録映画を見ながら、当時の新聞や裁判記録、英國、米国、日本の公開された古文書により検証された本や満州からの引き揚げ経験者、その他さまざまの戦争体験者の記録を読んでいたためでは、と思い当たりました。

私自身太平洋戦争開始ひと月前に生まれ、父の召集先である名古屋まで見送りに連れていったと母に聞かされて育ち、小学校までの物語はすべて戦争中の出来事とつながっているように思えます。

私ははじめての記憶は、高い板の間の上から広い階段の下の一面の緑を見ている宙ぶらりんの気分、障子の下の三和土に水があふれ下駄がぶかぶか浮かんでいる景色、そしてゆらゆら揺れる板の穴から下を覗いて「速い」と感じた水の流れの怖さ等、

断片的なものです。もう一つ、耳に残っている爆音の恐ろしさは、中学生になつても飛行機の音に身が縮むほどでした。後に、そこは疎開先の大井川山奥の吊り橋を渡つた川根村の茶畠であると解り、私の遠い思い出の原点となりました。

不要不急の外出規制の中、中途半端に整理していた写真を結婚するまでの一枚としてアルバムに収めることにしました。その初めの一枚が母に抱かれた年子の兄との小さな白黒写真。何気なく見ていた写真でしたが、父の遺品の番号付きのハガキに書かれた文をふと思い出しました。戦地でこの写真を見ながらあのハガキを書いたのではと気付き、父と初めての会話をしたような気持ちになりました。両親とは最後までゆっくり戦時中の話ををする機会はありませんでした。

コロナによる自粛のためテレビで過去の戦争ドキュメンタリーが多数放映され、繰り返し見る機会がありました。それによつて、すべての戦争は殺人行為である、人間が犯した過去の出来事だったで終わらせてはいけないと胸の奥に刻み込まれました。現在も地球上のあちこちで戦争が起きています。その元凶が何に因るかに目を向け、検証していく責任ある世代とも思います。ウイルス退治のワクチンの製造も大切なことながら、溢れるほどの物により安定しているかに見える社会から垣間見る、現実の一瞬の不安定な精神を直すワクチンを探したいと思っています。

## オリーブ集



室家洋子

やすらぎ

・洛

養学登志子

大き静けさ

・凌

頭垂れ水面に映す蓮の葉の冬の孤独に耐うるその影  
春彼岸の極楽池の石の上に首伸べ龜の甲羅干しおり  
切り口をほとばと出する水仙の生体液がわが指濡らす  
いっせいに戸を閉ざしたる商店街を五月五日が通り過ぎゆく  
人気なき神苑見学マスクとり青き香りのやわらかきを吸う  
りいりいとこおろきの音は改札の朝の流れに途切れながらも  
つくばいの水面埋むるもみじ葉に寛の水の音のなく落つ

山本

孟

別れ

・大

若林美知恵

ただにただ

・羊

妻の病ひ思ひるるとき六甲の山際をりしも夕茜せり  
ひと月半入院終へて立つ厨妻の背<sup>せなか</sup>より葱きざむ音  
病める妻一泊入院がらんとしテレビを消せば冬の風音  
冬の陽の恵みをひたに受けむとし凍ゆる手をもて洗ひ物干す  
食細く日々に衰へゆく妻は遺影を選んでほしいと告ぐる  
コロナ禍の世をコロナに侵されず妻は己れの癌細胞に逝く  
夕暮れて独り食事の用意せん妻の立ち居し蛇口をひねる

太く名を書き込みしよりシャツ、パンツ、タオルことと父の貌持つ  
「防犯カメラ作動中」なる貼り紙に守らるるのか里の自販機  
ただにただ泣かまほしさに教会の固き木椅子に俯きたりし  
神の掌の温みだこれは嵩たかきダウンジャケットにくるまれております  
終の棲家とならんケージを買いに行く鼻腔深くに癌病む柴犬の  
古き社に傾げる石柱並びいて「壹拾圓」とかすかに読める  
青き炎たばしらせつつ顎上げる龍に色塗る負けるべからず

泉 嘉穂子

さわつき

森

色井 静代 愉快

崎

ばらばらの恐竜の骨はつながりて魂のなき器立ちたり  
恐竜博出でて立ち寄る精養軒木苺のケーキに時空をもどす  
ひきしおの速き川波ながめつ松江おでんの芹はしゃきしゃき  
江の川思えば遠しただ一度ちちのみの父と若鮎釣りき  
買い出しのスーパーの棚のがらんどう胸のざわつきにわかに立てり  
家ごもり続く厨の屋さがり竹の子ゆがく匂いのみちる  
足跡のマークまでにはもう少しレジの行列問合をはかる

石澤利夫

老い

萬

老いること恐れず恥ぢず凜として明日を生きぬ米を磨ぎをり  
霜焼けや輝も知らぬ子や孫と老いたるわれも春を待ちをり  
ばらばらと夜半の秋雨が窓叩く今に逝きしを知らすが如し  
車窓に見る夕焼け深く秋となる石狩平野は黄金色して  
叙歎受く君を祝ひて囁む席今宵のお膳に薬の香匂ふ  
片言においてつないで唄つてる夕べ母ちゃんの帰り待ちをり  
老いたれば争ふことも先はなく細々との言ひてすぎをり

伊東ミイ子

シースルーの翅

福

紫陽花の枯れて色なき花魁に止まる蜻蛉のシースルーの翅  
裸木を渡る寒風落したる楓の実あまた徑に転がる  
忘れたき原発事故後の日々のことコロナウイルスに心閉ざさる  
国境のない日本の県境に出るな！来るな！とコロナに怯ゆ  
歩きたい人に逢いたい思いきりハグしてあげたい友のおりたり  
地球儀を真空パックに包みこみ一撃したきコロナウイルス  
スーパーのレジ打つ人のゴム手袋コロナは人の温もりを絶つ

夕食の準備整え「笑点」を愉しみて待ついたずらっ子のよう  
カタカゴのうつむき加減なつかしく内気な頃のわたしが見える  
アサガオを色とりどりに咲かせし日大いて子いておおいに愉快  
英國の明るき海辺のカレンダー心に灯る孫のおみやげ  
コロナ菌いすわらなければ出かけてた誕生日岩手・竜泉洞へ  
抜歯後の陥没あかか燃えたつを鎮め鎮め行くみぞれ降る街  
駅前に続くイチヨウの並木道ふろろんふろろん風の通り路

宇井秀雄

尊寿の祝ひ

・う

未明よりミンミン蝉のけたまし今日も猛暑か氣勢削がれる  
町からの八十歳の祝ひにてジーンズパンツオーダーをせり  
早朝の座敷に灯りつけむとて思ふ廻りは蝉時雨のみ  
炎天の畠の灌漑散水に浮かびぬ虹を涼しく過ぎる  
「おはやう」と皇子に言へば息子が二階にて高一女孫への「おはやう」四こゆ  
今日はしも八十歳の誕生日妻うな重に祝ひくれたり  
妻はもう夕食終りそれを見て「すんませんね」ともう少し注ぐ

植月弘子

鳩の巣

・岡

散る桜撮らむと軽く石段を駆け登る娘のうしろで萎  
「鳩の巣は駄目よ」と娘が竿に落すああ無情なりマンション住まひ  
事なべて娘に委ねるわれならば詮無し鳩の巣のなきベランダ  
うるはしき言葉と思ふ「水ぬるむ」如月冬の菜を洗ひつ  
耳遠き吾にも雨の音ひびき山川草木なべて潤ふ  
木枯しに採まる落葉の如くにて歩行の自信日日に喪ふ  
眼鏡して搜すに老いたりと涙ぐみつつひとりで笑ふ

潮田千代

本音の話

・地

片山幸子

水引草

・岡

コンチキシン山鉢巡行無い夏も玄関彩る桧扇の花

今日もまだ大張り切りの太陽に届けとばかり法師蟬鳴く

冬前にめだかの家の大掃除近畿地方に木枯し一号

負担比は夫一割妻九割数えきれない名も無き家事の

墓のこと免許返納などなどを帰省の子等と本音の話

石仏の当尾の里を巡る道初音聞こえてお喋りの止む

温水のシャワーを浴びて目を細め至福の表情象もするのだ

大島真清

黎明の音

・大

上林節江

光

・湾

病室の夜の窓ガラスは一面の鈍いろの海  
黎明の音

ふかぶかと聞にうかびてねむるとき海はたいらぐやさしく屈きて  
おぼつかなく歩める我に吹きよせる風よ草の香はらみて吹けよ  
終わりなき渴望のごとみちみちて青空はあり病みて仰げば  
よろこべと如何なる時にもよろこべと聖書哲学の深さを知りぬ  
ベッドにて髪洗いくれし看護師のプロの機敏さ快きかな  
キリストの一生思えばひとすじの影青あおとこころに迫る

奥まさみ

陽炎

・鳩

北山雪男

残日抄

・伊

貴人のなお立ちますかと振りかえるかけろうのたつ明日香野すきて  
独り居のひいなは今宵ふけるまでふたたびの春のおぼつかなさに

水脈さくる果てに死体のあらばあれ今日のいのちの今日の一りん  
再びのいのちあふれて吹雪くはな陽光のなかをひとしきり舞う  
訪ね来し野に六月の風は凧ぎわたしと薊を包みはじめめる  
枝垂れるをひねもすゆらすコテマリの毬のふくらみ昨日より今日

散りいそぐ桜もみじを水の面に浮かべて今日の流れゆるやか

見尽くしておらぬこの世の愛しさに光の樹林を行きつ戻りつ

ベンを持て短歌を詠めと凍しさは見えざる声にわれを揺さぶる  
天を衝くどんとの炎よ胸底に巣くう凍しさ焼いてくれぬか  
春来るを信じて待たんと立ち上がり粉雪の舞う徑に踏み出す  
盛り上がり空へ波打つ菜の花の暗ればれとして一万歩超す  
子に強いて残るマスクを持たせやりわれは幾度も洗いて使う  
コロナ禍に物流さえも閉ざされて支援とどかぬ娘おもう

月澄みて風の鎮まる九月九日長く短き妻を終へたり  
身に迫る死期悟りし淋しさを慰めも得ず悪妻に終ふ

友引を幸ひとして二日長くもの言はぬ夫に悔いと寄り添ふ  
いのち在りし日の如き顔に近づきて「寒くないの」と衿を直しぬ

覚めやすき体の慣れし午前四時今日ある礼の鉢ひとつ打つ  
捲らぬ身に計画の七割を成せば満点煙に汗拭く

水引草と教へくれたる父征きてビルマに散れり花今も咲く

## 小原香里

透きとおる

・昂

## 新明彰子

ゆっくりいこう

・葦

立つたままカップラーメンかきこめば螺旋に咲くしろいタムシバ  
観終ったあとの高揚胸に秘め劇場を出る 日はまだ高い  
水面を蹴りながら走る青鷺のとび立つまでの優雅な助走  
夕暮れのガラスのように透きとおる川面にうつる家家の灯  
朝日背に霧のむこうに立ち上る私の影 プロッケン現象  
セロファンをとけば弾けそうな濃い緑アジアンタムを食卓に置く  
硝子瓶に投げ入れられた紫陽花 切り花のその水揚げのはやさ

## 近内静子

一番星

・新

眉墨を濃いめにひいてマスクつけいざ出発とスーパーへ行く  
ブランコは赤いテープにくぐられて退屈そうに校庭みつむ  
オイオイと泣きたき己に大丈夫だいじょうぶだと言つてきかせる  
くみ置きのバケツに猫は舌のばし初夏の水のむメダカ横目に  
ゴミだしも豆腐ものせる両の手を元朝の陽に大きくなさす  
意を決し始めし終活すすまない。ゆっくりいこう済まなくともいい  
老眼のすすみし我と耳とおい夫と二人の弥次喜多道中

## 高橋啓子

みどり色

・昂

いくたびもわっと飛び立ちまた群れて水なき田んぼに雀は遊ぶ  
見渡せば山に囲まれ暮らしてゐる一番星は杉山の上  
杉山と雜木の山とがくつきりと黒と銀とに輝きており  
老いてなお健やかなれと祈りつつ歩く畦道いぬふぐり咲く  
ゆらゆらと草の穂いっぽん揺れている雀の一羽向きをかえたり  
野の道は青葉いっぱい匂い立つ父の命日六月七日  
ここに住みこの地で逝くか雜木山赤く萌えつはなやきている

## 島根美智子

たいらかな日々

・茨

## 富田鈴子

言葉

・大

坂の道のぼりきるまで俯いて自転車を押す男に「おはよう」  
もう二度と声を聞けない人の顔 最初で最後近くに見ている  
トランクの中のひとつぶのみどり色目を凝らせば小さな蛙  
動かない石の上の雨蛙 柄杓一杯の水をかける  
草刈り機操り前進ワイヤーに削られ飛び散る草が薫る  
崖崩れ防ぐ工事 急斜面はコンクリートに覆われてゆく  
入力そして消去をくりかえし完成させるメールの文章

怠慢が恵みとなりて芝なかに密に咲きおり庭石菖は  
たいらかな日々のあかしと蓄蓄水賞味期限の五年が過ぎぬ  
芋茎をたっぷり入れた巻纏汁の年越し蕎麦は夫の手作り  
巨大なる地下神殿のことく見ゆ採掘あとの大石の空間  
袋田の凍結の隙間より水があつまり硬き音する  
塘へと鳴き帰りゆくひもす鳥辺の立ち話決着つかず  
足の指グーチョキパーを繰り返し強張れるものゆっくり解す

畠草と誰が名付けしか細茎にはほっぽつ白く宙に浮く花  
待つことも待たることもなき日々の時計は五分進めたるまま  
急くことも訪いくる人もなき夕べ厨に牛蒡さりさりと削ぐ  
「生き夫が」などと詠む日が早もきてただひたすらに階段を拭く  
半分と言いつつ夫は夏みかんわが掌に載せき三分の二を  
あふれくる言葉の中よりさよならを伝えんとして黒き服着る  
ひとり身の自由羨しと人の言う言葉にならぬものを呑みこむ

長畑美津子 菜の花

・風

西堤啓子

現在地不明

・天

空白に何を記して埋るべきか迷いて幾日エンディングノート  
菜の花の和え物一品添えてみるはるかとなりし故里の味  
はらからの中で年長となりしわれ残る生きの日如何に過ごさん  
進みゆく少子化核に災害と絶滅危惧種になるや人類  
失いしひと両の手に余りありわれ永らえてひとりのさくら  
夕闇へ沈むパンジー黄色のみひとたまりに明るしベランダ  
春雷のおちこち響く真夜を覚め己が余生を計りてたり

仲西正子 六月の雨

・沖

戦死者の魂を浮遊させますな降り降る降れよ六月の雨  
コロナ禍に慰靈祭は係のみ公民館より放送流る  
祈る手はやがて塔の形なす慰靈の塔は累累として  
発芽せしホウライカガミは道しるべオゴマタラは庭に降り来る  
最先にオオゴマタラを止まらせ幼はびたり身じろぎもせず  
それは昔つかまえたのでと三歳児モンシロチヨウには一瞥をする  
幼らは籠に収めるまでが悦バッタも蝶もすぐ放ちやる

中村はるみ

まどう

・昂

福光敬子

みち

・伴

雨降れば貝になる人それはそれ『魔の山』読めばアルプスの風  
炎熱を歩みし指をなぐさめてひらりひらりとペティキニアを塗る  
姫の住む異國の町を地図に追う見知らぬスペル鋼のごとく  
火山島の海に住むとうタイマイの泳ぐ速度で息を吐きたす  
空を切りカモの編隊着水す椅子取りゲームの哀しき朝  
春の日にあふれ暴れし黒髪の手によみがえる現在地不明  
ドアを閉め肩の力を抜いてからサンドバッグは眠りに落ちる

白子友侑子 支えられ

・洛

満月とランプの明かりの夕食会家族友人と四方山ばなし  
旅行中水やりくれいし友ありて庭の草花のびのび育つ  
蔓伸ばしあい色朝顔テーブルにガラスの花器は夫の気遣い  
クリスマスカードを母の傍らへ心やさしき友は今年も  
枕経一途に唱えくるる友ははよ迷わぬ旅立ちであれ  
何気ない会話にハラリと涙落つこの人もまた母を知る人  
規制下のアメリカ速し礼状はふた月近くかかり届くと

すぶぬれの森なお暗く昏れてゆき鳥の鳴ぐ声四日聞かざり  
栗の穂みどりの光ひろうようつまめば拒絶の痛みはやもつ  
迷い子となりしこころに一本の野あざみ吹かる五月の野を行く  
きのうにあらがいくてひとつ先のバス停に降りるきょうの意志  
冷蔵庫に忘れられしこの夏の飲みかけのサイダー 白き沈黙  
梅雨明けの小庭わらべの宝箱蝉や蜥蜴わらわら出で来  
土踏まずのしろい聖域蟻を踏み石榴の花ふみわが影を踏む

## 藤井満江

夏

・昂

## 本多キミ子

一日

・沖

娘ら見送り今更ながら一人なり仰けば一つ名を知らぬ星  
角曲がり消えてしまえり娘らの夏われの夏の終りなるかな

親子三人三年ぶりの散歩道左に玉川水音聞こゆ  
カーテンを開ければ外は細き雨傘持たぬ子ら驱けてゆきたり  
差し出す手にうすもも色の桜花触れておちゆく花の清冷  
今朝の小鳥一度も鳴かず快晴の空を低く飛びて消えたり  
水色のタオルが竿にゆれており 一人暮しの初夏の風

## 藤澤元子

ひととせ

・鳩

秋の夜半ゆで栗食めば細文の栗林わたる風の音する  
白杖の公孫樹の落ち葉をたく音も聞こえて亡き師を偲ぶ  
まりちゃんは「世界ネコ歩き」正座して徹夜で見てるまりちゃんは猫  
白木蓮夕日をあびて朱に染まる神の恩寵のごときひととき  
閉ざされしシャッターの奥闇深し失職もあり倒産もあり  
午前二時ぐらり世界の傾けり半身麻痺を覚えず体験  
サイパンより三歳のわれにしたためし父の最後の端整な文字

## 藤野喜美子

たそがれ

・鷗

## 箕浦勤

晴れ着

・葵

水の辺に香きむかしを灯すこと青む柳のひらく追憶  
池の面にさやぐ緑の映る午後遡きたる友の水絵を思つ  
池の面にあふるる空がありながら裡にうごかぬ森影を見る  
恋に似て詠み難ければ別れをと思うこころに添いくる短歌  
この道は大と来たりし里山に憶うむらさき野すみれの路  
たそがれの庭に向かいて「福は内、鬼も内」とて独り豆撒く  
コロナ禍に重なる豪雨の災害に人々の声す生きねばならぬと

## 松本多摩子

白黒写真

・桜

若き日の君のアルバムめくる夕白黒写真欲しがる孫と  
数々の歌に残せる看取りの日あの日あの時鮮やかなりし  
散歩するスピード互いに差ができる二十年続く友との別れ  
一人居にメダカの五匹加わりて動くものいる吾より他に  
そろそろに来てはどうかと娘の誘い長き自粛に一步が出ない  
いつのまにか大人になっていく孫のまぶしくありぬ化粧するとき  
生前の母の口癖夫なくも良き子や孫に恵まれしとぞ

神主の御祓ひ済めば晴れ着の子ママのスマホに変顔向ける  
手を広げ突進してくる三歳のマシュマロ爆弾この胸に受く  
十日振りに顔見る二歳は走り寄り円き笑顔で脛に抱きつく  
応へなき師を見舞ひての帰り路は茫々として酒匂川越ゆ  
大原の道の辺に見し踊り子草茎を取り巻く花白かりき  
嵐來て桃のひとひらひつたりと恋に貼りつき吾と目の合ふ  
晴れわたる四月の午後は菜の花のつづく堤を自転車でゆく

# 冬のアンソロジー 〈生きる〉 養学登志子

この世にし楽しくあらば来む世には虫に鳥にも吾はなりなむ

ゴキブリが空被ふほど飛ぶ夢の正夢なるや次の世紀は

大伴 旅人

田土 成彦

アンドウトロワ

アンドウトロワ

三浦 好博

雪あらぬ富士の全面に駒はなし粗放麿大にして立ちはだかれり

仔羊の鼻すえは醉っぱしろがねの大麦の穂もまたうすらにすゆし

前田 夕暮

香川 進

年末の銀座を行けばもとはみな赤ちゃんだった人達の群

儀 万智

あけて待つ子の口のなかやわらかく粥運ぶわが匙に触れつつ

五島美代子

ごろすけほう心ほうけてごろすけほうしんじついといごろすけほう

岡野 弘彦

外の空気はこんなにおいしいものなか真冬日の太陽の下に我生還す

鶴見 和子

やわらかき冬の光が身にしみて生きよ生きよとわれを温む

柳澤 桂子

・この世にし楽しくあらば来む世には虫に鳥にも吾はなりなむ  
鳥にも吾はなりなむ

『万葉集』 大伴 旅人

「こんなに楽しく酒を飲んで暮していた  
らそれでもう十分だ。来世では虫にだって  
鳥にだってなってもかまわない」奔放なま  
での明るさというのも万葉人の一つのあり  
方、いかにも新しい貴族文化らしい感じ  
がする。お酒が好きで好きでこうして晩秋  
の夜も初冬を迎える夜も楽しんだのだろう。  
・ゴキブリが空被ふほど飛ぶ夢の正夢なる  
や次の世紀は

『空中回廊』 田土 成彦

非常によく出交す昆虫であったが近頃は  
あまり見なくなつた。又いつか復活するこ  
とがあるのかもしれない。かつて西丸震哉  
氏がそのうちゴキブリは人間の大切な蚕白  
源になるだろうと言い、空揚げにすると腹  
のジャバラが紅白に揚がりめでたく正月の  
馳走となるとか読んだことがある。空被う  
ほどの奴らの空揚げ。一皿「ハイ百円」  
なんて。

・大根は西日に白し踊り子のアンドウトロ  
ワ アンドウトロワ

『ときの麗』 三浦 好博

白い大根は掛けられたばかり。初冬の西日に元気な美脚が揃いアンドウトロワ。やがて十日もたてばしなしなと柔くなる。旨い沢庵漬となる為に、アンドウトロワ。  
・雪あらぬ富士の全面に翳はなし粗放麿大にして立ちはだかれり

『富士を歌ふ』 前田 夕暮

誰もがイメージするたおやかな美しい富士ではない。猛々しさのみを眼前に押出しした富士。片岡球子の描くさまざまな富士が想い浮かぶ。夕暮にとって富士は生涯心の支えであったのだろう。他に多くの画家達の影響を受けていることもとても興味深い。  
・仔羊の鼻すえは酔つぱしるがねの大麦の穂もまたうすらにすゆし

『甲虫村落』 香川 進

思わず驚きの声をあげそうな一場面。仔羊もさぞ驚いたことだろう。それにそれが酸っぱい。そして大麦の穂はすゆし。二つの酸味の表現の違いがおもしろい。突飛などでも茶目気のあるお人柄ではある。オーストラリアに広がる農場でのことらしい。  
・年末の銀座を行けばもとはみな赤ちゃんだった人達の群

『生まれてパンザイ』 俵 万智

・外の空気はこんなにおいしいものなのか

年末の銀座、行き交う人達の中で思いつく、誰も等しく赤ちゃんの時代があつたのだ。節くれだった大きな手もかつては柔らかな小さなおててだった。「もとはみな赤坊」作者の妙にさめた眼差が愉快に納得させる。

・あけて待つ子の口のなかやわらかく粥運ふわが匙に触れつつ

『そらなり』 五島美代子  
おだやかな母子の景。母親の至福の姿が想われる。あたたかくやわらかそうな白い粥。口をあけて待つ子の様が何ともいとい。静かな小春日の中ではなかろうか。  
・ころすけぼう心ぼうけてころすけぼうしんじついといころすけぼう

『冬の家族』 岡野 弘彦

ころすけぼうは梟の鳴き声。細い三日月の夜などに聞くと心の底にひびく。鳴き声の繰返しの間に入る言葉が心を摑む。繰返し唱えてみる。すると作者の心の内なるもの繰返しの間に入る言葉が心を摑む。繰返し唱えてみる。すると作者の心の内なるものではなく、(DNA)科学が進歩する程神は頭の中に組み込まれていて外にあるものではない。科学が進歩する程その限界を感じる。宇宙の真理のほんの僅かなものの、宇宙の中とどれ程のものか。今まで地球を破壊してきて何を得たか。小さな事でもよい、この地球を守り始めなければ永い永い難病から逃れた人の歌と言葉であ

真冬日の太陽の下に我生還す

『回生』 鶴見 和子

脳出血で斃れた夜、歌が迸り出たのだから小さなおててだった。「もとはみな赤坊」作者の妙にさめた眼差が愉快に納得させる。

・やわらかき冬の光が身にしみて生きよ生きよとわれを温む

『柳澤桂子歌集』 柳澤 桂子

「死は皆のもの」「化学から医学から見はなされた時、何に頼ればよいのか」そんな言葉で始まった氏自身によるTV放送を急ぎ書き留めたものが深く心に残っている。

「どんな人間にでも頭の中に宗教がある、神は頭の中に組み込まれていて外にあるものではない(DNA)科学が進歩する程その限界を感じる。宇宙の真理のほんの僅かなものの、宇宙の中とどれ程のものか。今まで地球を破壊してきて何を得たか。小さな事でもよい、この地球を守り始めなければ永い永い難病から逃れた人の歌と言葉であ



24

## 同じ「うた」でも

宍戸千佳子

新型コロナウイルスの感染拡大によって、五十年以上続けてきた趣味の合唱練習ができなくなった。これはつらい。合唱は単なる楽しみではなく、音楽芸術への入り口であり、自分なりの感動の表現手段であり、心の支えだった。若い時は子連れで合唱団に通いをしていたし、働き盛りを過ぎてからは四つの合唱団をかけ持ちして、活動のない週末はなかった。クラシックからポップまで曲は多岐に渡り、指揮者の個性も豊か、仲間も多士済々。コンクールあり、大小の演奏会あり、老人施設の訪問もある。どれもがおもしろく、やりがいがある。それがぱっかり暇になつて、大げさでなく毎日がモノクロになってしまった。

ハの「マタイ受難曲」を歌つたことである。キリストの受難を題材にした、三十九の合唱曲と多彩な独唱からなる作品で、宗教音楽の最高峰とされる。音楽雑誌のアンケートで「無人島で暮らすのに一曲だけ持つていくなら?」の質問に、「マタイ」という回答が多かったことでも有名だ。この曲に半年間どっぷりと浸かり、大学には勉強そっちのけで歌いに通っていた。

三時間を超える大曲を、立ちっぱなしで歌つたのも(今なら絶対に無理)思い出に残るが、忘れられないのは、本番中に歌いながら泣いたのはこの時だけだった、ということだ。

曲の終わり近く、イエスが十字架に架けられて息絶えた直後、天変地異が起こり、死者達がよみがえる。恐れおののいた民衆は「まことに彼は神の子だった」と叫ぶ。この短いフレーズを歌つた後、バスのアリ

アを聴いているうちに、涙が止まなくなつた。自分たちの恩かさのせいでイエスを死なせた、取り返しのつかないことをしてしまった、と後悔に苛まれるユダヤの民になりきつてしまつたのだ。あと三曲歌わなくてはならなかつたのだが、もう声もろくに出なかつた。終わつてみると、ステージ衣装の胸と前の床にかなり大きな涙のしみができる、ながら驚いた。

実はこの「マタイ受難曲」の人生二度目の演奏会に、今年五月仙台で参加するはずだった。しかし、コロナ禍により直前中止となつてしまつた。今は来年五月の開催をめざして練習を再開している。今度は泣かずに、最後までしっかりと歌い切りたいと思う。

それにしても、これほど私の中で大きな位置を占めている合唱の感動を、短歌に表現することが、本当に難しい。合唱を題材にした短歌で満足のいくものは、未だにできない。「言葉」を媒体とする点では同じなのに、西洋音楽の「メロディー」で育ってきた私は、短歌の「調べ」というものが、まだよくわからないのかもしれない。いつの日か、その二つが溶け合う境地にたどりつけたら、と夢見ている。

「介護の歌」生きるとは、人間とは、

檜垣美保子

族論である」を指摘し、「家族愛はそれはそれでいいんですけど、そこに留まつてほしくないと思うんです」「どうしても社会全体が弱者を支えていくんだという……」「やっぱり家族愛というような風潮 자체を一掃することが必要じゃないかと思うんです」

と社会的な視点が冷静に語られていました。三度目は、二〇〇八年七月号に、「特集」「介護のうたⅢ」。十八篇の十首詠とエッセイ。

そして、四度目の特集である。三人の方の文章がある。藤島秀憲「家族の歌としての介護のうた」高山邦男「わたしの介護の物語」安森淑子「介護のうたの現在」。そして、十三篇の八首詠とエッセイ。

藤島氏は冒頭に「短歌往来」が「介護のうた」を最初に特集したのは、二〇〇二年とふりかえり「介護保険法が施行されて二年が経過しようとしていた。介護を受ける人が急速に増えたのに対し、受け入れ側の人材は不足しているなど、介護保険法の不備が明らかとなってきた時期であり、介護という言葉が一般に浸透してきたときだつた」と時代をとらえている。「介護のうた」は誰を介護するかによって三つにわかれる。1利用者を介護する2家族を介護する3自分が介護を受けている」と整理し「介護のうたは家族の歌なのだという思いが強い。

長い長い家族の歴史の中の一時期に、介護妻のインタビュー記事の見出し「介護は家

藤島氏は冒頭に「短歌往来」が「介護のうた」を最初に特集したのは、二〇〇二年とふりかえり「介護保険法が施行されて二年が経過しようとしていた。介護を受ける人が急速に増えたのに対し、受け入れ側の人材は不足しているなど、介護保険法の不備が明らかとなってきた時期であり、介護という言葉が一般に浸透してきたときだつた」と時代をとらえている。「介護のうた」は誰を介護するかによって三つにわかれる。1利用者を介護する2家族を介護する3自分が介護を受けている」と整理し「介護のうたは家族の歌なのだという思いが強い。

長い長い家族の歴史の中の一時期に、介護妻のインタビュー記事の見出し「介護は家

が必要となつた人がいる。だから家族を歌おうとするとき介護の場面を歌うようになる、そういうことなのだと思います」と。

1の利用者を介護するという立場の伊勢勇氏の視点と家族の中に起る当事者としての視点があれば、当然、異なる内容を語ることになると思われる」といつても、短歌の場合は、人間が人間に相対するといふ「介護」であれば、それは、結局にんげんをうたう歌なのだとおもう。うたい続ける人々の歌。四回の特集の歌の中から――

・お前さんはねむたい赤ん坊そうなんだほのぼのと俺の手許に  
・「穫れたての秋をお持ちしましたよ」ベッドに降らす紅葉錦を　伊勢勇

・本当は母を背負はぬ啄木よ三歩以上あゆむぞ俺は　山下雅人

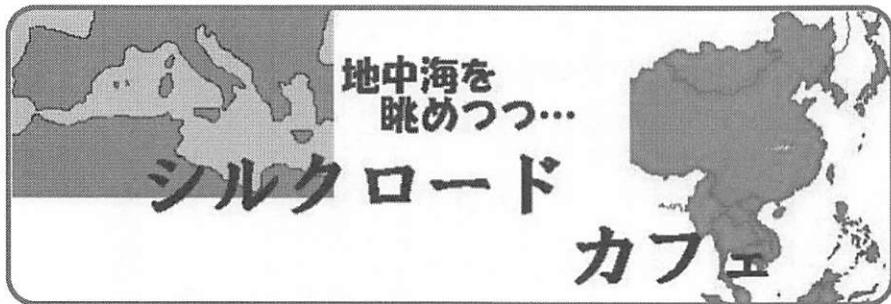
・雨は雨に濡れないうちに地に落ちて父の下着が足りなくなりぬ　藤島秀憲

・たたまれて静かになつた車椅子　半身痺の母がいた家　今井恵子

・頬拭けど見えぬうしろの寝ぐせ髪撫り戻すよに手櫛してやる　吉永惟昭

・返事するそれだけで良い妻が居る部屋暖かし時々のぞく　餅井辰視

なぜか男性の歌を多く探ることに。



メールの投稿で作っていくページです。このQRコード（四角いバーコード）を携帯電話のカメラで読み取ると、携帯電話から投稿できます。専用メールアドレスは、silkcafe715@yahoo.co.jp です。お葉書でのご参加も大歓迎です。木村自宅へお送り下さいませ。



## 月の沙漠の銀のくら



地中海九月号から、日常のお歌を。

C 欄 ～揺れる日常～

定義山の御祈祷終えて待ち合わせ人ごみの中にあるあなたを探す

浅沼 良子

コロナなど暫し忘れて立ち止まるこの新縁と空の青さよ

池上 久子

新型のコロナウイルス拡がりて自律神経失調となる

小川 良子

野良猫が家の前にてシャカシャカと後ろ足もて砂を蹴りゆく

神田 道子

柞の森眼下に遠く見えて来て桜並木には緑の風が

佐藤 愛子

いつもより甘くて大きな萩のもち今日は十五年金が入る

関根 正明

散歩道電車の行き来を見入る孫の瞳

高澤 匠子

卓上に薔薇をかざれば帰宅してまず薔薇の香にむかえいれらる  
藤岡みゆき

衣替え終活を兼ね仕分けする残す物にはアイロン当つる  
森本ちずる

道急ぐ車内アラーム鳴り響きママ呼ぶ子らを空耳に聞く  
山野はるか

B 欄 ～静かに詠う～

何を為すなき老ふたり朝あさをごはん・味噌汁しつかり食みぬ  
伊東美智子

未だしも仕事復帰は未定なり蚤探して宵の道ゆく

石田 明彦

露を受けあじさいの花いきいきと花束のように土手を飾りぬ  
おおたみどり

玄関の鍵を掛けつつふと気付く今日は新聞とりに出たのみ

大槻 泰子

とき来れば小さき部屋も夏景色コロナウィルスで訪う人なけれど

岡野 恵俊

購いし時は差も無き茄子の苗枯れた一本の故を思えり

岡本三枝子

ミモザの花求め來し子がわが夫の写真の前に活けてくれたり 小川美智子

養子先も知らず吾が猫は日ざしを浴びて手足をなめる かはさきじゅん

別所線に車輪の響きよみがえり以前と同じリズムを刻む 神戸 良三

ようやくに児らの登下校にほっとする規制の解けぬ危うさなれど 木村 静子

おとなりでカンカンカンと杭を打つ音ひびきくる久しぶりなり 小塚 幸子

まんまるにあじさいの花咲きほこり初夏の香りがみちみちてくる 武田 幸子

コロナ禍を報じる紙面つきつきとカタカナ文字を増殖させる 西川 正子

休憩に屋上へゆき街ながむ東京タワー淋しげに見ゆ 丹羽 哲也

アオダモの枝より落ちる雨粒が風に吹かれて石だたみ叩く 伏見畠美恵

大き縁外されしこと母逝けり村一番の長命なるも 松谷 公江

小川 一美

怠らず手入れ重ねし山靴に足を委ねて岩棲をくだる 森田 孝子

緑風の吹きくる朝の庭に座し妻と味はふ野外コーヒー 諸留 能興

見え隠れ陳列棚の向こうから伺う息子目笑いおり 山野ひかり

雨の音ポトポトポトと屋根を打ち春をしずかに初夏へ引き継ぐ やまもとしづ

毎朝のホームの体操グーチョキパー療法士の声に合せて動く 安田 明子

買物のレジを仕切るビニールカーテン違和感に慣れ定位置に並ぶ 吉池ケサヨ

珊瑚マスターの包み焼き



◇灯明の炎ちひさく高野山奥の院にて修行する僧 諸留 能興

◇薪をくべ五右衛門ぶろの湯を沸かす火箸を使う我は幼し 風早 公恵

◇鉛虫の脹やかな宵名月は昇り遠くに野焼きの炎

◇朝餉まえ蚊取に火を点け草むしり昨日の続きの仕上げを始む 柴田 純子

雪のうえほのお短く薫燃えてめぐる素足にもたちそむる匂い 香川 進 「木曽川」

採祭りを詠んだ歌である。「ほのお短く」「めぐる素足」の表現が的確。想像を広げる余地のある歌である。(A)

次回は、柴田紀子さんのお歌から戴いて「食べる」又は「食べ物」を説うと致します。どうぞお気楽にお寄せ下さいませ。皆様、お元気で新しい年をお迎え下さいませ。

たくさんのご投稿、ありがとうございました。お題は「火・炎」でした。

【店長木村 文子】

# 作品 B (ヤ行)

阿 藤 た つ る

ホネ貝

・伊

硝子一枚隔てて外を見やりいる鳥毛立女の眼差しの光  
泣き虫も怒りん坊も弱虫も子どもは鬼を追って飽きない

ホネ貝の形に似たる宇宙艇<sup>ヒコエス</sup>・首都の上<sup>エヌ</sup>悠々と行く  
ブーフー<sup>ウ</sup>ー三者三様の生き方をリスク・マネジメントと呼びたくはなし

この国のブルーライトは照らさないビルの谷間にうつ伏す人を

藤 田 し ん 子

土の香

・大

南より風は吹くらしみやしろのとんどの煙にタオルが匂う  
病むわれの壞れやすきに近寄りて先なる底いへ誘う占い師

しなが鳥猪名の川原すすき野に父母を恋う鬼婆の声  
青葉木菟ホッホウ、ホッホウと鳴くという優しき声に触れたいまは

春の日の光の中を帰りきて土の香のする新じゃがを蒸す

松 本 久 子

自選歌

・大

藍染の野良着の継ぎも丁寧に物語ある古布の市かな  
まどろみの夢はうつか幻か闇夜に虹は妖し儂し

海峡を越えて高速ひた走る禍事からの逃避にも似て  
療養の身には毒のスイートを何より喜ぶ笑顔が哀し

暗闇に動けば止まる集く音秋を知らせる虫の名知らず

岩 月 宏 彦

タクト

・宙

風が土竜舟<sup>スカウト</sup>を回しおり忘れ去られた山の烟で  
古里の社に人は誰もいずお祓いするのは散りゆく桜

虫の音も傾聴すればカラヤンのタクトに見ゆる細き三日月  
カタコトと線路打つ音リズミカル陽のさす席でうとうとうと

小学生の夢を描いた絵画展この世の未来が楽しくなりぬ

大 寺 智 子

無花果

・新

無花果のへた切りながら並べゆく今年も秋を大鍋で煮る  
誕生日にイチゴタルトを届けたり自分のためには買わざる母に  
「みんな逝つちまた」と母はつぶやきぬ黒き羽織に袖通しつつ  
五十年経ちて繕う縫入れ(ばんこ)腰曲がりたる祖母の手縫いの  
西空の白き吾妻領めざし行く白鳥の群れ一の字になる

平 尾 は る み

首飾り

・春

トレモロで流れる川の石光り龟は花ひら背に飾りゆく  
「ネックレス」よりかわゆき言葉「首飾り」珊瑚に真珠をしてクローバー  
不思議なり歌を歌へば人恋し人を恋ふれば歌の出でくる  
虫噛ひの穴見つかりて繕ひぬ還らぬ人の青きセーター  
遠きよりささやきくるる気配して「元氣でいるか、歌はできたか」

安田明子

客人

・大

山田英子

めぐる風

・洛

花見えず籠りて居ればむさくるしよもやの客人コロナ居座る  
聞きなれぬ刃のごときウイルス菌いつの日よりか此の星にすむ  
通勤のつり革ゆれてゆらゆらとコロナウイルス陣取りて居る  
耳もとに幽かにひびく電子音子の帰國聞く夜は明けゆく  
夕暮れのメナムの入江見し息子ほほゑみの国に今や別れる

山口真樹子

春服

・宙

雪は私の手にのってすぐ消えた今年の雪はそれしか知らぬ  
わがもし虫なら起る花ならば咲くほどに思う今年の冬は  
写真でも絵でも美しさはあれど花瓶の一枚このカッコ良さ  
春らしきこと少なめに春がゆく流れたあとだけ感じてしまう  
そういえば今年は春服着なかつたと過ぎた卯月

山口桃子

ハワイ島

・宙

空港にコロナ騒ぎのただなかを集合すればチエック厳しき  
空港で中国人と言うだけで友のチェックの仲々終らず

ハワイ島溶岩通り北へ行く未知への遭遇期待が広がる  
溶岩で植物も疎むこの大地おいしい珈琲とナツツが被れる  
開発はリゾートマンション続々と溶岩けずり新しき街

山田珠美

男孫

・春

男孫息引き取りぬ朝早く孫の一生二十三年なり

夢の中亡き男孫九州のバスの華咲くハウステンボスに  
お水取り毎日あがるお松明背負いて登る石段の上

見えぬ敵一日一日と迫り来るピリピリして神経だけが  
久しぶり娘と連れ立ちて京の町春のさかりを楽しく歩く

しみじみと別れの言葉告ぐるよに枯葉ひとひら舞いおちてくる  
春の雨水面しづかに輪をかけて散りくる花をそっと浮かしぬ  
めぐる風めぐる想いをのせて吹けあした咲く花吾が胸にさけ  
吾が思い清かならん今日の日を美しきものうつくしとみて  
ひとり居の吾にそい咲く野の花よわれもほしかりその優しさを

山野ひかり

子

・沖

足を上げソファーゴロン手にスマホ父が帰るや長女はね起く  
じゃれ合いの子どもら集う節分会鬼が現れホールに散れり  
シャカシャカと小さな車輪高速に皆を振り切る零三歳  
夏終わりやっと家族の夏休み浮輪片手に砂浜を踏む  
三人と通いし園と別れの日アルバムを手に派拭えず

山之内香代美

長月

・羊

迎え火の裡に灯せばさやかなり塩からとんぼ翅やすめる  
夕暮に浮かぶ夕顔処暑の日にいちだん慚楚と涼を運びて  
小一が吾の素振りに気をもんで「今日はどうな」氣遣う孫は  
夕顔のうす墨いろに浮かぶ宵こちよき風長月を愛す  
長月の爽やかな風にしみじみと集う膳にもしのばれにけり

やまもとしづ

やわらかな風

・鹿

たそがれてうす紅いろに染む夏の雲秋告げるようなやわらかな風  
くだり坂自転車とばし走り抜く少女の背なし青春の風  
少しづつ痛み増す足不具合も生きた歴史と納得をする  
静けさのただ静けさの中に居るテレビを止めればすずしかりけり  
落ちてきた一滴の雨屋根を打つ合図のように驟雨となりぬ

吉 池 ケ サ ヨ 段 ボール

・信

コロナ禍の盆に帰れぬ娘に送る夏野菜を段ボールにぎっしりと  
コロナ禍に身罷りし義兄お傍にてお見送り出来ず西空見上ぐ  
処暑の夕べ風に膨らむ草木ありエネルギー蓄え明日へ繋ぐ  
日焼けする土にしとしと一雨に日向臭さが厨に流るる  
夏と秋の行き交う九月空の海そろそろと寄せる歸雲かな

よしとみゆうこ

公園の銀杏

・そ

公園の銀杏はぐんと伸びたりタイフーンにも大きく揺れり  
長月も終りと言うに蟬は鳴き銀杏は実をたわわに付けぬ  
公園を眺め四十年銀杏も櫻も我と年を重ねたり  
七十路も半ば過ぎたる秋の晴れ幸せの浦く今日の空よ  
桜島橋でつながる垂水市煙り吐く下穂やかにあり

脇 田 智 子

快気の品

・鳩

夜の明けの雷に目覚めて思い出す氣丈な母の怯えし顔を  
デパートで快気の品を買い求め杖持たぬ夫の足もと見つむ  
傷愈えた夫と大根の種を蒔く快復したねアキアカネ飛ぶ  
マスク着け久方ぶりのランチへと友と競いて会話あふる  
電話あり「炊き込みご飯最高」とテレワークの姪レシピ聞きおり

渡 辺 英 子

老の夕餉

・羊

昨秋に転べる折の傷愈えて夫の面差し穩やかとなる  
十月余り酒を断ちたる夫なれば今宵の酒は格別ならむ  
父の日に子より届ける加賀蒸餅にそそぎて軽くのみほす  
艶のよき新篠のさしみ求めきて青磁の皿にたっぷりと盛る  
娘より届ける餃は駿府産老の二人の夕餉となりぬ

渡 辺 真 吾 嵩こもり需要

・銚

猛暑日にビルの谷間の草むしり人の流れに背を向け汗を  
三密で縁日祭礼吹きとんで巣ごもり需要と金魚を買いに  
彼岸入り残暑のなかの法要日マスク姿の行列続く

断捨離で傷つきソファー処分する捨て場に向かうはやはり我なり  
今年また去年の傷を引きずりし風の前を屋根へと登る

浅 川 広 子

カサブランカ

・凌

カサブランカの三花開きて囁せる香の風に預けてやはらき届く  
病愈えしも元の体にならぬ身を嘆かぬことと己に聞かす  
人生は束の間なるを心して今を大事に縁を豊かに  
フォーティーウインクスと云はれたた寝のこちよく眺みかけの本気づけば床に  
ご機嫌ようは私の中で死語となる夢多きあの丘の学舎

浅 霧 美 佐 子

カサブランカ

・風

あちこちのローカル線が崖線に毛細血管消える気がする  
数々の山坂こえて八十路前夫は戦友やさしくしよう  
裏庭にすいせんの花咲きみだれしづかな真昼何もいらない  
アフガンでテロに命を奪われし中村医師は日本の尊れ  
田沢湖は流れる雲をそのままに映してあおき水鏡かな

芦 田 房 子

マスク

・岡

半年を動かさぎりしミシンなり試運転に縫うマスクを二枚  
三人の孫よりの電話今日は来てマスク三枚縫いでいるなり  
二メートルの距離あけてレジに並び立つマスクマスクの名無しの権兵衛  
今日もまた洗いしまスクを「コロナ奴」とバンバン叩きて調えて干す  
催事みな中止となりて再映のテレビにも飽き午後の陽暑し

芦田美代子

エンジン

・風

夕やけのなごりひるがる雲のうえ赤みを帯びて三日月のあり  
また今日も虐待されし子のニュース泣き声聞けば心がさわぐ  
太ミニズが釣り餌に良いとう亡き父の釣り好き思う 餌でありしか  
広戸風で物置の屋根吹きとびて骨組だけが整然とあり  
草刈機油を満たしひも引けど力不足かエンジン掛からず

綾 央子 指輪

・夢

稻家和子

「歌碑」

・岡

亡き母の形見の指輪だして見てはじめて母の細さを知りぬ  
遍路道大窓寺へと行く人の同行二人の杖の短き  
気安めに旅に出たいと思いしが薄氷踏まぬかそれが問題  
手縫いして作りしまスク針あと不繕いのさま愛嬌のあり  
ボキボキと強く磨くと音のする歯ブラシ使い軽くかるくと

石井徳子 五目飯

・渚

伊波千賀子 部屋

・沖

雷と同時に大雨降り出して洗濯物はびしょぬれとなる  
早ばやと妹より届く新米を五目飯炊き仏壇に供う  
コロナ禍にめげず棚田の稻刈りに家族挙りて汗を流しぬ  
夕暮れにウォーキングする娘の道白き帽子にかぶと虫とまる  
新首相菅氏となりて新たなる政治の手腕期待しております

伊東美智子

桐の花

・春

今井マチ子 爪

・習

七草のもえいする力いただきてあしたを祈り吾を養う  
立金花福寿草の黄の花は心やすらぎ庭も華やぐ  
青風にあいしか路辺の桐の花散りしだかれて下草に映ゆ  
声なくも番の蝶かもつれつとどまりもせず花移りゆく  
真夏日を凌霄花は心浮き門扉をこえて咲き盛りおり

柏汁に生姜たっぷりすりこめば明日は風邪もにげ出しゆくや  
空にまだ夕べの月が残りおりさびしきわれと歩いてくれる  
夕焼けのあざやかなり色をみて誘われるごと散歩に出かける  
大勢でいても心はひとりなり苺にミルクかけて食みたり  
月あかりの川面に浮かぶ桜花春の名残りを胸にしまわん

糸島美津子 桜花

・桜

・風

あやまちて信楽の花器落とし割り接ぎ接ぎて見る無念の日向  
花冷えの朝の土を掘りたれば蛙が出でて足を震わす  
孫三人朝餉の卓に春の風リボンの制服詰襟三つ編み  
百足の後土で畠みて蓄える蟻の習性に見入りて暮れぬ

伊藤千賀子

・渚

伊波千賀子 部屋

・沖

ブッソウゲ赤ちやけた葉が青くなり花揺れ合える葉月となれり  
桜の木花も葉もなく根元にはエノコロ草が揺れ動きおり  
天候の悪さのために休むかと自問自答し身仕たくをする

ラジオよりあの道の歌流れくる幼き時には歌い遊べり

午後となり日射しの延びる部屋の戸を引かんとすれば小鳥囁る

手や足の爪の伸びさえ愛おしく元気な証といったわりて切る  
聞こえくるつくづく法師にふる里の柿もそろそろ色づく頃か  
名刺には社名と氏名のみ記すこれぞシンブルわれを虜に  
かの君の居る由もなく我に返るつり革握る手ふと緩みぬ  
冬枯れの庭に緑の雑草のほつぼつ芽吹き春を連れ来ぬ

上原ケイ子 こちょうらん

・霧

大熊一恵

コロナ禍の夏

・岡

窓越しの日差しを浴びるひと夏のコルセットの身の自由をみがく  
窓下の赤白黄の車より降りる者の歩みのいろ

大会新喜ぶ孫に背に押されコルセットの身の紐締め直す

紫のこちょうらん手に訪れし朝の会話のさやかな香り

ていねいに植えても根付かぬ花の中今年もさわやか百日草の紅

榎田佳子

彼岸花

・霧

おおたみどり

満たされる日

・そ

庭の辺に真つ赤に咲ける彼岸花おのが命を燃えつくすこと  
蝉時雨夏の終はりを告ぐること樹下に行む我に降りくる

今日もまた夫と二人の朝の卓トマトの赤を色どりに添へ  
だんだんとしをれゆきたる水色の朝顔愛し初秋の朝

夫と居て朝昼晩と顔あはす話の種もつき果てんとす

遠藤義子

草

・信

大槻泰子

春夏コロナ

・洛

雨やみて植木剪定チヨキチヨキとシルバーさんは笑顔で張り切る  
におい検葉の生垣ジャージャー仕上げてくプロの腕前手を止め見いる  
切りし枝を一輪車にて運ぶ時いやいや寄せ横を向くなり  
遠目にも伸びし草には穂が見える草だけ元気仕事はふえる  
山畑のビーバーの音羨まし汗を拭きつつ鎌で草刈る

大久保麗子

白雲深く

・森

岡野恵俊

送り火

・洛

六階の窓より見ゆる赤城山白雲深くてつべん隠す  
胸の奥底紅あさがほの花開き胆肝癌を悲しまず見よ  
癒ゆる日に定植なすと黒土なか指こすり蒔く玉葱のつぶ  
七十八年生きて来しかばわが額の増す老人斑をなぞりうれひぬ  
病みるに痛い処の身になきをスタッフ歩む喜びながら

送り火の五点に燃える大文字暗き橋から父母偲ぶ  
大切な師の一周年忌取り止めたコロナウイルスは山の寺まで  
夕方の庭の水遣り一時間逃げゆく蛙に声かけながら  
施設出て帰宅されたる師の便り訪うて会うのは遠慮すべきか  
羽化の場を探してゐるのか殼の蟬そと樹の根に移してやりぬ

三歳の孫が盆会に訪れず短き舌に「サンミツダカラ」  
「おはやう」と登校の児らに掛けてやる声は届かずマスクが奪ふ  
コロナ禍に登園の日数へる幼はいつしか暦を覚る  
雑草は自肅せずとは友が言ひ互みにコロナ託ちて籠もる  
「れいわ」とふ縁しきひびき詠みし去年誰が想ひしそコロナの夏を

水面に浮かぶ睡蓮空と雲カメラに収めて満たされる日  
涼し気にゆらりゆらりと蓮の花天に向いてふっくら蕾む  
山あいを走る車の窓からは青き水田キラキラ光る  
ドンと鳴る音に気づいて戸を開くサプライズ花火に癒される  
湖に一羽の白鳥スイスイと人を恐れず夏日を過ごす

春夏コロナ

・洛

## 岡本小由里

コロナ禍

・洛

## かがわじつお

二つの表記

・鹿

花の下ひとり歩めばなおさみし誰にも会えぬ自粛の日々は  
はらはらと桜まい散る春の風花見の宴なきままの朝  
グランドにまり蹴る子等の姿なくイカルのんびりえさをついぱむ  
ひさびさにまり蹴る子等の声のする緊急事態のとかれし午後に  
コロナ禍で古き友より便りあり今よみがえる青春の日々

## 岡本三枝子

独りの夜

・岡

他愛ないテレビドラマに涙して今日も独りの夜が更けていく  
孫達と歌いてゆきし川岸を独り歩けばせせらぎ高し

あと何年こんな会話ができるかと歴史クイズに孫と興する  
人間はコロナの脅威に戦えど桜は今日も咲きて散りゆく  
過疎化して闇深くなるわが邑を照らして残る雜貨屋一軒

## 小野明子

旧仮名遣い

・森

英単語の百余の初めの訳文に「注文の多い料理店」あり  
読んだことないのにびんとひらめきて貿易の本を借りて確かめる

「注文の多い料理店」を買って驚く徹頭徹尾旧仮名遣い  
信号を守って走る暴走族育でも赤でも爆音響く

一陣の涼しき風にほっとする夜に鳴き出しますは蝶蟀

## 小野泰子

冬の葉

・今

秀を撓めゆっくりやらす竹林の風と遊ぶか冬の陽のなか  
生垣にしたる茶の木を刈り込めば青き香のたつ冬の葉厚き

ずつしりと手ごたえありし広辞苑小さきスマホにとって替えらる  
浜に立つ我と入り日を結びたる光渡れと淨土の声は

紫の花びら散れる切り通し藤蔓さがせば狹き空あり

## 金子美智子

薺

・新

牡丹の木赤き薺の芽吹きおりここにも春が生まれているや  
一年に二度の入院ひしひと老いゆくことの怖さを知るなり  
いつまでも収束しないコロナ禍に帰省出来ない子と孫思えり  
ラジオより昭和の歌の聞こえ来て夫と唄いし日の懐かしく  
少しずつ折れた心の治りゆく子と孫達の日常のなかに

コロナ禍の記事に二つの表記ありかたや「終息」こなた「収束」  
朝の五時処暑ともなればまだ暗いされど鶏は活動始めたり  
島日にはあらずか鳥夜明け前鳥合の衆にてじしまを破る  
燃え上がる焰の如き多行松炎暑の中にめらめらと立つ  
ミーチャンと呼べば小声でニヤンとなきけだるく身を投ぐ炎暑の午後

## 笠井秀子

遙かなり

・北

電線に障る桜の枝を切る電動ノコギリA-Iのこと

石垣の間よりソーキャルディスタンス守りて咲けるはこべ　かたばみ  
隣室の孫はオンライン授業なり「法の精神」立ち止まり聴く  
はすの葉の滴ゆらりと一巡り泥を払いみてみどり淨める  
静いもはずむ心も遙かなり夕暮れの陽を夫とながむる

## 片岡力ヨ子

登山靴

・岡

ヒマラヤの谷間に咲きる朱の花を秋深まればまた思ひ出す

久ひさに出して履きみる登山靴足の痛みをしばし忘れぬ  
記憶薄れし山友といふが訪ね来て荒れし畑の草を刈りる  
引出しに長く眠れるバスポートドイツフランス恋ひてゐるらん  
観光ガイド止せる齡と思ひつつ今日も城山に声張り上げる

かはさきじゅん

さざんか

・そ

神戸良三

未央柳

・信

いつ見ても白きさざんかこぼれ出て冬の盛りの雪がつもれる  
日を受けて駅に群れてる白い花雪に埋もれて見分けがつかず  
車中から丹の絵の如く遠方につらなりて見ゆ冬の家々  
梅雨終り強き日さしの流れこみ夏を占う吉か凶かと  
片づかぬ多くの荷を見てもぐりこむごみより哀れ疲れたる身は

川上悠子

ひいまこ

・岡

木村静子

生への努め

・湾

子も孫も戻らぬコロナの秋彼岸夫の好みの曼珠沙華咲く  
バスケットの試合の戻りを立ち寄りし孫が眠りしピアノを醒ます  
十俵入りの保冷庫に保有米一俵を入れて眠はひし昔を思ふ  
五〇〇グラムに生れしひ孫の成長を明けても暮れても思ひ続けぬ  
這ふも叶はぬひ孫が喜ぶ線香花火喜ぶゆゑに止めることなく

川北操

歌を詠む

・凌

さきゅうとくなおみ

父の入院

・そ

年の瀬の澄みわたる空にくつきりと飛び行くジェットの残す噴流  
来ん年の懸橋となれ噴流よ世の安泰と健やかなるを  
如月の行きつ戻りつの寒暖に体調とのえる生への努め  
淡あわと連なる並木のさくら花わが晩歳をコロナ禍に惑う  
令和元年「どうなってるの」と自問する自然の怒りは人知をも降し

さみしさを思考の時ときりかへてノートひろげて歌を詠みたり  
ひとひらの雲流れをりいく時を空のはてへと飛びゆきし兄  
平和なる時は統けどいくさ時を街焼けし夜の悲しみええず  
室内に「青い山脈」の曲流れ老いる人びと楽しくつどふ  
奈良の園鹿はむれつつ遊びをりささやき小道に出合ふうれしさ

かわひがしかずよ

青虫が

・そ

久保幸子

涼風

・宙

地震あり妹家族が我が家にかかりつけ医が奉仕申し出る  
裁縫をしていて視線感じたりガラス戸ごしにテンが見ている  
青虫が庭の花の木に二匹いてすこし見ぬ間に大あげ羽舞う  
涼風とたわむれて飛ぶ夏あかねその数増して子等がにぎわう  
遠き日に早乙女初め田に入る真白き足にヒルがはりつく

緑側にさし込む日差し深みきて暦はいつか秋たけており  
コロナ禍にままならぬ帰郷の盆供養夫の好物觸めし供う  
わが人生過ぎて來し方行く末と考え深むコロナ休日  
小夜ふけて耳をすませば虫の声空澄みわたりまんまるの月  
天空の間に輝く大銀河心に留めん夏の終りに

熊谷とも子

秋に思う

・ 湾

酒井治子

迎への車

・ 森

朝やけの美しき空を見たる日よ何故か懐かし今までに無き  
この秋は句読点かも人生の来し方を思いこの先を思つ

時々に頂くご縁は思いもかけずゆるき歩みに彩り放つ  
人生に残す時間はあと少し神様もう少し待つて下さい

風吹けばかそく響く鈴の音よ秋はもはや惜しむべしとて

久保田歩 安達太良山

・ 湾

濡れるからと水遊びもせずに登ったのに余りの暑さに全身びしょぬれ

急坂に脚はどんどん重くなる一息ついて飴に託す

ちっぽけな私もやれば出来るのだと思わせた安達太良山は初めての山

ポケットに入れたつもりの手袋は独り寂しく森に忘れたか  
福島は山登りだけでは終われない蕎麦に果物と三兔追う旅

小塚幸 抹茶

・ 風

食事会さそいくれたる子や孫の若き声きくコロナ禍忘れ

亡き夫の愛した茶わんに抹茶たて仏前におく何年ぶりか

父がつけし幸と言う名になじめぬも幸ちゃんと呼ぶ曾孫にいやさる

東から大きな月の昇りくるひとり歩きのわが友となり

医師の言う親に感謝だね八十三歳歯石だけとり歯科あとにする

酒井綾子 花の春

・ 今

あじさいの今年の色は白多し長雨つづく空を見上げる

身の障り無くて畑にゆく我を子供も孫も喜びくるる

紅ふかく菊桃の花前庭を彩る春に今年も逢えし

山山にひびきわたれる鶯の鳴き声真似て一日樂しき

霧飛びて南月山姿見す山桜の花そこここにあり

煙中にオレンジ色の梨紅葉一枚の葉の風なく揺るる  
枝は折れ葉も払はれて見はるかす林は白き幹のみとなる  
フェリー降り迎への車来てをらず海の向かうに陽の沈まむとす  
夕影を濃く引き大波荒く寄せ陽の落ちむ時車の来たり  
容態は重きやと急ぎ来てみれば大き瞳にしかと出会へり

坂本佐和子

「レ・ミゼラブル」(II)・羊

墓のごと建つユゴー館をたづねしは吾七十歳晚夏の午後に

文豪の描きし絵画壁一面孤児のコゼット 因人もるた

文豪は「光が見える」と臨終のことばのこしぬそのベッド見る

パンテオンの白き柩に頭垂れ文豪を畏敬す時間とを惜します

「フランスは諸国の人魂を覺醒させるためにある」ユゴー言へり

さこだときえ

新生妻

新ショウガ葉付のままでびんに差し鑑賞したり食べて楽しむ

上品な強い香りをただよわす一夜だけの月下美人よ

咲き終えた月下美人を和え物に香りと味は花オクラ似か

台風で醉芙蓉の木裂け折れたせん定後には花咲くだろう

彼の烟スイカとメロン取り頃に カラス穴グマすべて全滅

筈崎愛子 足裏

・ 湾

香の搖らぎ心塞がる目の前に屈託のなき亡父の遺影が  
幾つかを捨てゆくことも良しとせん僅かに身軽になりゆくなれば  
陽のそぞぐ羅漢のかたえに行きたくも何を畏るやわれの心は  
さ庭辺の夫の作品のレタス菜に夕餉の卓の少しさはなやぐ  
塩田に日がな一日遊び来し砂のざらつき足裏に残る

佐 藤 昌

季節の風

・ 湾

高 橋 迪 江

母逝く

・ 渚

半生をじっと振り返り窓に見る暗れる日もあり樂る日もありき  
夜空には星が朝には太陽が望みを捨てずに前向きに生きん  
さわさわと落ちる枯れ葉は陽ざし受けわれにも届く小春の日和が  
春の日にいつまで続くか先見えぬ自肅の道にたんぽぼは咲く  
風温み月の光はベランダに優しく注ぐ五月の夕べ

宍 戸 千 佳 子

空向く

・ 新

立ち枯れてなお矢印の形してセイタカアワダチソウは空向く  
白鳥のつばさの裏は冬空と同じ灰色見え隠れして

我の目の高さに白鳥旋回すゆっくり帰れ浅瀬の二羽よ

クリッシェンドテクリッシュンド書きこみて歌うあてなき楽譜と遊ぶ  
マスクしてむしろ安らぐ眼差しを向けたり場面緘黙の子は

篠 原 節 子

でで虫

・ 楽

列島の上で季節のせめき合い朝の夏空午後の雷鳴  
唐突に雷鳴空をころがりてでで虫一つ窓より落ちる

コロナ禍と猛暑に耐える日日なれど夏水仙に元気をもらう  
若き等の無農薬米の重重し収穫準備か畦草を刈る

夕間に稻妻はしり北山の姿くろ黒せまりて見ゆる

住 田 ひ さ 代

若き日

・ 風

両の手に寄りくる山羊の白黒のあご髭撫でれば意外にしづき  
野良猫の通り道なる庭先に出そいし妻の葉先かじらる

常座るベンチも蛙の鳴き声に悩みことさえ吹き飛ばさる  
晴れの国岡山なれば山の木を切りて広てるソーラー発電

自動二輪の免許を持たぬ君を乗せ路地裏走りし若き日ありき

武 田 幸 子

暑い日々

・ 鳩

頬あえは「あついね今日も」雲のない青空だけとため息が出る  
雨降りを待ちつつ庭に水をまくホース口より虹うつくしき  
青桐の葉秋しらせるか一枚三枚芝の上より我に挨拶  
我が年は八十七歳と紙に書く笑顔の友はちがう世に行き  
テープ聞き幾度語えど我が語どこかで外れ異なる世に行き

辻 田 聰 美

ガンドム

・ 風

クルーザーがひとすじ白き水脈引きて繋いでゆけり島と島とを

氣の合ひしたつた一人のおばなれば我が生れし日を選びて逝けり  
副作用に苦しむ夫を見守りつつ副の字を福と思うて声にす

還暦をすぎし今でもガンダムをそらで描ける夫におどろく  
コロナ禍に母を看取りし友告げる「今できる精一杯をやりました」

土 井 谷 恭 子

せとか

・ 風

梅の種に「天神さま」がおられると女たちの口せわしく動く  
薄き皮そつと剥けばちきれんばかりのせとかずしりと重し  
夜通しの強風に耐えしゴーヤの実赤き種吐き存在しめす

幼子のぼうしとバットは赤色で落ちる花びら 素ぶりしている  
休校の続く春日の屋下がりわた毛をとばす母と子のあり

畠岡明子

新型コロナ

・地

中山尚子

鈴虫

・凌

老人の「絶対二度と戦争はいけません」と言う言葉響く夏  
皇室の守り伝える伝統と文化に触れた即位の礼に  
辞書を引き貢を繰れば巡り会う違う言葉に思わず発見  
目標の野球大会なくした児童にかけたこと果たせずに  
この試練マスクの幼は何と取り大人は何と説明すれば

中江京子 彼岸花

・宙

土用干し初夏の陽ざしに風搖らき梅一粒の膨よかとなる  
思い切りはしゃいだあとの家アールタ暮れに水まだあたたかい  
炎暑に積乱雲は天を突く木々も絶えだえ人影もなし  
彼岸花いろあざやかに凜として意気込み滲む母の便りに  
一瞬の光の大輪間に消え真夏の匂い湖上に融ける

中村里美

秋空

・熊

試着室三面鏡の端っこに老いた己の背中見つけた  
まな板に茄子を転がす吾の手がじわじわ似てくる祖母の掌  
秋空に永遠の生きさま立つヒノキ アルバム整理そろそろ始める  
その内に何を譲っているのだろう杉の大木常に緑葉  
地を叩くような市電の音過ぎて静寂が来た虫の音連れて

中林昭三 走馬灯

・春

コロナ禍を報じる紙面つきつきとカタカナ文字を増殖させる  
ランドセルかたかた揺らし子等は行く久方ぶりの朝の風景  
信号で止まる車は各々の屋根の広さの雪を乗せおり  
朝方の工事現場に目をやれば笑いを誘うラジオ体操  
くるくると孫の世話をく好か爺引退前は校長先生

西久保佐和子

いろんな道

・春

咲く前に切り取られてる紫陽花を水が上がれば聞くよともらう  
散歩道無人の店にみかんなく病氣らしいと人づてに聞く  
フレーフレー病い乗り越えホームラン原口選手歓声の中  
子が笑い母もつられて笑いだす皆な一緒に記念撮影  
夏休み連絡船で函館へ今年で廃止と船長の言う

丹羽哲也 刺繡の裏

・森

元旦に年賀届き其の人が二月に入りてボックリ逝けり  
吾が知人逝く数増える如何せん淋しきおもい卒寿の仲間  
碧空に白き綿雲うごかすに三十度越す熱を抱えて  
葉越し風クーラーよりも肌にとり網戸を通し涼しさ覚ゆ  
秋となり葉越しに蟬のなき声に季節は廻る走馬灯かな

われ等より若き顔せし機動隊罵詈雑言に顔色かえず  
たきき能の演者に似たりかがり火に浮き出る難匠の顔引き縮まる  
倒産後気持ちの整理やつとつき社章を沼に投げたり「さよなら」  
あそこには幸せ家族住むらしいミニ鯉のぼり泳ぐベランダ  
生きてきた七十余年を想うとき刺繡の裏を暫し眺める

## 野田弘美

みどり児

・天

## 寶藏八重子

秋

・鳩

眠れぬ夜デッベンカケタカ時鳥何を好んで聞かせに来るか  
みどり児のママに抱かれ愛おしくわれの知らない未来広がる  
手元より数多の切手落したりてんで散りゆく旅立ちのごと  
みつばちの小さき額に花粉つけ羽音たてつつ菜の花に舞う  
裾たくし花咲じいに扮したる夫のふるまう笑いの花よ

## 浜名結衣

父に

・宙

すぐにも退院すると疑わず洗ったバスタオル父の香残して  
在りし日の口癖はいつも幸せと孫の顔見て微笑む背中  
落採りもタケノコ掘りもちよこちよこと父の後追う小さな私  
この手の中包まれて育った光景がただ浮かんではばやけて流れる  
一番の心残りはありがとう在りし日のうちに伝えられなかつたこと

## 藤井純子

ビオラ

・昴

孫と二人上手になつたねと言いながらみかんの皮をむきあう午後  
リビングの灯りを消せばぼんやりとみかんの籠が浮かんで見える  
ウイルスという目に見えぬ物の怪に翻弄されるこの冬の一日  
それ違う人皆マスクをしているすべての人に挨拶する朝  
幾月も庭を彩ったビオラの花残り数本マグカップに挿す

## 伏見富美恵

煮干し

・風

箒の葉に乗り秋さがす葛のつる花いろ天地感わせ  
歌詠めず明日香の里を散步する秋がだまつて訪れた道  
亡き人の生まれ変わりと人の言うシオカラトンボは天国の父  
秋のフォトタッチするたび鈴虫や松虫のこえ夜を長くして  
走り来てハイタッチをした孫は今見上げみる顔ひと夏の時

## 本郷萬次郎

手立て

・羊

メチャクチャが大手を振るう日の本に錦の御旗憲法掲げん  
国難を乗りきる手立て想うとき錦の御旗憲法想う  
ウイルスの急迫不正の侵略に撃ち克つ手立て憲法なりけり  
徳仁とフランシスコの一言の枕詞の平和憲法  
one team one for all all for one ラガーの汗に憲法見たり

## 松井千明

庭百態

・地

立春の光刈り生に降りそそき緑の枝は鳥を待ち受く  
朝の庭今日の暑さを呼ぶよう「せっせ」「せっせ」と蝉鳴き立てる  
梅雨晴れのしばしの光窓に映え朝の紅茶の一杯旨し  
誕生日家族の思いしみじみと老いの心に幸せ満たす  
懸命に話しかける四歳児「あのさア」「あのさア」の合いの手高し

## 松平正守

令和二年

・洛

六脚の揃いの椅子がしづかなり夫とわれのみ食卓にあり  
照明を消されて眠る台所じゃがいもは芽を三ミリ伸ばす  
九四の煮干し踊れる鍋のなか泳ぎし海原思いて見つむ  
忘れものひとつもせずに帰りし子ねんどのおだんご仏壇に残す  
亡き母に毛筆習いし幼な日をよみがえらせる硯のへこみ

真如堂師の催せる茶会の日あさひに輝く薄紅葉山  
真如堂の茶会に聞こゆ法楽の太鼓の響き師をたたえたり  
今年なき祇園祭の笛の音は商店街の放送にきく  
このくらい第二次大戦と比べればなんともないと百翁のいう  
歌の道入り口あたりにありたれば山坂越ゆる力となれかし

松野正子

季節と食物

・地

森田孝子

南天

・今

日中は三十度でも粟食べてささやかな秋楽しむ夕餉  
本年の冬至は日曜都合にてクリスマス兼ねチキンとかぼちゃ  
歳重ね我が家おせちが残りおり隣家息子が煮しめが旨いと  
二株も買ってしまった豆苗の緑鮮やか水栽培を  
ウイルスで巣ごもり生活スタイル少し高価な食パンを買う

松谷公江

奥駆道

・鳩

熊野へと奥駆道の修行なり靡きなびきに祈りをささげ  
美熊野の沖まで藍に屈ぐ海の果ては淨土か行きし人はや  
京の街晶子のような女人ゆく胸高帯に日傘まわして  
古稀過ぐも条件適う職みつけ月月火水木五金だ  
追肥やる畑に五つの翔がきて「なすびもお腹空いたんかなあ」と

三浦美代子

オキーフ

・銚

もりやまきようこ

ヒキガエル

・そ

父と母ふたりは並び夢のなかじつとしづかに見つめる吾を  
不可思議なほほえみだけを投げかけて蒸氣の如くふいと消えたり  
あたたかな空気を感じめざめればかすかに聞こゆなつかしきこえ  
もの言わずただ見守つてくれていたふわりとゆれる父のまなざし  
やわらかな夢の中へと去つてゆく父のぬくもり最後の時間

森田由美

夢の中へ

・昂

夕顔の匂えれば庭にあの白の際立つ世界オキーフの来し  
ちぢみ地の下着をいまに夫の着るかの日の父のお下がりにして  
被爆者の女性ひとりで生きて来て「嬉しさありが樂しさはなき」と  
ガンバレとねずみに託し思想文書く孫いじめにあわねばよいが  
入れ難きホールにビシッとワンを決め両手をあげて長く立つ夫

茂木静子

大晦日の救急車

・埼

諸留能興

ハマナス

・洛

救急車に運ばる夫無事でと祈りつつ後を追う娘に託し  
十ヵ月の入院を経て帰宅した夫を又、又、病がおそつ  
楽しみにしていた新年迎えられず胆管炎の夫悲し過ぎ  
新年の一月中退院し味わう遅きおせちしみじみと  
車いすの夫は四つの病持ちそれでも明るく今日も透析

吾の前をよろよろ歩む老夫婦互ひの手と手かたく握りて  
残照に映える夕雲切り裂きてねぐら目指すやカラスの一羽  
吾がこころ底の底まで引き出して見せてあげたし愛しき君に  
人おらぬサロマ湖畔のハマナスを静かに揺らすオホーツクの風  
霧おりし初冬の稻田切り株に朝日の映えてきらめき清し

スイカ一切れ塩味強きに涼を得て肩にくい込むリュックを背負う  
シュレッダーに吸わるる刹那若き日の写真の笑顔は泣き顔となる  
来る年は平凡なれど願い込めて活ける南天実はたわわなり  
今日は一步前に進まん夫のこと忘れぬなれど振り返らぬを  
孫娘のみかんの筋を取る仕草亡き夫譲りよ細やかにして

# 作品 C (ヤ行)

○ 丸 山 修 · 大

ふんばって地球を少しへこませて砂丘を歩く海までしばし  
じっくりと焼いて焦げ目に醤油さし厚揚げの湯気秋が始まる  
モノクロの祖母の写真に白髪の母を重ねる夕暮れの部屋

○ 遠 藤 千 恵 子 · 銀

ミルクティの湯気のはるかに寒昇しあはせひつそり死角にありぬ  
濾過されて降りくる光をたつぶりと受けて山葵の花の咲きそむ  
静かなる電波時計は正午なりアスパラガスの色よくゆだる

○ 鍵 田 朋 美 · 沖

体温が混じり合うまで君抱く私を抱きしめるのはだあれ  
暗闇にいる君だからこそ出会う君だけ照らすスポットライト  
ひとりでも寂しくないの ひとりきりじゃない私を知っているから

○ 大 下 陽 志 江 · 風

木漏れ日の淡き光のさす窓辺わが子の頬にそっと触れる  
ボッカリと空にうかべる名月は何を思うて下界をみるや  
春彼岸夫と二人で参る墓そばにはつくしの頭がのぞく

○ 原 澤 吟 子 · 大

わが胸に穿たれてがらんどう小さきものよいつ帰り来む

○ 柴 田 紀 子 · 新

眼科医の待合室にテレビ無く耳にやさしい「エリーゼのために」  
如月のめぐり来たれば忘れずに指のひびわれ吾に添いくる  
幼子を風呂に入れしが飽きられて覚えたてなる拾を数えさす

○ 藤 岡 み ゆ き · 大

婚約指輪もらいし娘の弾む声ききつつ黙って柿を剥ぎたり

○ 安 藤 清 子 · 北

柔らかき布をまとえばあたたかしラオスの風が身を包みたり

望遠のレンズのなかに揺れる蓮とどかぬ恋にシャッターを切る

人生は不用不急のこと多し外出控えストレスを溜む  
コロナ禍に登山道も閉鎖され富士の夏山静かに終える  
三世代御世話になつたとしま園閉園まきわ人のあふれる

○ 山口美恵子・鈴  
○ 浅沼良子・鈴

新聞の集金屋さんに引き落としの依頼されたりコロナ禍なれば行き戻りのフェンスの向こう吠えたる三匹の犬「自衛して欲し」古希祝いコロナにかかりしコメティアン友らも隔てて旅立つ哀れ

○ 山野はるか・沖

手を伸ばしママと泣く声背に残り園走り出る復職の日は花柄の祖母手作りのマスク付け家籠もりの子に春風の吹く甲板を走る子を追うスマホには煌めく海と雲仙の山

○ 山野みなみ・沖

ポン菓子を掴み散らかす姿にも成長感す我れ親となる「立ちました」日々の喜び分かち合う第二の母よ園の先生桜舞うリハビリ通い子と一人寝められ歩みに光射し来る

○ 吉田明子・洛

笹藪の乾けるささやき分け行けば逢う人なべて秋思の顔す右に寄り左に散り浮く花筏水面に描く未知の絵まぶし白木蓮高きに風の往き来ありて霧雨白し地に消ゆるまで

○ 米原千秋・岡

言ひ過ぎし言葉は腹に棲みつきて夜の厨に流しを磨く今更に反抗期なり母の背に舌打ちをして夕餉を運ぶ葦簀より入りくる風が飴色となりてひととき微睡み旨し

トランにどこか似ているわが夫はフラリと出かけ今はいすこにICUにやっとあなたと心が通い握手した時の呼吸器の音病床で歌って聞かせたテネシーワルツ俺も知つてると胸張りし夫

○ 池上久代・雁

過ぐる風葉ずれの音のさやさやと心の隙間なでゆく」とくパッケージプラから紙に変えましたいもの菓子にメッセージあり満員の電車に異国の若き女座席を立ちて我を手招く

○ 石田安子・洛

楽の音の届かぬ耳朶を哀しみつ水仙ひと束あがない帰る聞こえずとも直なるままに聴きおれば師の言靈の心に響む朝あさの鏡に写すわが面に美しき心の薄化粧する

○ 伊島優子・津

部屋いっぱい匂うラベンダーの爽やかさ作業終わりしサシエ七本懐かしき風鈴祭り映像に妹と旅せし川越の想い出花山椒摘むかたわらに鶯の音色と香り至福のひととき

○ 江尻リエ子・新

しゃがむ子の小さな背中のその先に働き出した春の蟻たち藍染めの印度の綿の手になじみ夏服を縫う十月の午後千歳飴を姉妹そろって手に持ちて秋の日射しをかんざしに受く

## ○ 大越孝子・福

こぼれ落ちし種より生えしや朝顔の今朝を咲きたり十月七日  
空澄みて中天高く二羽のとび秋風にのり大き輪を描く  
夕暮れをいすこの家にさんま焼く匂いただよい主婦の日思う

## ○ 大塚幸子・福

道端の葛花摘みて持ち行けば いるあたらしと友はいいくる  
老桜の洞ムンクの叫びなりまだ咲くと根より芽を出す力  
細き枝紫式部の雪の華風に崩れてまた積り行く

## ○ 小川良子・天

九州の北部伊万里にこのたびの大洪水は迫り来、という  
迫り来る大水・泥は家を埋め飛沫をあげてこの後如何に  
深夜さえ豪雨は狂いゴウゴウと暗闇を行く果てしもあらず

## ○ 風早公恵・漣

青葉かけ鶯の声暗れやかに潮騒香るふるさとの朝  
かぐや姫になりて集いし観月会雲をはするる月に歎声  
花桃の膨らみ初めし庭先に帰り来たれる燕飛び交う

## ○ 唐澤美恵子・信

毎朝に燕の家族庭占拠楽しいおしゃべりズズズスピーやます  
ようやくに一雨ありてほっとする夫に頼みて種まく準備  
水守り毎朝毎夕堰通いの夫の帰りを料理して待つ

## ○ 河西聖子・地

W.I.T.に繋ぎセカイと繋がつてケータイの中一人呴く  
ちょっとした挨拶会話することが気持ち和らげ穏やかにする  
歳重ね人に尋ねるず太さを手に入れ世界軽やかになる

## ○ 久保洋子・雁

雲早く動きながら雷のとどろきわたる昼の春野に  
じわじわと過疎化のすすむ里山の六百人のうちのひとりに  
過疎のむら宝なる子ら眼そうに吐く息しきるバス停にたつ

## ○ 小南由子・昴

錦秋のこの山並を眺めつつ亡き夫は日日通勤せしか  
真夜中の家鳴り自覚めてそのちは眠れぬままに一番列車  
なき母と土筆を摘みし野の小道語らいながら歩きしあの日

## ○ 佐藤愛子・湾

憂鬱な日々は暮れゆきコロナ禍の季は移りて虫の声する  
六十年間の音の親しき掛け時計何故に急ぐや七分進む  
金蕊花咲くを見るたび思い出す七十年前の母のおもかげ

## ○ 首藤悦子・渚

稻わらを燃やす煙は漂いて長狭野の夏は静かに暮れる  
稻わらを焼く傍らにばつねんと麦わら帽の翁のすわる  
ペダルこぐ背なに幼さ残りいる中学一年ゆっくり進め

○ 関根正明・錦

夏野菜収穫後の畑から秋の訪れ堆肥の臭い

「こんにちは」誰かと思い見回せば小学生のかわいい挨拶  
二十歳より慣れ親しんだたばことも終の別れか十月一日

○ 鉄地川原朱美・新

足並みが揃わないのも良しとして遅れ咲きたる蓮の一輪

「枝豆は大丈夫です」五歳児は若者言葉に断りてくる  
遺されし『昭和萬葉集』に父あての納品書一枚挟まれてあり

○ 高澤匡子・風

パンジーの花がらをつむわが庭にともに生きてる私のいのち  
空の上静かにほほえむ父に言うあなたのことばかみしめてます  
五月七日やっと生まれた孫殿に太く育てと祈りをこめる

○ 土井敬子・湾

育ちしはふいこの炎宵白く夕闇に浮くまで子等遊ぶ路地  
しわばみし手を朝光にかざし見る病いの父の血潮も透けしか  
ボツネンと一人座りいる母の背をなでることさえ叶わぬ夢さめぬ

○ 田端典子・洛

コロナ禍で移動を止めるの選択に是非を問う我こちらの揺れる  
鶴の中雄々しく浮かぶ八ヶ岳墨絵のごとく稜線つづく  
小さき頃五山の送り火毎年に五十年後の今年再び

○ 飛田久栄・茨

採りたてと足病む旧友がキュウリ持つ帽子をかぶりかわゆい顔して  
歌詠みはうつにならぬと夏の夜の夫の冷やかし流して励む  
すつびんの吾が顔しみじみ写し見て八十五年きざんで眩し

○ 柄目けい子・柴

かぐや姫居座るような竹やぶの縁に落のとう摘むを躊躇う

○ 永井秀次郎・海

作業台四年の月日は流れたり文学、学校、故郷浮かばず

秋来ればその音恋いぬさくさくと稻株を刈る鎌の刈り音  
田の麦の締まりゆく穗に触れながら確かむように風わたりゆく

電車降り本屋前から遊郭のあたりたる町から町工場の頃

○ 出口和子・雁

先立たれ生きてなお生き春の野に神かたわらの津和野街道

○ 樋口淳一郎・海

本で見し雲の名前はもつれ雲そうじ終えたるガラス戸の中

いのししの防御柵張る炎天下「さくらんぼです」宅配うれし

あまりにも胸抉られて建築の底より仰ぐ風の採む空

痛いほど胸抉られて翻る台風過ぎし空の奥處に

マクドナルドフライドポテトの温もりにわずかな幸を感じる病

○ 平山一子・銚

間野春美・漣

一粒の種から遅い茂りいる水槽に日高のボウフラ対策  
手間一つ消えて苦味も少なくて種無しピーマン「タネーラ」凄い  
わたくしに届けよ大空の千の風令和二年の九月一日よ

○ 古川一美・伊

若竹のむれをなびかせ吹き過ぎる風さみどりに染まりゆくなり  
燕は揺るぎなき弧を描きつつ農家の軒に吸ひこまれたり  
まだ青き稻穂は夏の陽光のなかで静かに稔りの秋を待ちをり

○ 皆川宏・信

悪童もこの時ばかりは真顔なり勝敗決めるベナルティキック  
旧姓に戻りましたと教え子は眼見据え語る昔のままに  
ウイルスを避けて電波で連ばれた初めての孫の感触なき顔

○ 古瀬由紀子・洛

初めての運動会で一年生歌って踊る英語はハミング  
運動会はだしのソーラン天高く踊った後的小石気になる  
応援のパフォーマンスはしごをふみタンタンタンとHAKAを披露す

○ みなみみちこ・そ

職員の心優しき寿老園台風の夜の避難所となる  
台風を避けて来たのかと部屋は問ううなずき部屋に頭をさげる  
避難所に老いたる人らくつろぎて今生在るを幸なりと

○ ほしきらら・鹿

暑い日も嵐と去りて虫の声 彼岸花咲き木の葉は散りぬ  
長月に種をまいたら芽が出たよ三ヶ月後には鍋で楽しもう  
つばきの実びっくりするほど生ってます暮まいりのあと落ち実拾いぬ

○ 森田泰子・虹

暇ですかランチ如何と誘う孫ビザとバスターのスボンサー業  
コロナ下に作業の人は手を止めずゴミ収集車へお礼の声である  
カエル跳ね連にころがる水玉は夏の陽射してダイヤに変わる

○ 本田顯子・熊

甥っ子のさわざわざわのゲーム頑私のはめ目何も気にせず  
あせれども患者日々にと増えてゆく憂うるだけで教えぬ命  
青丹よし都玉ジャリ踏み行くを私に優し足元絞めよ

○ 森本ちづる・沖

ただいま帰りし夫の上着より梅の蕾がぼとぼと落ちる  
かさかさと転がる枯葉追いかけぬ秋の夕暮れ道へと進む  
休校の孫に誘われ鬼ごっこ青葉の匂い駆け抜けて行く

◆ボトナム 九月号 発行人 清水 恒一

通卷第一一三三号 総頁数六六頁

\*論説 「今を生きるための社会詠」

中止となつた全国大会の講演予定者吉川

宏志が執筆した講演内容を掲載している。

吉川は、社会詠を作る意味について、

「短歌には社会を変えるような大きな力は

ほとんどない。しかし、無力なだけではなくて、忘れたくないものを残していく力は

ある。現代だけではなく、未來の読者に向

けて書くという意識も必要である。未來へ

向けたまなざしが無ければ、「今」を本質

的に捉えられない」と述べている。

\*全国大会ミニシンボジウム「私の好きな

歌十五首」(発表予定者による原稿)

松尾唯花が「私の『好き』」を客観的に見

れば、①韻律②色彩感③季節感を中心的に語

れると思う」として挙げたなかの一首。

・水槽に一匹残つた魚のやうに列車の窓に

青年が寄る

◆未来 九月号 編集・発行人 大辻 隆弘

通巻第八二四号 総頁数一九八頁

\*みらい・くりていーく・えせー

「夜明け前の抒情歌人 相澤正」青沼 蓉

明治四十五年山梨県生まれ、昭和六年アララギに入会、昭和十八年に中國戦線へ派遣され翌十九年に戦病死したとされる歌人相澤正を紹介している。

**最近の歌誌より**

**ボトナム 未来 短詩形文学**

(藤田)

\*六月新集を読む 本多 稔

・卒業式マスクの子らのくぐもりにただ一度なるこの春がゆく 秋山 律子

「くぐもり」の一語が今の世界を言い表しているかのようになにごともなき春のやうに烟には人の動き種まきはじむ 紺野 万里

「a音の明るさがゆつたりと響き、平常への願いと祈りを感じさせる。」

\*後記 岡井隆の死去により後任の編集・発行人

・水際にしばしめためらふ蟹の子のすきとほりつつ砂をわたる 『いさご』

歌会でしばしば同席していた近藤芳美が「忘れない愛唱歌」とした一首だという。筆者は、「戦時体制が正にどんな影響を与えたのか、正は時代にどう向き合ったのかに着目しながら『相澤正歌集』を読む。結びには、「言論が当時とはまた違った『暴力的な声』に曝されている現在、膨琢された作品群を味読してほしい」とある。

・水際にしばしめためらふ蟹の子のすきとほりつつ砂をわたる 『いさご』

ちの目で集団に拠る意味を見つめ直したいとして、「各人が意欲的な歌を作り、選歌欄の枠を越えて、その歌を批評し合い、論じあい、私たちの価値観の間に細い橋をかけてゆく。そんな丁寧な対話を大切にしてゆきたい。そうすることで、この集団に持てる意味を見出してゆきたい」と述べる。

◆短詩形文学 九月号 発行人 下村すみよ

通巻第七六四号 総頁数四四頁 \*哲久のうた・あきのうたII (39) 「月光」一号、二号に「野晒しの歌」と題して掲載された、八十一歳の哲久への福島泰樹のインタビューを「哲久の生き方、作歌の姿勢の『核』が伺える」記事として設楽芳江が紹介している。

発行禁止となつた第一歌集「九月一日」塚本邦雄が絶賛した第三歌集「櫻」についての福島とのやりとりが記されている。作風が大きく変わったとされる「百花」と「櫻」だが、その土台は「九月一日」であったと語る。終わりに哲久の歌二首が載る。

・母のくににかへり来しかなや炎々と冬満

・母よ母よ息ふとぶとはきたまへ夜天は『百花』

・炎えて雪零すなり

となつた大辻隆弘の挨拶文が載る。自分たちの目で集団に拠る意味を見つめ直したいとして、「各人が意欲的な歌を作り、選歌欄の枠を越えて、その歌を批評し合い、論じあい、私たちの価値観の間に細い橋をかけてゆく。そんな丁寧な対話を大切にしてゆきたい。そうすることで、この集団に持てる意味を見出してゆきたい」と述べる。

◆短詩形文学 九月号 発行人 下村すみよ

## ■十月号 A 欄批評

## 日々の句読点

関根 和美

自粛の中で季節の自然美には慰められる。また祝いの時、省みる時など「時」の存在も流れゆく日々の句読点である。

娘のくれし酒は何かと思ひしけふは父の日ああさうなのか

草刈 十郎

・籠もあるなら蛩ぶくろに父の日に子より貰ひし酒持ち込んで

三浦 好博

娘さんからの酒で合点した草刈さん。コロナ騒ぎですっかり忘れていたのだろう。

飄々としつつも味わい深い結句が魅力だ。

三浦作品、家籠もりではなく蛩袋籠もりとは粹にしてメルヘンチック。胎内回帰ではないが小空間は不思議と落ち着く。気にな

るのは「に」の重複。「蛩袋か」など如何。

・ゴミの日をまたも逃しぬそれもいさ忘るるなかれ「八月六日」 小林 能子

・被爆日だからあれかしと願うのみ何とか乗れた 朝 車椅子 吉永 惟昭

相次ぐ機器の不具合に自らの「認知機能」を疑う小林さん。例えゴミ出しを逃しても

忘るまじ広島と。ユーモアとペーススの混

じる上句が下句の氣迫を際だたせている。

吉永さんの「八月九日」は妻の被爆日。

あの日の長崎を風化や忘却をさせじと願うも、今日も変わらぬ現実との格闘が待つて

いる。老老介護の日々で妻への愛と献身を深く感じさせる一首「顔拭けど見えぬうし

ろの寝ぐせ髪撫り戻すよに手櫛してやる」

・丸椅子に立ちて去年はもぎたるも今年丸椅子に立ち上がり得ず

・ワクチンが出来てコロナの止む日まで生きているのだらうか私は

・幾年が待ちいるだらうブラウスのベージュに黒の絵柄を選ぶ

浜谷 久子

豊作の梅の実を採ろうと白子さん。去年は出来たことが今年は出来ない。衰えを意

識させられ「僅かひと年されど一年」と。坂出さんはコロナで自粛の日々に残り時間

を意識する。逢いたい人にも逢えず行きたい所にも行けず、時は容赦なく過ぎゆく。

浜谷さんはIHコンロをはじめ買い換え

の時間が重なった。耐久年数や保証年数に自

らの齢も意識する。でも思い切って買った

シルクブラウス、少し地味目を選んで。

野菜自販機の前で譲られたピーマン。貧

しかった頃は日本にも「分から合い助け合

い」があつたと思ひ巡らす作者がいる。

・外つ國に笑顔運び来おそらくはあり余るもの持たざる人の

奥田 陽子

・洗濯ばさみ外すにバチンと壊れたり「暑

かったのだ三十五度は」 横田 敏子

・真夜中のこむらがえりの不意打ちと付けつけなしの韓国ドラマ

榎垣美保子

・縊られし男のように濡れそぼつ千しつばなしのシャツ長々し 高尾 恭子

停滯している何かを吹き切るような、解

決はしないのにどこか諦念を促すような気

にさせる三首。背景は違うが共通しているのは意識的に入れた促音「ハ」の存在か。

また次の二首。幼き者や若き者の「走る」行為が、新しい力や希望を与えてくれる。

・そのままの手をふりはらい駆けいだす小さ

き足の速いことはやいこと 大浪 美雪

・まだ走れることに気づきぬ子どもらと水鉄砲を撃ち合ひながら

・藤田美智子さてコロナ禍で海外から来ている人は別

の苦しみを味わっている。特に豊かとは言えない東南アジアからの若き労働者たち。

・私のを分けてあげます唐突にわが手に來たりピーマンふたつ 奥田 陽子

・外つ國に笑顔運び来おそらくはあり余るもの持たざる人の

奥田 陽子

野菜自販機の前で譲られたピーマン。貧

しかった頃は日本にも「分から合い助け合

い」があつたと思ひ巡らす作者がいる。

・失礼と座すや一服うまそうに文さん紫煙

清水文さん。一服するときのあのスマート

な動作がふつとよみがえる。

■十月号A欄（アーチ）批評

個性が光る

伊東ミイ子

- ・コンビニの袋の代金もレジに打たれ払い済ませる若者達は今年七月一日からレジ袋が有料となりプラゴみの削減が始まった。作者はマイバックを持参しての買い物。「レジに打たれ」と瞬時を詠み、訴えるものがある。
- 窓越しの夫との面会十分間タブレットを通して話にならず 植田 和子
- ・窓越しの親子のあやとりの様子が微笑ましく詠まれている。診察までを待つ親心も見え、橋から川になる動作も楽しい。何より作者の眼差しが優しい。
- ふる里の浜に拾ひし桜貝断舎離の一番に戻しやりたし 大倉美與子

え、どうして断舎離に桜貝と思いましたが、大切なものを拾った場所、ふる里の浜に戻すという作者の思いに心動かされた。

・永く住みし家に残せる本なども手元に欲しいと願うこの頃 青田不二子

過去の歌からホームに入居して間もないことを知る。沢山の品を整理し入居されたのでしよう。なかでも大切な本を置いて来たことに心を寄せている。多くを語らないが内情が見え心に沁みる。

・語りくるオンラインでの言葉はやさしくあれど平面を出す 赤堀 敦子

コロナ禍で仕事や授業の形態も様がわりし、オンラインやリモートが導入されたり、しかし画像からは本音が見えず温度差を感じている。「平面を出ず」が的確で見事。

・夕月夜 身を横たふるひもありて、横たわるままに、すでに淋しき 姦嶋 金平

大変個性的な作風で句読点、一字空きがある。何もするがないことのさびしさがある。ボウルに卵を入れ、混ぜるカシャカシャの音が不気味に響く。やがて魔女へと展開する発想が面白い。

・片仮名語の多き都知事の記者会見かたえの孫が訳してくれる 小原 静子

同感。特に小池知事は横文字が多く難解。同時通訳のお孫さんがいて最高ですね。

・コロナ禍に巣ごもり続々冗談を言い合う妻のいるあたたかさ 紺野 紘史

この時期何処へも行けず家に籠っている紺野家の団欒が目に見えるようです。

・いくたびの衣類の処理に残されし赤きシャツなり傘寿は洒落者 久土目 薫  
・ま赤なるシャツに活気を取り戻し朝の日照りをかゝとばしいる 久土目 薫

後期劇場と題した二十三作目。表題がなんともユニーク。自称洒落者といい、詠みが若々しい。お洒落万歳／元氣万歳／

・高台のわが窓から見る行き交いはのぞき見の氣分小悪人めきて 小泉 澄子

住み慣れた土地を離れ新しい生活がスタートした。高台の窓からのぞき見をするよう探る近隣界隈はまるで少年のような好奇心。不安の中にもお茶目な作者が見える。

・魔女ならば何を混ぜるやこの夜更け我はボウルに卵混ぜいる 小林さゆみ

貧食期限から始まつた夜更けのケーキ作り。ボウルに卵を入れ、混ぜるカシャカシャの音が不気味に響く。やがて魔女へと展開する発想が面白い。

・片仮名語の多き都知事の記者会見かたえの孫が訳してくれる 小原 静子

同感。特に小池知事は横文字が多く難解。同時通訳のお孫さんがいて最高ですね。

・コロナ禍に巣ごもり続々冗談を言い合う妻のいるあたたかさ 紺野 紘史

この時期何処へも行けず家に籠っている紺野家の団欒が目に見えるようです。

## ■十月号A欄（スノ）批評

## 夏の花

坂上 直美

・二つ三つ凌霄花が咲いてきたそろそろ風  
鈴吊しましょうか 滝口智枝子  
これも凌霄花の歌。こちらはまだ咲き初  
めで、これから風鈴を吊るすという、季節  
の情景が歌われている。口語体を用いてい  
るのが、やさしく親しみやすい調べとなっ  
ている。

・長生きを咎のこと恥のこと言う母に檜扇  
の花咲くを告げたり 田中 富子  
母上は九十一歳とのこと。知り合いの方々  
も亡くなられ、生きる意欲を失いかけてお  
られる。そんな母上に元気を出してもらいた  
くて、作者は檜扇の開花を告げたのだ。  
檜扇もまたオレンジの輝く花である。ただ、  
「咎、恥のこと」などすれば七音で整うと  
思うのだが。

・あじさいの露けき花を見つづゆく雨上がり  
たる夫の墓処まで 谷川 節子  
ご主人の七回忌は、コロナ禍のため、ひつ  
そりと行われた。ようやく雨が上がって墓  
参に行く道、まだ悲しみの乾かぬ作者の心  
が、「露けき花」に投影されている。

・読むことに飽いて登りき寺の庭一日椿  
の清しさにあふ 塚田 権子  
室内にじっとしていることに飽き、山寺  
へ出かけていたのだろう。寺では夏椿  
(沙羅双樹) を植え、境内に白い花片が散つ  
ている。心を清められた作者の姿が浮かぶ。  
一所懸命に登ったことを表現したくて「登  
りきし」なのだろうが、リズムから「登り  
し」はどうか。

中原 陽

西畠 駿子

白い芙蓉

歌にある通り、オンシジユームは、黄色  
に少しオレンジの入った花である。ちいさ  
な花がいっぱいに枝につき、幼稚園児がわ  
ちゃわちゃしているような可愛い花である。

父と娘の、あたたかく爽やかな情景である。  
名もない花はない。われわれにみな名前  
があるように。名を知らないなら、人に聞  
くなど、調べればよい。花の名を知ったか  
らといって、金にはならない。しかし歌に  
はなる。花を詠むなら、花の名を必ず入れ  
よう。はっきりとイメージが浮かぶ。

美しい花はない。だから美しいとい  
う形容詞はいらない。どう美しいのか、色  
は形は。どんな状況で咲いていたのか、ど  
う自分の心に響いたのか。花を詠もう。

花は美しい。春の花も、夏の花も、秋の  
花も。評者は特に夏の花が好きである。生  
命の輝きを強く感じさせてくれるから。  
・孟蘭盆に死者を迎ふる目印は紅蜀葵なり  
花を掲げよ 杉本 博子

・凌霄花 散つても散つても咲き出でぬ生  
きむ生命を掃きつつ感ず 鈴木 刚之  
凌霄花は、長い蔓にオレンジの花が幾つ  
も幾つも咲く。幾つも幾つも咲くということ  
とは、幾つも幾つも散るということである。  
そしてさらに幾つも幾つもまた咲くのであ  
る。人もまた多くが生まれ、多くが死に、  
また多くが生まれる。作者の妻もまたどこ  
かで新しい生命として生まれてゐるかもし  
れない。一蛇足、凌霄花にふりがなは不要。  
生命に「いのち」は必要であろうけれど。

## ■十月号A欄（ハーフ）批評

歌意と表現法のバランスを

近藤 栄昭

・ガス灯にけぶりしローマかのミラノ閑散としてニュースに映る 深井喜久代  
新型コロナ菌による病気が世界に流行している今、テレビ局がその影響を伝えようと、ある種の意図を持って放映したニュースを素材にしている。テレビ局の意図はある程度推測できるが、作者はその中から一つの核心をつかみ出して情感豊かに短歌に詠っている。籠もりがちな人々に世界の街角の寂しさを伝えている。

・白という固定観念なんのその街はカラフルなマスク美人たち 藤川 淳子

マスクをする人がこれほど表情を見せないとは意外であった。目はあまり心を伝えないのである。顔の約八〇パーセントを覆うともはや仮面であろう。その仮面で自己表現することに人々はすぐ気がついた。大坂なおみもそのひとりである。日本人の性向として、何かをいじくり、役立つ楽し

いものを作り上げるというが、マスクもその例外ではなかった。  
家籠まるひと日暮れゆく低空に基地へ降りゆく米軍用機  
米軍機の騒音で貢められ、さらにコロナに脅かされている。新総理で何かが変わる事を願い、仕事をしたいと言つたことを信じればコロナがどこかに消えそうな期待が膨らむ。軍用機もそうあれかし。沖縄は背負うことが多すぎるようと思う。ご自愛いただきたい。  
・「今日ひとり死亡」と告ぐる報道はコロナと戦ふ戦死のこと 真庭 郁子  
知らぬ間に罹患し、医療という援軍がある方も多い。戦い倒れるとはまさにこのことであろう。期待のワクチンはいつ来るのだろうか、それまで持ちこたえたいものである。

・返事するそれだけで良い妻が居る部屋暖かし時々のぞく 餅井 長視  
お二人揃ってお元気のことがおめでたい。なおかつ、頼りにする気持ちを、受け止めにおいての奥様のお心の広いこと。作者は全て理解されておいでである。幸いの永遠を願っています。

・君が手に手水の水をかけやれば水琴窟が

かすかにひびく 森 ヒロノ  
動作をともなう心情を素直に詠むお手本のようない歌である。素直な心持ちの表現であり、地下の水の跳ねる水琴窟の澄んだ音に生命の響きを知らされている。  
・緊急事態解除なりたる台所朝の支度に口笛の出る 吉野ふじ子  
コロナ禍は全く前例のないことに、いつもになると普通の生活に戻れるか、ますます深みにはまるのか。そのような時に光明を得て、口笛が出るほどの喜びが表現されている。読者が元気をもらえる歌。本誌が御手に届く頃はもつと明るい見通しがついでいることを願うばかりである。  
・戦利品を持ち帰ること蝮一匹棒に突き刺し家に帰りぬ 渡辺 徳子  
勇ましい力強い歌である。その後を知りたい気もするが、聞かなくても良いかもしれない。コロナで沈む時には心の特効薬の一つとして作用する歌であろう。読者は力強い新鮮な世界を感じ、ひととき鬱から離れることができる。  
伝えたい事象、表現したい雰囲気の焦点が絞り切れない歌があり、もつといない感じを強く持った。「我」を出さず、歌意の深さと表現力のバランスが取れた歌に読者は楽しく共感できるようと思われます。

■十月号B欄（アーチス）批評

生きている歌  
小原 香里

・「柏餅が匂う」と言ひし亡き夫の謎かけ

上手を懷いて供う

芦田 房子

柏餅が大好物だった亡き夫の「柏餅が匂う」とは、食卓に置いてあるのが匂うのかはたまた食べたいという暗示なのか。勿論後者でしょう。柏餅を見る度に夫を偲ぶ妻の温かさが伝わってくる。

・鍋を持ち豆腐を買いに行かされて揺らさぬよう帰りし思い出

芦田 美代子

レジ袋の無かった時代、酒や油も容器を持参して購入していた。それが当たり前だった頃、買い物は子供の役目だった。そんな時代が今となっては懐かしい。

・レジ袋が有料となりマイバッグ持参して買ふ品吟味する

榎田 佳子

レジ袋が有料になりマイバッグの携帯は日常となつた。以前に増して今はさらに慎重に品を選ぶようになった。それを持参したお気に入りのバッグに入れる。今年の新しい習慣の一つになりつつある。

・脚立にのり朝顔の網括げたり上背ありし境が羨ましい。

夫を思いぬ 遠藤 義子

遠藤 義子

毎年作る朝顔のグリーンカーテン、かつては上背のグリーンカーテン、かつては上背のある夫が網を掛けてくれていてその背中が頬もしく見えた。今年は作者がやっとの思いで抜けたのだろう。朝顔のきれいなカーテンが出来上がったことでしょう。

・楚々とした一輪ざしが好きなれば十葉摘みて仏間に活けたり

かがわじつお

すっきりと爽やかな歌。十葉とはドクダミのこと、日陰に密集して白い花が咲く小花だが、凜としていて私も好きな花だ。一輪の花が仏間を際立たせる。

・昼すきて朝顔の畠巻いたまま日照不足の巣ごもり長くて

笠井 秀子

真夏には毎日沢山の朝顔が大きく開いて目を楽しませてくれた。コロナの自粛で外出も減り久しぶりに出てみると畠巻が多い。そういえばこのところ日照りが少なかつたと気がつく。

・コロナにて途はなくなりし人多し螢乱舞

片岡カヨ子

の夜を独り居る

人生に迷ひ

金子美智子

外出の自粛で友人と会うことも制限され生きにくく世の中になった。しかし螢はコロナに馴染む時期になれば美しく舞う。

・透明のガラス細工か子かまきり柿の若葉にとけこみており

篠原 節子

若葉の出る頃、柿の葉は柔らかく薄みどり色で愛らしい。葉の上に子かまきりが止まっている。かまきりと若葉の色が溶け合つ

て清らかだ。写真になりそうな情景。

・さ庭の花々の中に白百合の咲きて位置を確かにしたり

金子美智子

庭に様々な色の花が咲き乱れている。しかしその中に一本、白百合がすくと咲いて香りを放っている。その見事なまでの存在感に圧倒される。

・合歓の花雨に打たれて土に溶け庭の掃除のはかどらぬまま

酒井 純子

合歓の木の葉は夜には閉じ朝には開くらしい。紅色の花は糸状になつて可愛いらしい。花が散り落ちていて初めて合歓の木に気が付くことがある。花は濡れてしまふと地面にへばりついて、なかなか剥がれなく、掃除が大変だ。着眼点がいい。

・草を刈る我的傍へに隣家の姫は大地のごときおしゃべり

酒井 治子

作者が草刈りを始めたので、仲のいい隣人が話しかけてきた。その姫の話は大地から湧き出すように次から次へと出てきて、止まることがない。「大地のごとき」という比喩が面白い。

■十月号B欄（セーヴ）批評

一読心に残る歌  
梅本 武義

コロナ禍でグラウンドでの応援が出来ないので、ベランダから乗り出して見ている。その様子が目に浮かぶ。

・今年なき祇園祭の笛の音は商店街の放送にきく  
山鉾巡行などで有名な祇園祭がコロナ禍で中止、買物客の極端に減った商店街に、往年の祭りの笛の音のみが流れている状況はテレビで度々見ている。

・梅雨晴れの一時の光窓に映え朝の紅茶の一杯旨し  
松井 千明

今年の梅雨は長かった。とはいへ雨続いている戦いの城跡はと、即刻歴史書を開いた。そして石垣は加賀の前田利家と越中の佐々成政の戦った末森城跡と思っている。

・さみしさはただに黙って聴くがよい眼。  
見つめてうなずきながら やまもとしづ  
泥の海なる屋内を老いし人夜更けてもな  
お片づけ作業  
やまもとしづ

今年はコロナ禍の上、豪雨による災害も

起きて、二重苦の地域がある。その被災地

でのことと思う。被災者にはお見舞の美辞麗句を連ねるよりも、無言で心に寄り添う方が良い。分かって居りながら実践できる人は少ないが作者にはできる。

・ふる里へ二人の住人は行つたきり二ヶ月放置の宅配ボックス  
丹羽 哲也

コロナウイルス感染の恐れのある都会から、ふる里の田舎へ行き帰つて来ない。宅配便のあることも気にならない。二人は仕事の無い老夫婦なのだろうか。昭和の戦時中の疎開が思い出される。

・ベランダに思わず乗り出しのぞき見る梅雨の晴れ間の少年野球 中江 京子  
少年野球には孫が参加しているのでは。

ひを経て

安田 明子

コロナ禍の歌の多い中で歴史好きの私は一読心に残った。四百年前の越中と加賀

の戦いの城跡はと、即刻歴史書を開いた。

・そのままとしづ  
たまねぎを振り分け吊るす軒下に手渡しくる母は在さず  
松谷 公汪

たまねぎの収穫が終ると、わが家も年間に食べる量を振り分けにして、軒下に吊るしている。一人で吊るせない訳ではないが、手伝いがあるに越したことはない。年老いた母には手頃な作業であり、息子への手伝いは楽しかったに違いない。作者も同様であり、母を偲ぶ心が伝わってくる。

・手に取れば思いめぐりて歩らぬ夫の遺品の整理始むれど  
森田 孝子

夫の遺品となれば一つ一つに思い出があり、心に沁みるものがある。捨て去り難いものを捨てる決断を下すには時間がかかる。類型があると思いつつも心を惹かれた。

・テレビから曲流れるや踊り出す子らゆつたりのわくわく休み  
山野ひかり

子は小学生の低学年か。親はコロナウイルス感染に神経を尖らす日々であるが、子らは学校が休みで無邪気に遊ぶ自由を楽しんでいる。コロナ禍の家庭内の親と子を覗き見している思いがする。

・石垣は四百年を苦むせり越中・加賀の諍するのか興味が湧く。

■十月号C欄批評

色のある歌

田中 富子

・ただいまといつかあなたは帰らないその日の為にいつららっしゃい 鍋田 明美  
子の成長は思い返せばあつという間。いつか巣立つてただいまと帰つてこない。言えるうちに心をこめて言おう「いつらっしゃい」

・透きとおる緑を重ね重ねたり「ぶな」の隠せる青空の端 柄目けい子  
ぶなの森が青空の端を隠しているというのが実作者の良い目のつけ所だと思うが、「ぶなの彼方に青空の端」とすると奥行きが出ると思うが如何。いじり過ぎだらうが。

・天井より蜘蛛がおりくる救助ヘリの正にレスキュー隊員のこと 芥川の「蜘蛛の糸」が重なりリアルに思いうかてしまつた。水害、コロナと救いを求める現世に降り来よ天上よりの蜘蛛の糸。  
・A3のカバンを抱え商談へ背に神棚の二拍手響く

・ただいまといつかあなたは帰らないその日の為にいつららっしゃい 鍋田 明美  
子の成長は思い返せばあつという間。いつか巣立つてただいまと帰つてこない。言えるうちに心をこめて言おう「いつらっしゃい」

・透きとおる緑を重ね重ねたり「ぶな」の隠せる青空の端 柄目けい子  
ぶなの森が青空の端を隠しているというのが実作者の良い目のつけ所だと思うが、「ぶなの彼方に青空の端」とすると奥行きが出ると思うが如何。いじり過ぎだらうが。

・訪ねたる庭に飛び交うアカタテハ蝶を話題に一時間ほど 「アカタテハ」スマホで調べました。なるほど赤が印象的な美しい蝶ですね。そのアカタテハが飛び交う自然の豊かさと、それを語り合える友のいる喜び。「一時間ほど」がほどよく効いています。

・着付けにと母の着物を持ちゆきし娘が難病にて処分を聞きくる 飛田 久栄  
着物は母から娘へのバトンのようなもの。その処分を問われた驚きが感情をまじえた「処分を開きくる」でグサッとささる。二、三首目で元気になられたご様子に私も大いに安堵しました。

・拍手のエールに商談成立？ 恒れ朝の風景 小さなマスクの連なりはコロナの蔓延の現れ、愛らしくも悲しい。  
・ねじ花の天のねじれに花付けば梅雨は明けたりと母に聞きしを 柴田 紀子  
ねじ花の小さな花に母の言葉を思い出す。ねじれつつ天に向かい咲く花に母への想いがつながる。「ねじれの天」の方がわかりやすいのでは？

・母の背にも夏の日差しは降りたるか梅干すわれの指も染まりぬ 土井 敬子  
「降りたるか」と過去形になつてゐるのと同じ日差しを浴びてゐるわけではないかも知れないが、母の教え、倣いのまま梅干すわれの指も染まりぬ」となつた。

・母の背にも夏の日差しは降りたるか梅干すわれの指も染まりぬ 土井 敬子  
「降りたるか」と過去形になつてゐるのと同じ日差しを浴びてゐるわけではない。しかし赤が印象的な美しい蝶ですね。そのアカタテハが飛び交う自然の豊かさと、それを語り合える友のいる喜び。「一時間ほど」がほどよく効いています。

・「作業着と交換すつべ」との提案に掘り起りのある口語が臨場感たっぷり。掘りたての署の泥の香りまでしてきそうである。

「店主に手渡す」の方がなめらかでは？

・夫もわれもおののおの金魚の鉢の中声の届かぬもどかしさ日々 土井 敬子

コロナによる自粛生活の息苦しさ。閉塞感を「金魚の鉢の中」とは言い得て妙。どこかユーモラスな感じもあって面白い一首

「店主に手渡す」の方があなまらかでは？

・夫もわれもおののおの金魚の鉢の中声の届かぬもどかしさ日々 土井 敬子

コロナによる自粛生活の息苦しさ。閉塞感を「金魚の鉢の中」とは言い得て妙。どこかユーモラスな感じもあって面白い一首

## ■十月号オリーブ集批評

帰りゆくところ

浜谷 久子

- 失職者四万のひとり教へ子は訪ねて来た  
表も。訪問の梅雨明け夕べ 藤澤 元子
- ・失職者四万のひとり教へ子は訪ねて來た  
り梅雨あけの夕べ 藤澤 元子
- コロナ禍とはないが時経過後も変事が推測されようか。影響は九月で失職六万の発表も。訪問の梅雨明け夕べ。職探しの中だつたか、二人の思いと声が聞こえるよう。
- 水っぽき母のカレーを大盛りの飯に浸ませてかつかつ食ひき 箕浦 勲
- 「水っぽきカレー」と大盛りのご飯。カレーはその家庭の味、物語も籠もって忘れられない母上の味となっていることだろう。
- 「かつかつ」に思いを馳せる。
- 亡き妻よあなたが常に口にせし本の片付け一段づつ始む 山本 孟
- 奥様が心に掛けておられた本の片付け。手に余るほどの多さなのだろう。思いに添いたいと始める一段ずつ。奥様のまなざしにも声にも励まされながら。
- ・延命はせずと決めしをひと言も責めぬうから視線が刺さる 若林美知恵

措置を施さないことを決めた作者に重圧がかかること。誰も異論を言うわけではないが命を決める重さに苦しむ。選択を迫られるようになったのはいつからだつたのだろうか。天下り左遷賞罰ありません定年退職妻とよろこぶ 定年延長、嘱託採用など、現代の勤め人の着地点は見極めがたい。無事勤め上げた人の定年という満願の日を夫婦で喜び合える幸せはのちの暮らしに続くものだろう。

三密を避けて始まる歌の会十人のマスク十人の元気 伊東ミイ子

漸く動き始める日常。工夫された会場で必須となつたマスクの様相とそれを凌ぐメンバーの意気込みが。「十人のマスク十人の元気」が場面を余すところなく伝える。

・糸崎蛤鳥揚羽に三筋蝶梅雨の晴れ間の来訪者たち 潮田 千代

十六の漢字に囲まれた六つのかな文字のように、梅雨の重苦しさを繰り返してひらりと訪れた蝶たち。どの蝶も自分の名を呼ばれて命が灯る。

・ふかぶかと間にうかびてねむるとき海はたいらぐやさしく匂きて 大島 真清

海となり身は穏やかさに包まれる。抗わず委ねることで平安がもたらされる。下句の

倒置で結句の連用形が生きる。

・街に住む姪と干し来し菫草を逝きたる今は雑草と抜く 片山 幸子

民間薬として暮らしに馴染む戦。作者の折りと手立ての甲斐もなく亡くなり、戦は雑草に色褪せてしまつた。だが大きな哀しみが宿るだろう、抜く手には。

・戦争は知らぬが戦後なら多少 例へばオノリーさんといふ翳 第一次大戦直後出現した言葉「オノリースン」。先日報道で、当時子供をもつけた女性のお孫さんが祖母の写真や自分の生い立ちを公表し生き抜いた祖母を誇りにして伝え続けたいと話していた。家族の発信が今。作者は「オノリーさん」「翳」という言葉を、呟くように「戦争」を問う。

・無機質の白き箱なる建物が児童の声に学校となる 島根美智子

児童の姿がなければただの白い箱、声が戻り学校に。作者の日頃のまなざしも感じられ、ありありと「学校」の画像を見せる。

・横たわり固まつたまま動かない小さいタヌキの命が消えた 高橋 啓子 弱っていたタヌキを見つけ動かなくなつた死骸を新聞紙で包み袋に入れてゴミ集積所に置くまでが描かれるのだが、命の終わる瞬間「消えた」の響きがいつまでも。

# 作品 A (サ行続き)

佐々木のり子

ボケ三昧

・森

ボケ防止本得て喜び帰宅する読もつとすれども置き場所忘る  
玄関の外燈灯いてる新聞を取りて戻れば消すを忘れる  
又やつたボケ1ボケ2とカウントす生きてる証しと感謝しながら  
ついにやつた約束忘れ落ち込むに娘はやさしくボケ外来に行け  
約束を忘れし我に息子言う三密避けよと神のみこころ  
認知症先に申告するが勝ち八十路入りたる仲間との会話  
メルアドはちょいボケのんちゃん四二〇吾の誕生日入れ兄のメール

佐川久光 卒寿を越えて • 福

これをもて賀状を書くをやめますと添書のある友の相づぐ  
遠くより父母は何と見ているや卒寿を越えて歩むわたしが  
教会のさ庭に生えるひと群れのどくだみの花を牧師は愛でぬ  
どくだみの花びらは白き四片にて小さくあれどあたりを照らす  
洗礼を受けてはやくも六十年待降節の燭火を見詰む  
徴兵の検査後間もなく召集され兄はそのまま遅らぬ人に  
わたしより先に死ぬなど長兄を見送りし母の記憶褪せざり

佐久間ミツ子 コロナ禍 • 者

コロナ禍と共にカタカナ語飛びかいて辞書ひくことの多くなりたり  
娘のくれし手作りマスク外出にかかさずつけてコロナを避ける  
大学の入学式のなまさまにオンライン授業係は受けている  
密集も密閉もなき畑に出でトマトの苗を植えて腰のす

コロナ禍に五か月ぶりの短歌会元気な笑顔みな揃いたり

紫外線にコロナウィルスは弱きと聞き陽さし浴びつつ畠仕事する  
青白く煌く星を仰ぎつつコロナの終息ひたすら願う

天皇のお告げに雨も降り止みて虹立つ不思議、外つ國の人らも  
箏の師の面影浮かぶ花あやめ背筋をしかと江戸紫に  
仕事・箏・同窓会に歌作りと四足の草鞋でも進まねばならぬ  
ひなまつりに手作りの甘酒を頂いて皆で歌うは「うれしいひなまつり」  
絶対に元気になるよと病友と交わしし約束今ここに生き  
亡き人を春の臘月仰ぎつつ問わばや問わん遠き思い出  
仰ぎ視るアーチを描く虹の橋不思議とばかりにくぐり抜けたり

佐々木美枝子 虹の不思議 • 湾

定金崇恵 季は巡る • 羊

冠雪の富士せまりくる旅の窓空蒼く澄み待つ人おもう  
半日をかけて大根ふろふきに母からの味わたしの味に  
おなが鴨三羽の水脈が交わりて広き池の面静かに動く  
妖精の舞いおりること白き芭庭の水面に水芭蕉映ゆ  
とりどりのユニフォーム走る千鳥ヶ淵緑の径に朝の風舞う  
ウィルスに扉を閉ざす美術館芽ぶく柳の倉敷に立つ  
コロナ禍はマスクに覆われ化粧なし素顔に戻りわれは生き生き

佐 藤 紹 子

老人力

・ 菊

設 樂 ま ゆ み 面 影

面 影

・ 羊

老いらくの恋に溺れる片おもい「みそひともじ」の君に一筋  
人に会い笑顔で交わすひと言が老いの薬と聞いて納得

腰痛と難聴 老眼 物忘れ老人力を見事に証明

折込みのチラシがた減り経済の日に日に陥し無常なる世

久びさに会えた隣人嬉しくも三密守りて五分で別れ

流行のテイクアウトをしています。キッチンから食卓までの

気まぐれに芽の出たジャガ芋植えたれば三個に殖やした親の頑張り

さとうちえこ

七 首

・ そ

萩の花こぼれ散る秋脳内にかくられんばした鬼の霍乱

おはき載る真白き皿は遠き日の悲しい誘ひかる餡の色

栗の皮剥きにくけれど旨し秋 指の痛みに見舞われし夜半

食べたいな母の昆布巻都會より吾子の葉書今日届きたり

無機質なタイルの上の蝶螂の若草の身プローチと紛う

触れようと指近づけぬ逃げもせず吾を慰めに来た蝶螂か

鍵一本失くしたからと戸惑うな家ごと浚う豪雨を思え

佐 藤 光 正

初冬の便り

・ 湾

住宅のはずれの沼に珍しき金黒羽白が水面に遊ぶ

鳶の鳴き渡る木々に朝の陽がひとしく温きひかり撫でゆく

今日明日と梅の花待つ枝先の一つ一つに春の陽が射す

大蕉と白菜を切るわれも居て常とは違う師走の厨

生垣の中に紛れる南天の初冬の便りか日ごと艶増す

秋の夜に心静めて佇めばただ草むらの虫の音愛し

行く夏の夜空を彩る遠火たまゆらの華間に枝垂れる  
忘れぬ想い出に頬つ面影のあまた溢れてまぶた限る  
晚秋の西日に耀うすすき原風に身罷る人の夢を追う

東雲に空を染めあぐ薔薇色のやさしき君は雲になりたる  
この世に帰らぬ人への千日の追憶ややに冷めゆくものか

散りざくら散骨に準りひとつかみ水面に撒けばひとときの寂  
指先に蝶の乗りきてこそばゆし翅裏に人の目の如き模様

篠 原 日 出 子

平安神宮庭園

・ 洛

ひそとした平安神宮庭園の木々のみどりと会話の進む

疏水より引き込む水の瀧の音こころの雜音すうと消えゆく

水しぶき立てて跳ねるは鯉か鮎か兩論出でて池畔のひととき

水際に姿あらわす大亀よ こは 鰐だ爪が違うと

睡蓮の中に眼をひく黄の睡蓮 花は花たれ人は人たれ

あちこちに庭園手入れの人々の帽子の動く木々の合間に

かしましく口だけ達者とうば桜わらいに笑い今日も雑ふゆ

篠 原 ま り 子

災 害

・ 羊

朱が燃ゆる首里城全焼歌会にて導き給う師の嘆きはや

シーサーの瞑らぬまなこ炎上を哀しみて見るわたしのシーサー

天気図の流れるさまは確實にあした天気になあれ 遠い日

十三夜おぼる月夜を窓越しにテレビ刻刻台風速報

アマビエの漫画切り抜き安堵するこの子が守る古いの一人居

「咲きましたね」見上げるマスクマスク顔花の宴なくひそりと春  
三十八度超えたる気温絶え絶えに迫り着く家生死の境

柴田登志恵

ここからは

・天

隨念京子

青き星

・天

花を閉ぢ渡き桃色の醉芙蓉天心の月照らしゆくなり  
ここからは誰も入れぬと墨の蹟交はるところに置き去りのまま  
うす蒼の墨蹟ときをり画布を抜け空の高きに飛行機雲ひく  
日常へもどるをためらふ街の上に梅壇花咲く人知れず咲く  
まつ毛から尻尾のさきまできらめかせ栗毛の神馬朝日に立ちぬ  
梅雨暗れの夜ごと星空駆けめぐる神馬の蹄汚ることなし  
白ぢやがないと栗毛の神馬言はれつまなざし遠く黙したるま

下村とり子 水と遊ぶ

・信

菅野み江 転居

・北

校庭の下方の川原に澄む流れ美ヶ原が水源なりや  
コロナ禍に孫子・曾孫は里の川愛でて遊び水澄みると  
息子は術後二ヶ月とふに孫来れば流しソーメンあれこれ忙し  
三人の曾孫はソーメン少しづつ冷たき水に流し届ける  
日没を待ちて孫子とバーべキューみんな弾も暑さよび来る  
荒廃の戦後県下にさきがけて中学校がわが村に建つ  
教科書のあちこち黒く塗りつぶし六・三制の学びはじまる

庄司菊枝

秋めく

・渚

須川千恵香 流転

・眉

ようやくに網戸入りくる風も澄み明けの大空長月に入る  
秋めきし背空に今うつすらと頭上の巻雲気持を溶かす  
のぼる陽に窓開け放ち起き抜けの身もすつきりと稜線見やる  
真ん中に夫の好み梨を供え果実色いろ秋の彼岸会  
刈り終えし棚田の夕日を背に降りし曇太カラス二羽の動かず  
山峡の稻田もすでに刈り終えて学生服の案山子かたむく

学生と童謡歌うおちこちに男孫ひ孫を重ねるひとり

夕暮れになりても暑きこの空氣さんばの大達アスファルト駆く  
水槽に我的近付く姿見て金魚藻を除け尾びれ振り来む  
病めるなか目の見えぬなか餌を探しける意志持つ金魚かな  
青き星地球は我らの棲みかなり“青き”を守るは我なりけり  
春を待つ今の望みは穏やかな光り射す日々花咲く休日  
煌めきの五月の空の下に干すたとへば窓のカーテン一枚  
胡瓜、茄子みづみづしき野菜の並ぶ棚ゴーヤの粒々しつかりと夏

東京の夜の灯りは人の住む数だけ光る水晶のこと  
老朽に壊す公共住宅の五棟の転居はほぼ高齢者  
抽選の運を夫に託したり二回も同じ番号を引く  
コウホネは澄まし茎立ち清流に猪口のごとくに黄の花咲けり  
日々に見る日本一の富士山は憲法記念日かすみの中に  
上空のブルーインパルスの曲技飛行うれし悲しも忘れて仰ぐ  
幸運のくじ引き當て転居して八階に見る三百六十度

## 杉浦詩子

時めぐりきて

・宙

## 杉山睦子

マスク

・朱

ぬける空二上山もハルカスも見渡す病室にただ夫と座す  
もみじ葉になることなく地に落ちて濡れそぼのものはせの一生  
風呂場にはあひるのおもちゃが転がって零の音のみボツリと響く  
ぱつり落ちた雨ののしくて驚いたおがたまの葉がブルッと身震い  
雨だろうか夜深けにさわざわ騒ぐのはそれとも私の心の気配か  
砂糖っぽ行列作ってダイブする蟻の大群歓喜のパレード  
花は葉に時めぐり来て誕生日私はいくつになつたのかしら

## 杉原令子

・春

## 鈴木武子

落蟬

・朱

野を歩む足の下より草は萌え春は音なく来る気配する  
春の日は動きはじめん赤茶けた山も緑に転換いそしむ  
ひと冬の眠りから覚めまちわびしいのち噴きあぐ紅梅開  
稻そよぐおもてをひかり走りつ陽は没してゆく山に向かいて  
白き蝶飛べるかたちにちらほらと今年も咲き初むえんどうの花  
山近く住めば朝夕見上げたる頭上はろぼろゆく鳥のみち  
夕茜まわりいちめん染めゆきて今日の終りを告げんとすなり

## 杉本博子

・眉

## 鈴木剛之

「ありがたう」

・福

コアラ抱き写れる夫の笑む顔を頬たしめ偲ぶ暮し長かり  
ありふれた事に幸見つけるを肢体不自由の特権とやせむ  
大空へ紫木蓮びんと苞を立て春と交信始めたるらし  
足元に氣を取られる此の日頃冬鳥の群頭上かすめる  
ぱちぱちと松に鉄を入れる音は大寒の氣をふるはせてゐる  
受話器よりハッピーバースディ聞こえ来る二男家族の愛のうたごゑ  
亡き夫のゆかりの草木に囲まれて独りではなき温もりに居る

コンサート中止の知らせ届き来て空を仰ぎつつ馬鈴薯をまく  
会いたくも帰つておいでと娘に言えぬ新型コロナ蔓延の中  
手作りのマスクそれぞれ町中に行き交う人の口元華やぐ  
一時の激しき雨に空明けてほっかり虹のかかりておりぬ  
雨上がりスーパー出づれば幼な児の指さす先に虹かかりおり  
暑き日の続く八月陽をかくす雲流れこよ浮雲あらば  
今朝の雨ひっそりとして降りしきる暑さしすめし我が心をも  
長梅雨の明けて湧き立つ蟬の声空にひびかう日の暮れてまで  
ひと日鳴きつきて木陰に落蟬は羽根青きまま空を見ている  
コロナ禍に保育士の娘と園児等を守るは我的外出自粛  
コロナ禍の墓参かなわず好物の精進揚げあまたひとり送り火  
青葉かけ受験生家の窓あかり闇を照らして空白むまで  
炎天のまひるを閉じて夕化粧夕さる庭に黄花ひろげたり  
季節ごとの野菜育てし街の角荒草高く茂りしままに

鈴木文子 ひととせ

・萬

鷹野長子 月下美人

・朱

・朱

定められし短歌の形は砥石ぞと研ぎて磨きて一首を成せよと  
封鎖され人の影なき公園の夕の歩道に桜散りしく  
川の辺の桜並木のはなやきもひとづてに聞く春ゆきしかな  
朝靄に眠れる町のつづまれて夏は海よりそつと近づく  
桑の実を食べ叱られしとほき日の母に会ひたしも一度亡母に  
雷のひかり轟く梅雨の夜月下美人はひそやかに咲く  
洗濯物ふはふは乾くそれだけで嬉しくなりぬけふは梅雨明け

桑の実を食べ叱られしとほき日の母に会ひたしも一度亡母に  
雷のひかり轟く梅雨の夜月下美人はひそやかに咲く

水ひけば泥にひろがるきす林檎信濃スイート紅哀し  
おしゃべりの相手おらずは淋しきと施設に入りし友の便りは  
その夫を送りひととせに逝きたりし桜花びら散り急ぐなか  
月下美人ひと日限りの花咲かすわれ凡凡と八十路近づく  
雷鳴のパンチ強烈範もり居に沈みゆく身を奮い立たせる  
コロナ禍に会うはかなわず誕生日スカイブ映す日焼けの孫よ  
寝返りを覚えてよりは十余年思いしたため文送りたり

鈴木三津子

思い出

・海

高橋光代

秋は来ぬ

・渚

ビオトープ坂月川の畔を行き連れ待つらしき五位驚を見し  
駅前のコンビニ近き暗がりに補導された少年二人  
波音は天候によつて異なると言いつつ母は畠へと行く  
問い合わせ「豊かさつて何」母親が作つてくれたおはぎの甘さ  
地震後に冲に向かつて並び立つ漁師は津波の予兆を探す  
日本海へ十三キロの位置にある三国国境の町を思えり  
藤原京の木立遠くに見つついる道づれとなりし猫と並んで

暑き日の続くなにも藁を焼く煙たなびき秋は来たれり  
陽の沈み涼風待ちしウオークイングこおろぎの鳴く野路のしづけし  
生い茂る畠中に咲くつゆ草の静けき花に刈る手止めたり  
コロナ禍や熱中症の夏が過ぎ金木犀の香庭に漂う  
異常なる気象の中でも彼岸花秋を忘れず野を朱く染め  
腰痛に悩める我に息子よりレトルト食品送られてくる  
腰痛で動けぬ我を烟草は嘲笑うがに烟を覆いぬ

高取尚子

春若布

・岡

高原桐

アブチロンの花

・森

播かなく煙に菜葉の芽の出でて耕作止めし我を勞ふ  
たつぶりとたきりし白湯に春若布浸せば色よし今が旬なり  
今日一日通行止めのシンボルロード菜の花祭り大きく賑はふ  
菜の花に時雨ひと時走りゆく那岐の裾野に虹を残して  
年どしの梅雨の上がりを祖母が告げ山葵を刈りしが浮かんで消える  
頬かむりぬくぬくとして荒れし野に芦摘む我を馳が怪しむ  
外来語政治熟語の羅列なれど国会中懸命に聞く

アブチロンが好きだと兄はわれに言ひ妻に言はざりしあの日 花の名  
天平のある日ある朝桔梗の五裂に開きし野辺を偲びぬ  
寺の暦の占ひにある「晩年よし」半日はそこを開きて過ごす  
秋風と一体になり坂登りゆつたりと少女になりゆくわたし  
所有せず安らぐところ隣家のうんざからづらの揺れをたのしむ  
冷蔵庫の雜音修理無事にすみ晩夏の夜の深みゆく闇  
帰京時のふたたび起る寂しさよバス停に母の朝影残す

滝口智枝子

奇跡

・ 湾

田中純子

スポット

・ 桜

大吉はこれから先の楽しみとおみくじ結ぶ梅の小枝に  
竹の子の香りいっぱいの部屋となり炊き込みご飯は今日の贅沢  
花を植え映画を観に行き本を読み小さくていいさしあわせなんて  
スカートの裾を押さえる春一番わたしは少しマリン・モンロー  
ゆっくりと菖蒲湯に浸かり考える日本は意外に脆弱だった  
娘にも母にも会えぬ二ヶ月余いつしかカッコウ夏を告げくる  
奇跡なる生命の溢れるこの星に私もひとつの奇跡なのかと

田口紀久子

木犀

・ 鳩

田中富子

大施餓鬼

・ 鳩

引っ越して庭の木犀伐り倒す年」と呉れし香り「ありがと」  
夕食後基盤のほこり拭ひ去り五目並べに夫と興じる  
八十歳賀状を止める人ありき長生きしてゐる証しとなるに  
大橋にたなびく雲を眺めつつ神降りませるにしへ懐ぶ  
地球人コロナ騒ぎに明け暮るる夜空の月よ見守りてあれ  
吊り橋の弓の長さが世界一誇りを秘めてテラスに眺む  
口遊む「我は海の子白浪の」低音浮かべ一人のコーラス

辰巳洋子

令和二年目

・ 莢

谷川節子

白雲

・ 朱

その昔コーセーと呼ばれて戯れたブールサイドをそろりそろりと  
加齢とは身体と向き合いせめき合い調子を問うて今日のはじまり  
師の去りて走馬灯のごと身をよぎるやさしき目線と口論もあり  
人類に覆いかぶさるウイルスにあの日常生活が追い込まれゆく  
静寂と画面の日常強いられて時止まるかの 令和二年目  
未だなき心の乱れと闘いてもろきわが身をみつけたような  
新宿はかくも遠くになりにけりコロナに歌会閉ざされたまま

従兄弟みな集いて本家の大広間糸切り団子食べし夏はも  
蛇女の小屋がけありき大施餓鬼野道行きしよ従兄弟集いて  
初物の梨ぶら下げバラソルの母と帰りしかの大施餓鬼  
ガシヤガシヤの虫籠みやげの大施餓鬼ディズニーランドの孫に見せばや  
おおかたは彼岸に逝きてはらからんの最長老なり母九十一  
大広間埋めし人の大方は逝きて本家は老二人住む  
従兄弟とて古稀過ぎたれば偶さかの仏事に顔を会わすのみなり  
のびやかにたなびきゆける白雲を病院の窓よりひた見上ぐる  
道の辺の花びらの中うもれつ細き葦は濃き紫に  
からし菜の伸びほうだいの通学路子らの声なく黄にあふれゆく  
丘の辺に柞の新葉さやきおり疫病はやる春ただなかを  
紫に黄につやめけり幾たびも疾風にむかうパンジーの花  
大空へ四ひらの苞を平らかに山法師立つ静かなる道  
あじさいの露けき花を見つづく雨上がりたる夫の墓処まで

片言の日本語現場に調和して和氣あいあいと足場組み立て  
「雨雲が来るからこれで帰ります」外壁工事は雲行き次第  
天空の鳥居と言われるスポットに吸い寄せられて若者の中  
一枚の賀状が運ぶ春風に今年は滅入らず生きてみようか  
一年余眠り続けし妹はコロナウイルスの騒ぎも知らず  
免許証返納したる夫が持つ「運転経歴証明書」の写真は晴ればれ  
ひとつ粒の種から生れし薄紅のフクロナデシコ鉢にあふれる

田 村 利 子 言 葉

塙 田 禮 子 初 秋

・ 信

色のなき雨に始まり今朝の庭シンピジウムの笛ふくらむ  
人と会うことのなき夜花柄の湯呑みひとつを洗いておわる  
一呼吸すれば良き言葉うまれ来よ砂糖ひとさじ足しココア飲む  
びっしりと炎かかぐるシクラメン力を込めて正月に咲く  
母の日をコロナ騒ぎで忘れられひと日おくれの花束とどく  
「感染」の色刷りの文字ぶとぶとゴミ箱に見ゆ捨てられし朝刊  
もみじする山のつらなる山陰線九十歳の姉にあいにゆく

## 千 葉 範 子

ひまわり

・ 朱

お日さまに心を放てるひまわりは成長早め大輪咲かす

陸田の隅に生えたるひまわりを選びて脱皮の油蟬  
夏空を四方の山より立ち昇る入道雲に怖さ広がる  
新盆を迎える庭の片隅に虫の住みかと草群残す  
古里の御祖の墓に実をつけて挿一本木陰作りぬ  
武蔵野の小高き丘の木もれ日を浴びて聴き入る蜩の声  
虫の音を近くに聴きて行く夏を密かに送るコロナ忘れて

## 千 葉 範 子

輪廻転生

・ 湾

ゆく夏を惜しむがに啼く蝉しぐれ耳に沁み入る束の間の生き

コロナ禍と猛暑に疲れしこの夏は花火も上がらず夏祭りも消ゆ  
古里の友の電話に長ながと話せば募る望郷の思い

「コロナ禍で太ってしまったじゃ」と明るく云う愚直なまでの訛り懷かし

上京も危ぶむ日なれど臨月の近づく娘にエールを送る

高齢者の仲間となれば孫のため体力アップ散歩にスクワット  
つくづくと輪廻転生思わしめ慶びとせん向日葵の咲く

## 照 井 美 枝 子

歌

落ち込める心を奮い立たせしは一首の歌よりこんな力が歌に

青い月が架空でありても口ずさむ昭和の唄は詩情に溢れ  
片足を引きいる姿を何とみん「骨折でなくて」と強気の励まし  
いちばつの花咲く頃に思い出す切なく詠いし子規の胸うち  
何故責める医療従事者の戦いをコロナウイルスのはびこる今に  
いつも出会う障害ある子の晴れの日に衣装を見せに来心根うれし  
十月十日は晴れの特異日なれど異常気象増すどうなる地球は

## 朝 長 美 代 子

病 む

・ 沖

突然にくる悲しみよ義妹痛み夫疾み吾も病床に伏す

背の痛み書き止めたくて一本の鉛筆欲しと病床に恋う

恥じらいをかなく捨てて若者のリハビリ受ける米寿の坂を

病窓にひとすじ尾を引く飛行機雲痛み消ゆるをひたすら願う

見上げたる空一面の朱雲吾も飛び出したし米寿記念に

灼熱の夏を知らずにベッドに伏し季は移ろいて大型台風  
物忘れひどくなりゆく吾に医師は認知症ではまだないからと  
半生をかけて築きし庭園を草対策にと舗装するとふ  
ショベルカー大きく音たて入りきて終日首振り新地にしゆく  
生ある樹々根こそぎ倒されトラックに涙で見送る空は夕焼  
すだれは巻き風鈴軒よりおろす時猛暑凌ぎし同志の心地す  
さはさはとカーテン揺らす風のありコロナの猛暑よくぞ越したり  
消掃のゆき届きたる実相院の白萩撫む滑寂に立つ  
台風とコロナのおそふ地球上に初秋の訪れ心和ます

## 永井光子

簡易郵便局

・岡

## 中澤みさ江

母の綱

・信

何鳥か知らねど朝の庭の樹に鳴く鳥のありて吾は目覚めぬ  
 コロナ禍に暗き日々なりせめて空暗れよと目覚め天気伺う  
 局を訪う客も減りきて経済も邑の行き来もコロナ一色  
 来客の気配のあればマスクかけマスクを取れば風がさわやか  
 満開のプリムラの鉢窓口に置きて一日の心明るむ  
 口癖の如く人らの言い立てる「コロナ」に負けて仕事にならず  
 春の陽の山に沈むを見ておれば慈しみたる父母が頸つ

## 長岡知子 つながり

・湾

これが最後思いつて解く母の綱 編目なつかし鉄色三筋  
 糸を経て一反分の長さ決め縞目通して平綱となる  
 脱穀の激しき劳苦すぎたればようやく母の機織となる  
 家織の着物羽織と対にして四人娘に備えし母よ  
 無学だと明治生れの母にして子等を育てし劳苦を憚ぶ  
 母の日にばかりの反物贈りたり七日も経ずに着て見せしかな  
 たらちねの深き心を思いやり手の届かぬをわびる心よ

## 中島彰代 ウイルス

・春

なにごとかあったのかしら黒塗りの車止まれば穩やかならず  
 つながりの薄き世ならん弔うも身内だけとう形の多くなり  
 いつの日か命の終えるその日まで朗に生きん今を愛しみ  
 縮れ毛の髪の白髪も証なり精いっぱいに生きて來たという  
 存えて昭和、平成も過去のもの思い出あふれ寝つかれぬ夜半  
 敬老日、町内会のお祝いを受け取りながら自覚す「老人」  
 鳩ぼっぽ忘れず会いに來てくれるコロナを気にせぬ愛らし訪問者

## 中川富美子

ひいじい様

・浜

## 中島阿津子 雲

・湾

奥深く一人こもりて夜となる話さず笑はず寂しきひと日  
 トンネルの彼方小さき明かり見ゆそのむかうにも待つやウイルス  
 人生の鞍部と見ゆれ病院の待合室に人ら黙して  
 ホワイトもカラードもかたく組み合ひて噴き出す汗に塗れて熱し  
 ノーサイドの笛の鋭く鳴りわたる歓声溜め息テレビ棧敷まで  
 ラグビーの日本代表異邦の人も声揃へ歌ふ「千代に八千代に」  
 かの国にわれら在りしは五十年前五年の苦楽ただに懷かし

亡き夫のラグビー熱よ盛り上がるワールドカップ空に見ますか  
 「父さんに見せたかっただ」と娘がぼつり七回忌終う霜月の夕  
 遠く住む身重の孫への気がかりを処すべもなく一人のひと日  
 産み月となると聞きいる孫の身をあけくれ思うもはるかに遠く  
 遠き地に三九八五の曾孫生れるばると来し大あくびの画面  
 「ひいじいになりましたよ」とうつし絵の夫に見せいる嬰兒の画面  
 コーラスも体操もなくこもり居てパソコン画面の曾孫見ている

子の着たる小さなセーター解きつつ五十年経し染みさえいとし  
 一針に一針重ねしセーターに編み込まれいしわたしのしあわせ  
 空見上げ星と雲と風を見る一日の過ぎる心のゆるびに  
 雲の影沈めて湖の底深し消息絶えし友の面輪も  
 雲の編む不思議なふしきな物語、共に見し友今はいざこに  
 迎え火に帰り来ませと祈りいる夫よ父母そして弟よ  
 西空に積む雲の端のゆらげるを御靈の道と子らと見上げる

中須賀美佐子

ひらく

・昂

中西淳子

季節

・天

降りはじめの雨の匂いがするというむすめの声にカーテンひらく  
ほんやりと椅子にすわり壁を見るただそれだけのひとときのあり  
携帯の電波の届かぬ山の家夫とわれの手さぐりの距離離  
近づけば遠ざかりゆく山里のみどりの闇を野うさぎ走る  
灰色のとかげ一匹またこ閉じ日のあたる石に動かすにおり  
舗道をのたうつみみす一匹を踏まぬように歩く夕ぐれ  
母の庭に迷い込んだら黒あげは桔梗に止まりふわりとびゆく

永田進一

夕顔

・凌

長野美佐子

梅香

・茨

夕顔の棚に追加の桟を組む君の笑顔を思い出しつ  
夕顔の咲けば思ほゆ君なればかそけき炎の揺らめくことし  
夕顔のひとつ咲き出でこんにちは道行く人のすがしき笑顔  
去り行ける親子は自転車のさわやかにペダル踏みゆく笑顔を残し  
風に搖れ葉をそよがせる夕顔に赤蜘蛛ふわりと来たりてとまる  
昨夜咲き花の中へと小蟻入る振動かしてせわし気なり  
蝸牛ふたつ並びて夕顔の咲くを待つがに傍へ近づく

永田多恵子

今さら

・鴻

中原陽

ディ・ケア

・森

音訳奉仕に生かされていた私の時間 単身赴任の夫からのプレゼントント  
子、孫と集う願い置き去りコロナ禍にたた急かされてめくるカレンダー  
譜を読みて音をききわけ指走る 呆け遠ざけるかピアノの時間  
この家にてピアノを弾ける今、今を味わい尽くさん愛惜をこめ  
今さらに感性のちがいを思い知る 男と女、あなたとわたし  
首に腰に湿布を貼り合う風呂上がり一人では出来ぬしみじみ二人  
わがひと生の望み叶つも叶わぬも運命と知れば心の穏し

骨董市さくら五井の皿五まい春の菓子盛る華やぎを持つ  
ガーベラの咲き始めたる冬小庭ときにはらざる春日のすえに  
危機みこと対し得るものわずかにて國の有体見ゆるコロナ禍  
父母晩年十年の記憶に歎を入れ土にこなして現を実とす  
手に摘めば「入あたらし豆」はん湯氣あおあおと初夏にただよう  
梅雨明けをしめすせみの音羽化の朝地上に放つうすみどり羽  
遊び果て薄夕暮れに子ねこ鳴く母ふところを恋うる幼さ  
茨城の魅力度最下位梅香る園に茶の湯のぼの白く発つ  
花咲けば実の生る梅の木の古りてなお結実の時を待たるる  
グーグルに南瓜の煮かた聞くと言う人の代わりにラジオは話す  
患いしガングリオンの存在を思えり常に爪切りながら  
夕月の照らす路地裏我が翳の細く付き来る生命と共に  
浮く雲を銀鼠に染め落日の遠く輝きコロナと紛う  
肌寒き夜の月光皓皓と地上を照らす孤影をひきて

中村恭子

冬から春へ

・洛

中山真弓

一步前進

・信

十二月の紅葉はどこか寂しげで秋と梢にしがみつくさま  
長男が永眠とあり師走半ばボツリ届いた喪中の葉書  
暖房の届かぬ部屋にひとり居て歌謡をめくれば乾いた音色  
父眠る二十六度の病室の窓に優しくぼたん雪降る  
春恋えはここにと答える陽射し受け南の窓辺に鉢植え三つ  
散り際の命にそっと近づけば仄かに香る一群の花  
なんとかなると想い暮らせば本当になんとかなって閑かな時間

中村志津 鶴雲

・連

西佐恵子 不安

・湾

世界中を震撼とさせたる新型のコロナウイルス衰え知らず  
全国に猛威をふるうコロナ菌 同居の子等にさえ距離を置く  
秋日和何はさておき布団干し今夜の夢の幸<sup>さち</sup>くあれかし  
鶴雲言い古されし一言に見上げて飽かず秋たけなわの  
今日も独り留守を預かり会いたきも逢えざる亡夫の影を追いつぐ  
お互いの無事確かむる手段とし地区の老人会へ顔出す  
高齢者向きの行事へ足軽し世話人の旁に頭下げつつ

中村博子 棚の友へ

・連

西田江美子 御神楽

・宙

ノーベル賞授賞会見飛び切りの笑顔に話す吉野彰氏  
砂時計落ちゆく砂に急かさる残りの時間少なき八十路  
歌の師に百首を詠めよと言われにし遠き彼の日の甦る朝  
貫状の用紙に書かれし直筆は香川進の「しづかにぞ燃ゆ」  
歌友の死を呆然と聞く 娘御は風呂に倒れしことを告げ来る  
ほんのりと口紅はなやぐ和服すがた柏の友へ「久保ちゃん」と叫ぶ  
ゆっくりなく友逝きたまう水無月や慎ましく優しき八十九歳

分からぬと避けて通るも難しい世は何につけデジタル社会  
デジタルの世界に慣れぬと暮らされぬそんな時代に生きるかわれは  
コロナ禍はデジタル文化を加速せり訃々と打つチケットの予約  
砂の上に立てるような心地せりプライバシーが漏れゆく怖さ  
つい便利、ネットで検索、親切「私の好み」あばかり不気味  
便利なるスマホは頼れる秘書のこと使いこなせるよう精進  
家籠り続いたあとは皆マスク表情みえぬ人らと向き合う

「デザイインにぼれて求めし水そうに熱帯魚泳がすこの夏の一歩  
「ただいまー」すぐに目につく熱帯魚インテリアになど思うを恥じる  
LEDのひかりに映えるネオンテトラ20匹の背に癒される夏  
水そうにポンプや水草、LED 熱帯魚らをインスタ映えする  
一円玉日赤募金のなき今は小銭の行方賽銭箱かな  
つり銭の手渡し控えるコロナ禍にキャッシュレスの衛生的なる  
「ポイントで還元します」がはびこりてポイント要らぬの考え方あらたむ

西 畑 瞳 子 箕面山

・大

野 玉 幸 妖精おどる

・洛

こんもりと山桜さく箕面山遠見なれどもやさしさもう  
背の高き若竹林みあげれば初夏の日差しの通り抜けゆく  
三千院の庭の杉苔雨にぬれ色あざやかにもみじ葉に映ゆ  
選抜の丸刈り頭の夢舞台ひと試合なれどキヤップは空へ  
老い人は杖つき我が家を訪いくれぬおすそ分けだと王林三個  
どこまでも吸い込まれそうな青空を裂くがにそびゆ一機のクレーン  
わが母の召されし歳越え仏壇の遺影に話すこれからのこと

新田とし子

風

・沖

萩原嘉津子 欠伸

・宙

まれにみる大型台風接近ともうそれ聞きて極度のおそれ

とも角も備え備えとりとめなく要領得ぬまま台風それた

台風去り友の体調気になるもコロナで病院訪問許さず

今朝ふいに父への記憶よみがえる父よと呼ばば六十余年の日月

ふゆトマトこの時期はないとせめられて昭和の小学生私のくやし涙

それ程の読書家にあらざれど日月が私の本棚いびつにかたむけ

意味深に歌うか好く語りかくその内体形ふつくらよと孫

根岸亮

真実

・鴻

八田暁美 紡ぐ

・羊

すさぶ夜の雨は歌のにおいしてすれ違いたる無灯火自転車

はだら雪微力ながらに雪ながら人に汚れしわれを包みつ

ひと匙に掬えるスープは一日の祈りにも似て皿に零れぬ

冬の日の薔薇の花殻つみながら親しく刺にさやりし君はも

預金通帳の残に互いを比べつ「美しい死」などないと言ひ張る

細やかに眞実のみを拾わんと君の言葉に頷かず聞く

滴飛ぶ列車の窓に灯火見ゆ、過去の私は消したはずだが

湖の上羽衣のことなびく雲夕日とともに比良に入りゆく  
「道成寺」満席の舞台乱拍子に千の眼は微動だにせず  
連弾のピアノが醸す第九の曲小雪の精がまいおりてきた  
二人の手鍵盤の上すべりゆく妖精おどる第九の世界

今日の空昨日と同じどこか違う 雜煮を祝い石山寺へ

真如堂の屋根に白きが乱舞する待ちこがれたる雪舞い遊ぶ

人間を数字で処理する時代なるかマイナンバーが主導なるらし

萩原嘉津子 欠伸

・宙

一日中家に籠もれる私にはマスクも薬も不用物かも

ガラス越し大きな欠伸を二度する今日のこの時二度とはこない

隣家の猫を見つけて語りかけるきみもコロナにかかるかもよと

幼子にお手玉教え交流すゲストティーチャーと呼ばれ張り切る

幼子に兜の折り方教わりてよく似合うよと笑ってほめられる

テレビにて信号渡る人映るマスク無き人一人もいない

ミシン踏みマスクを縫いて一息つくコロナの収束強く願いて

八田暁美 紡ぐ

・羊

浜脇景子 花芽

・夢

日吉睦子

雨

・伊

近頃の暗いニュースの日々のなかシンビジュームの花芽の希望  
かわらずに肌にやさしい青葉風カタカナ言葉のコロナ対策  
扇風機まわして朝の換気をする緑の風は部屋に満ちたり  
不安にて沈む気持ちを引き上げる五月の若葉わが前にある  
ニュースでの世界の情報のきびしさに心のきしむ水無月の朝  
咳ひとつクシャミひとつが人々の不安に満ちた視線あつめる  
さまざまな野菜売り場のトマトたち青臭くなく全てが甘い

林 清江 キバナコスモス

・朱

線路沿いにキバナコスモス咲き群れて真昼駅舎に人影はなし  
夏ばてを防がんと日々自家製のオクラ モロヘイヤ ゴーヤも添えて  
コロナ禍の温泉街に若者らは浴衣捲り上げ足湯に浸かる  
ゆくりなく佐野厄除け大師に立ち寄ればコロナ撃退の絵馬札並ぶ  
八ツ場ダム数多の民家水底に水陸バスは湖面を進む  
かみ合わぬ心抱きて一人行く万葉の森に山法師さく  
秋たちぬこの夏に友遡きたれば喪失感のいや増しにけり

原田元子 命日迎うる

・鳩

昨日までと何も変らず先を往く夫を目指して命日迎うる  
ばつぱつと己の来し方語り出し半ばで夫は全て閉じたり  
先々へ話を飛ばす我をして窘めくれにし夫は遠くへ  
常の日は言葉少なき夫にして我の理不尽いつもたしなめ  
先に立ち喋りをするなど云いし夫今吾の独り言を聞けるか  
“お父さん”仏壇の側通ごと声をかければお鈴が響く  
独り居るを嫌いし夫に今の我的の思いをさせず少しの幸とす

風に舞う花のひとひら受けとめて散りゆく命のはかなさ思う  
電線に音符のことく並びて小雀の声春を告げ来る  
大切なひとつ諦め日の落つる片手にレモン握りしめつつ  
ヨロヨロの今を生きると言う人の言葉そのまま我が暮らしあり  
ねむの木に寄りそごとく赤き花心を癒すハーブのかおり  
降りやまぬ夜半の雨にめざめれば線路工事の金属の音  
母逝きて蝉時雨降る夕暮に涙ひとつ白ゆりに散る

深井喜久代 白紙にむく

・信

休校の庭の桜木はな咲かせはな散りをへてだあれもあるない  
雲浮かぶ五月の風の野に出でて働くコロナ禍マスクはつけず  
家毎に咲かす鉢花似通ひておもひおひの趣の見ゆ  
言葉ひとつ胸底にあり筆の先とのへながら白紙にむく  
かたはらに置いて記せる歌ノート綴ぢ目にひそむ消しゴムのかす  
道の端にうち捨てられしマスクいくつコロナ禍の世の片隅を見る  
人知れずほそきひと筋振花の草なかの紅見惚れ竹む

深山嘉代子 背

・昂

ランドセル背負う小学一年生見ぬ春四月この昼下がり  
希望という衛星よきる夜の空夫と二人さがすひかりを  
亡きははの語りしことあり被服支廠軍服縫製なしたるところ  
皆実町の被服支廠跡の煉瓦づくりさびつく窓枠風が冷たい  
吾を背負い焼け跡の倉の前に立つ母見たりきと言いし人あり  
八月の瓦礫の町に吾を背負い歩きまわりし母まだ若き  
ひとときを我が家にすこし帰る夜タクシーに乗る母の背丸し

福岡和子　流る

・洛

ふじとよひこ　台風

・台風

・そ

青空にさざ波打たせ樟若葉智樹院の苑五月の流るる  
青葛の描きゆく壁画はやばやと小さきビルを巡りそめるし  
ネックレス指輪ブローチしみじみと用無き品となりしを見つむ  
追羽根も風揚げもせぬ今の世は児らもくもくとスマホに見入る  
この冬は雪降るを見ず春立ちて初雪の舞ふ人ら戸惑ふ  
日々重くニュース流るるコロナ禍よ医療関係心労思ふ  
飲む水も手洗ひ水も豊かなる清しき水のありがたさ沁む

福島三重子　米寿

・習

それぞれに上り下りの段ありて人は試練とたかきを上の  
いくたりの思ひをのみて立ちつくすか山門わきのお百度石は  
うつくしき衣いち枚まとふこと齡かさねたし米寿をすぎて  
咲きのこりの花さへ愛しと思ひつつそんな老後をゆるりと生きむ  
つがなく気のむくままに過ごして励まされつ予定をこなす  
出る釘の打たるるなかれ字あまりの効果のやうな老い今を生く  
では又ね又のある日を疑はず杖つきあひて立ち話する

福水佐知子

夫の米寿

・甲

仏前に米寿記念の銀盃を供え早世の父母を偲びぬ

「先生もおだいじにして下さい」と馴染みの患者さん労いくる  
幼き日注射いやだと泣きし子も親子三代孫を連れくる  
休日はテレビで競馬観戦す一喜一憂夫の楽しみ

山好きの夫に手引かれ山山に登りし若き日夢のことく

いつもいつも吾を劳りくれしあなた二人でゆっくり歩きましようね  
夕映えのメタセコイアの並木道歩めば優しき光につつまれ

強大な台風予報ガラス戸にてープをはじめて米の字に張る  
時折に電線うなり街路樹の吹かれるままになびき伏せけり  
雨戸締め防災グッズ調べてなす術のなく通過を祈る  
吹く風に合わせることに電燈の消えたり点いたり返しけり  
台風去り星のまたたき夏の夜の大三角形人々見付く  
海近くみどりの深き山裾にそよぐことなく白き竹叢  
油蟬鳴かずなりけり病葉の親木離れて耀いて落つ

藤川淳子　夫

・習

こさかしいもの言いをしてほぞをかむ無口の夫は言い訳もなし  
すぐやろう先のばしすると忘れるよ夫の口癖ありがたく聴く  
いつよりかゴミ出しが夫の役となり助かってます感謝してます  
抱き合う凶柄がいいとマグカップをプレゼントする未婚の子より  
半欠けの月はわすかに傾きぬ暇する母への思い残しつ  
ようやくにねらい定めて抜く白髪頭皮びりっとああ生きている  
大勝軒のラーメンにおう店先はスマホ片手の若者の列

筆谷幸子

雨水

・習

雨水という調べ優しき今日飾る女雛男雛を一年ぶりに  
甘酸ゆきサマーオレンジ口の中に広こりしばしコロナ忘るる  
松川の流れに大枝広げいる桜さくらに身の内染まる  
入学を待つ孫の服とランドセル掛けられしまま五月に入りぬ  
風を切る燕はいかに思うらんコロナウイルスに惑う地球を  
猛暑日の続く日常となるめぐり感性鈍る夫も我も  
優しき風優しき雨も変身し猛威をふるう叫びのことく

本元由美子

「心愛」といふ名

・岡

牧野君代

彼岸花

・習

生きる意味の答求めて寝ねがたしあしたの朝餉の汁の実思ふ  
辛きこと積もれば登るこの峰星山が凜とわれに對峙す

梅雨暗れに列なす蟻を見つめりわが人生に言ひ訳はなし  
公園のベンチに寝転び大樟の初夏の香りを終身に受く  
ああ五月空に手挙げて深呼吸自宅勤務の休憩時間

耳搔きてくれた父のぬくき膝香き思ひの定まる処  
「心愛」とふ名をぞつけたるその親が絶ちし命の間ぞ哀しき

本田昌子

肩のぬくもり

・福

ベッドの上のわたしを襲いし阿武隈の氾濫水は街を呑みこむ  
大型の冷蔵庫また食品庫ああどうしよう汚水に浮いてる  
意識なき身は危うさもわからずにただ眠るのみとうわたしは知らず  
生かされて何を哀しむおぼろげな記憶を紛ぐべッドにひとり  
夕雲を追いやく夫の横顔のそのさびしさは老いとはちがう  
今を生きる体力静かに枯れてゆくその先の余白思い描けず  
静けさが寂しい夜に代わるべき肩を寄すれば肩のぬくもり

本田良一 人生命

・熊

町田龍子

国家予算

・湾

冷えの増す庭の千両赤々と早出を渋る我を押したり  
立ち上げしシニアクラブの二十年奇しくも令和の初年に巡る  
親しめる朝のドラマに聞こえくる遠き軍歌に思わずほろり  
戦争のドキュメントには知らざりし母の思いを『沖縄』に読む  
歌集読む傍らに聞く蝉の声ふいに消えたる後の静けさ  
台風の過ぎたる朝掃く庭の落葉に混じる蝉のなきがら  
氣の遠くなりし暑さの何処へか墓邊に白き彼岸花咲く

老ゆるとは何、知らぬ間に「參寿」とうなにを望むやひとりの日日に

大腸の検査の友に付き添えり主治医の瞳のいともやさしき  
入院の説明受けし夕まぐれ秋桜ゆるるありなしの風に  
手術終え結果を待つ間の長かりき刻のながれのせつなく寂し  
生業に真摯に向きあう友なりき応えてゆかなその時どきを  
わが友は言葉の魔術師この朝も胸処にすしりと入り来て戸惑う  
みちのくの空をも飛ぶのかF・35国家予算をコロナ対策に

松井春枝 水滴

・伴

青空と雲を従え太陽は人の営み支え続ける

西日射す窓の外では南天の緑の葉影が直射を防ぐ

目的地スマホが教え指示通り歩む人間ロボットなり

体力は我的の意向に添うものと中年までは考えていた

風吹けば梅の花弁がはらはらと雪舞うごとく散り急ぐ

梅の葉に光る水滴又一つ揺れた枝から土面に落ちた

ウイルスは世界各地をとび回り人間達を脅かしている

己が身の愛おしければ人の生命同じと思え今世つくづく  
春の田にれんげ一面真中に美伸顎子の幼き笑顔

ひさかたの雨降りおりぬ連の葉に水玉ころげ葉がゆれもどり

天地は広しといえど風雜人並越えて感染止ます

寒梅の強き運気にかけて待つわが心中を根元に埋めて

七夕に色も形も様々に妻のタンザク天の川まで  
名さします何処デモクラシー、トランプで星条旗の星放り放りとなる

松井みね 清白

・伴

丸尾悦子 兄の想ひ出

・岡

枝えだの撓み円満にさがりをり。戯れ幼手に添ひ ゆすれをり  
土ぬくむ畑に誘はれ 温温と。水菜茫茫と 楽しき春べ  
清白と書く大根の白さかな。吾は濁なく 在りたしと食ふ  
清白の輪切の十字透かし見ゆ。この上何を 清めたるかに  
清白菜きさむ手につゆあふらしぬ。白飯にあを 際立たせたる  
暖冬に菜園のなは味氣なし。惜しみ踏みふみ 土に返らす  
殖ゆる菜の芽を まびきしつつ黙したる。ベビーブームの我が生を視る

松瀬トヨ子

ひかりの尻尾

・沖

雲間よりひかりの尻尾がのびてきて足許でらす夕暮れの帰路  
表情の見えぬマスクの人の顔まなこに知れり心の動き  
揺れまーす運転席から声のして介護車ははしるガターンとはしる  
目に見えぬものとの戦いに気も萎ゆる文字ていねいに書きつぐ日誌  
雷鳴は誰のするどき音のなし停電の夜のたましいを衝く  
家ごもるひと日暮れゆく低空に基地へ降りゆく米軍機  
光る海藍澄む海辺行きゆけば泥に埋もれる辺野古崎見ゆ

真庭郁子

秋の午後

・朱

三田享子

庭の木

・福

かみつけの名古屋の夜は冷え厳し兄の外套に包まれて帰る  
六年生の吾を乗せたる馬兎きて名城の広場を兄は巡りぬ  
伝馬船知多の沖邊に漕ぎ出でて兄は歌ひぬ「青い背広」を  
松坂屋のデパートに兄の買ひくれし赤き万年筆もいつか失ふ  
大須観音の巨大な提灯見上げつつ兄の武運ひたに祈りき  
家具調度なべて後輩に与へたる兄は学へよと電気スタンド呉れき  
さくら散る駄頭哀し日の丸の旗に送りし兄は還らず

丸山紀代子

白鷺

・信

さみしさは空の奥処に湧き出でて短き夏の百日紅散る  
役目終へ燃え尽きたりし「こうのとり」銀河に消ゆる黙ししままに  
鮮やかに王位の座を占む藤井棋士十八歳のちから消しも  
たちまちに湧きて押し寄す白雲に「おーい」と呼ぶか 今日は立秋  
絵手紙の秋茄子紫紺に染め終へて母の茄子漬遠き記憶の  
雨の日の静かな午後に三人来て「終活セミナー」しきりに誘ふ  
暮れ残る西空遠く大富士の藍より染めて闇へ溶けゆく

新型コロナを洗い流さんと夫は庭木に水をかけやる  
庭の木々好天に恵まれ生き生きと我の心も息づくよう  
庭すみに枝豆を播きネットをかぶせ夫は雀の防害につくす  
孫の家族大型連休に自粛の知らせ我はさ庭に花の種まく  
息子夫婦休日はいつも来てくれる昼餉は手づくり楽しく過ごす  
夫とわれ卒寿はすでに越したれど新型コロナに負けずに行こう  
好天に夫はフラワールームの洋蘭一鉢を壇前に供う

光岡詔子 晩夏

・羊

宮崎りつ子

友人

・う

川に映ゆる原爆ドーム揺らしつ古式泳法七十歳が見す  
代搔きを終へたる田圃あまたなる鳥の寄り来てしばしの樂園  
さくらさくら多くが詠ふさびしさの限りなくして木に登る蛇  
蛇の尾を掘みて捨ててゆくをみな晩夏のひかりをこなごなにして  
とがりたる心を和ます使者ならむ庭に山鳥の求愛ダンス  
隣屋の離れてよかり休校の続く少年雄叫びあぐる  
庭先の木の天辺に巣づくりし鶲の子育て自爾なかりき

光広祥子

・昴

化粧水ほほに冷たき朝に聴く心さわがすニュースのつづき  
住職の手書きの「心聞」届きたり手作りマスクの図解もありて  
あの夏を語ることなく過ぎし叔父八月六日のそのち生きて  
怒りには遠く静けきあかるさに生き抜きし叔父の心奥今に  
なんとなく残りの一世人と思わせてときおりのぞきし母の諦念  
この世には親とよぶべきひとのなき夫と私秋よりの日  
白き花ざんかつばき咲きそめてそれぞれ一輪帰りゆく朝

水本セツヨ

看護師

・沖

毎日を理不尽な老人看ておれば我が老ぬるが怖く眠れぬ日のあり  
コロナ禍でなすすべもなく一人居は寝たり起きたり三日連休  
咳くしゃみ身に受けて見る看護師を今なお続くるを友笑う馬鹿と  
てきばきと働きし日をもう一度味わいたくて摺り足を上ぐ  
買い溜めのトイレチリ紙を依存だと怒りし子等今貰いにくる  
半年に一度の清掃久し振り町内の人と触れ合う日なり  
半分はコマーシャルのドラマ観て興味失せつつ見入る一人居

ざわめきは車の過ぎる音のみであかつきの庭音沈み居る  
爛漫と浜ひるがおの咲き出ずもマスク掛けたる人まばらなる  
病む友へ寂しかろうと思えども見舞い叶わず日が暮れて行く  
米寿来て畑に立てる伴せに友の好みの芋苗植ゑる  
身近なる友ら二人も脳梗塞老いたる吾は只茫然と  
肩ならべ友と飲み合うお茶たのし銘柄問わず旨きを讚える  
入院の友の笑顔の写真見て日頃の瘤りほどけて帰る

村石けさ子

初秋の頃

・鳴

日日使う石けんに倦みコロナに倦みバラの香りの石けん買い來ぬ  
知人言ひき引揚げ船に麻疹の娘を安部公房に診てもらひしと  
舜天の八月尽の風の下狗尾草は秋を誘う  
ひと夏の終りを告ぐるや北東の風オホーツクの海より來たる  
西空に微かに秋の雲浮かび夕陽の光は季節を分かつ  
新聞の書籍紹介欄を今日も目を皿にして読む楽しみ  
甲斐路ぶどう口に含めば若き日に睦みし友のこと思わるる

村上旭

ルネサンス

・鳴

今少し近くにあらな赤赤と待ちてくれるる郵便ボスト  
天園の道を行くこそ楽しけれ寂しく見ゆる背の下りぬ  
読み方に強さ感じぬ「シーザー」に俺のことかとカエサルの言ふ  
寂しかる歌詞に添ひたるメロディにテレサは終に声を詰まらす  
日本に面倒ありやおほかたは觀念持たず平和に暮らす  
一匹の羊となりて跪くテオドシウスを大帝といふ  
ルネサンスの咲ける最中に拉致されてキリスト教徒は慈悲にされき

村上康子 ほのぼのとして 湾

街路樹は裸木となり凜と立つしがらみ捨てえぬわれを横目に  
さらさらとそよぐ青葉の続く道、幸しみじみとこの地に生きる  
雨上がり土手の草木を巻き込んで葛の勢い歩道に迫る  
三人の子を連れ歩く若き女に「がんばってね」の思いわきくる  
子等とパパの声の弾める公園にほのぼのとして安堵の心  
擦れ違う数多の人のマスク顔コロナウイルスへの怖れを見せて  
ウイルスは日日に変化の兆しあり問われているか地球のわれらは

餅井辰視 もう秋だ

・羊

立ち位置を線で区切りレジを待つ「出来合ひ弁当」二つを持ちて  
行こ行こ」と先に導く妻かなし彼岸花咲くあの稻原へ  
草刈り機底よりひびき稻熟れし谷に人居る意配したしき  
たわむれに妻を抱けばなんという胸の薄さよ骨に触れつ  
丹精の大菊の葉を食い尽くすオンブバッタは首切りの刑  
大菊の花芽膨らみ行く朝な妻よしばらくもの言わす居よ  
大切にすると誓いて六十年妻はかなしき叱ること多し

桃原佳子

九月

・沖

両角徳子 出穂

・信

午前三時家近くを通るトラックの地面搖さぶる音の聞こえくる  
朝まだき訪う百舌の声聞く涼しき秋と共に生きおり  
これまでは何處に居たのか台風の過ぎて湧くことく雀来ており  
プランターの苦瓜の花に蜂たちが今朝はしきりに入り出している  
リハビリ終え水分補充して二時間も静かに待ちいる診察室前  
ひとりなら飯と味噌汁で済ます昼沖縄そばをあたふたと作る  
秋空の青さながめコロナ禍の憂うつな今日を一日生きゆく

森ヒロノ 拍手で送る 福

血管をさがして幾度も針をさす点滴よ無事に通れと祈る

医師として働く嫁は日直とう元日出勤を拍手で送る

耳も歯も文明の利器に支えられ八十二歳今が青春

ヒヤシンス蕾いだきて芽を出しぬ土から春への希望わき出る  
亡き姑の三春は桜花さかりコロナは来るな負けるなと咲く  
欠かさずに参加して来しメーデーよ今年はコロナで中止となりぬ  
律儀にもカボチャの花は雨の中黄の色深く咲き続ぎおり

森川淑子 日韓併合の頃

・大

京城への車窓から見渡す野山の景ほとんど木の無き低き禿山  
半島に薬業を以て身を職を奉する者の感慨ふかし  
創業の初代は開拓の意氣盛ん資金携ふる長男おほし  
東大門市場へ母とゆく道にオモニとキチベは川にて洗濯す  
なめらかな岩なりて流れたる川にて棒で叩きて洗ふ  
橋下に広ぐる白き洗ひもの風にふくらみ女はくつろぐ  
一服し乾ける白き洗ひもの頭上に戴き腰振りて去る

## 二〇二〇年の地中海

この四月より現体制での第五期目に入りました。

編集部は、これまで編集委員としてご尽力くださった朝井恭子さん・奥田陽子さん・浜谷久子さんに代わって、木村文子さんと玉井綾子さんが加わり、メンバーの入れ替えがありました。総務部については今まで通りです。

主宰や代表・発行人を置かない現在の地中海にあっては、本社に集まつて作業や会議をする機会をよりいつそう大切に考え、共通理解をもつて運営していくのが、今年の年頭に確認し合ったことでした。

ところが、新型コロナウイルスの感染拡大ために、本社に集まつての実務委員会はできなくなり、全国大会も中止にせざるを得ませんでした。編集や校正も四月半ばに六月号の編集作業をしたのを最後に、本社に集まつての作業は控えています。

五月以降の校正は分担して、それぞれの自宅でやってもらっています。(校正協力者)関根和美・茂木・藤田・大浪・永塚・田土成彦・田土才恵・三好・久我、及び新樹の会の大寺・宍戸・鉄地川原・江尻、伊豆支社の阿藤(敬称略)編集作業は、原稿を久我宅に送つてもらい、本社に届いた分は磯田さんに転送してもらって作業しています。編集会議はメール等で編集委員と連絡を取り合い、毎月の発行に支障がないように進めています。本社に届く結社誌や総合誌、各種届などの郵便物の処理のために磯田さんが月に何度も通つて、郵便物の転送や問い合わせにも応えてくれています。

発送の宛名シールの打ち出しや名簿の管理、収書番号の登録などは藤森さんが、原稿用紙の対応は茂木さんが、会計処理は永塚さんと大浪さんが、それぞれ自宅で連絡を取り合いかながら滞りなく仕事をしてくれています。名簿の発行もできました。

本社に集まつて直接話をしたり作業をしたりする大切なことを認め合つたことは、思いも寄らなかつた新型コロナウイルスのために適わぬことになつてしましましたが、とにかく毎月「地中海」を発行することを第一に考えてやっていこうと、むしろ結束は固くなつてゐるようです。

この状況の収束がいつになるのかも分からぬ閉塞感の中で毎月「地中海」が届くのを楽しみに待つててくれる会員の皆様の声が聞こえています。頑張らねばと思います。皆様もなんとかこの状況を凌いでください。短歌によつて少しでも不安や憂鬱を追いやつていただければと願つています。(久我)

### ● 訃報 ●

十月二十六日、柏原宗一様がご逝去されました。

享年八十四歳。四月に入院され、その後退院されてご自宅で療養されていましたが、最後は大船の病院でご家族に看取られ旅立たれました。

地中海の総務部長、羊ヶ丘一郎のグループ長、更に香川美智子夫人の亡き後は発行人としてもご尽力くださいました。思いやりに満ちた温厚なお人柄を偲びつつ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(地中海社)

# クリップ

書きください。支社・グループでまとめて納入していただけると幸いです。

## ■ 入会届・退会届について

葉書に、①氏名(ふりがな)

②住所 ③電話番号 ④生年月

日 ⑤性別 ⑥送本開始(停止)

月を記入の上、本社に提出して

ください。退会届の場合は、①

②⑥の記入をお願いします。急

な送本停止には対応しきれませ

んので、ご了承ください。

## ■ 会費納入について

一〇二〇年度分の会費を未納の方は納入してください。会費は、半年分、または一年分を前納することになります。

## ■ 本誌の追加注文について

本社に葉書にて連絡ください。代金は一冊一〇〇〇円。会費と同じ「地中海社」の口座にお願いします。

## ■ 見本誌について

勧誘用に見本誌をお求めにな

る場合は、送料のみご負担いた

だきます。一冊までなら一〇〇

円分の切手を同封してお申し込

みください。

二十歳未満の学生は五〇〇円

です。(若い人たちも是非ご勤

務ください)

## ■ 歌集を出版する際には

地中海叢書番号を請求くだ

さい。葉書に住所氏名の他に、

左の口座へお願いします。

①歌集名(未定の場合には仮題

でも)②発行時期 ③版元を記

入して本社宛に。折り返し、登

録した叢書番号と事務手続きの

文書をお送りいたします。

## ■ 原稿用紙の申し込みについて

出版後には本社保管用に一冊

お送りください。

## ■ 九曜書林は、比較的安価な歌

集出版を考えていて、自分では

どうしていいか分からず困って

いる方のために立ち上げました。

印刷・製本は、本誌の印刷をし

ている京成社にお願いしていま

す。一、三〇万円くらいでも予

算に応じた出版が可能です。ま

たは、編集部に相談ください。

## ■ 桃原邑子歌集

「沖縄(新装版)」注文受付

この注文を受け付けています。

一冊2000円(税と送料は

原氏負担)です。六花書林から

の出版ですが、代金の振り替え

は九曜書林の口座を使わせてい

ただきます。口座への代金納入

をもってこの注文とさせていただ

きます。冊数・氏名を明記の上、

葉書か封書でお願いします。

## ■ 本社への連絡について

電話はありますが、常駐する者

がおりませんので、誰かが本社

で作業している時にしか通じま

せん。急を要する場合には、

藤森・田 090-8301-6423

・久我・田 & 043-241-7925

までこの連絡ください。

## ■ 本社の窓口は、いつでも開いています。

どんなことでも遠慮なく相談ください。

歌集の出版につきまして、予算やこの希望に応じてできる限りの対応を

させていただきます。この意見その他もどうぞお寄せください。

10月20日、上石不二子さん

に逝去。享年93歳。

すでに退会されていますが

## ● 計報 ●

10月20日、上石不二子さん

に逝去。享年93歳。

すでに退会されていますが

お知らせいたします。

00180・2・790055 九曜書林

本社よりスマートレターにてお送りいたします。

## 神田通信

### ◆歌稿の送り先について●

今年度中（2021.3.10締切分まで）の月々の歌稿の送り先は、

263-0031 千葉市稻毛区稻毛東  
6-10-2-1202

関谷方 久我田鶴子

です。

新型コロナウィルスによる状況が落ち着くまで本社に集まって作業することを控えています。

よろしくお願ひいたします。

◆茶道の稽古が再開した。飲み回しは無理なので、濃茶は一人一碗の各服点。これなら抵抗がない。ウイズコロナ、変わったのは働き方だけではない。

（高尾）

◆亡くなつた友人宅が解体されるという。処分される膨大な蔵書には貴重な書物も多く、二十一冊ほど頂戴してきました。整理しましたばかりのわが家の書架にまた本が増えてしまった。（藤田）

◆猛暑の夏から短い秋を超えて（磯田）

◆「やめれ」という言葉が方言と知りました。「やめれば？ やめた方がいいんでない？」全く違和感がないです。（笑）（木村）

◆はやも暮れゆく子年。豪州に住む子年の長男が子年の長男を授かた。日々送られてくる画像にこちらも泣いたり笑ったり。来年は抱けるかな？（和美）

◆白い船 セーラー服と機関銃、さよならの夏、セーラームーン、空も飛べるはず、みだれ髪、そしてワルツは続く、ジャズ組曲

第二番を続けて聞く。（三好）

◆今年の「酉の市」は、参拝もお札も熊手もすべて予約制とのこと。何だか興ざめだ。暮らし方も変化したが、楽しいことを見つけてまいりましょう。

（磯田）

◆息子の小学校は運動会もしない中、バスでの社会科見学は実施。参加不参加は家庭で決め、不参加でも欠席扱いにはしない。

◆グループの歌会のあと、県北のなかまから、わが家の田んぼの新米です、と嬉しい贈り物。

◆亡くなつた友人宅が解体されるの香。すっかり秋です。（柏垣）

◆今日は10月20日ですが、12月号の「神田通信」を書いています。こんなふうに、編集は常に反映できず、申し訳ございませんでした。（担当・田上成彦）

◆「やめれ」という言葉が方言と知りました。「やめれば？ やめた方がいいんでない？」全く違和感がないです。（笑）（木村）

◆『戦後の短歌』という文庫本を手に入れました。23ページから24ページにかけて、香川進

『水原』から12首が引かれていました。「児がために求められない風車老いたる兵の吹きほけである」（崩壊）を冒頭に読みました。（茂木）

◆季節のアンソロジーは、養学登志子氏の、冬の「生きる」。厳しい環境の中でも逞しく、しなやかに生きるものたち。

◆12月号は自選号です。この一年間の自作を振り返りつつ、来年の心の準備を。編集部は次期オリーブ集の選考に入ります。

◆「やめれ」という言葉が方言と知りました。「やめれば？ やめた方がいいんでない？」全く違和感がないです。（笑）（木村）

◆『戦後の短歌』という文庫本を手に入れました。23ページから24ページにかけて、香川進

『水原』から12首が引かれていました。「児がために求められない風車老いたる兵の吹きほけである」（崩壊）を冒頭に読みました。（茂木）

◆季節のアンソロジーは、養学登志子氏の、冬の「生きる」。厳しい環境の中でも逞しく、しなやかに生きるものたち。

◆12月号は自選号です。この一年間の自作を振り返りつつ、来年の心の準備を。編集部は次期オリーブ集の選考に入ります。

### ●お詫び

（久我）

### 十一月号の「写真歌合せ」

にメールで投稿いただいた方に歌が手違いにより漏れてしまいました。折角の「投稿を誌面に反映できず、申し訳ございませんでした。（担当・田上成彦）

「地中海」12月号・通巻751号・編集人 久我田鶴子・発行所「地中海社」  
〒101-0054 東京都千代田区神田錦町2-5-9 神田カトランビル402号・振替 00160-4-179569  
電話・FAX 03-5280-8877 <http://www.tityukai.com/> 1000円 印刷・京成社